# 空手道教範



空手道教範

富名腰義珍著

空手師範 富名腰義珍 著

# 空手道教範

東京 大倉廣文堂 發行

舊琉球藩主侯爵尚昌閣下書



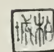
海軍大將竹下勇閣下書

不為事先動
而輒隨

勇書



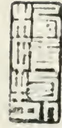
聴於無聲
視於無形
昭和乙亥春
武次書

陸軍大將元侍從武官長男爵 奈良武次閣下書




宮中顧問官海軍中將子爵　小笠原長生閣下書







著者所感



著者小照

# 序

慶長年間、島津氏の琉球入以來、武器を取上げられた沖縄人士が、拳骨の活用に思ひを凝らしたであらうことは當にあり得べき事である。空手即ち沖縄の拳法は主としてこの拳骨を以てする獨特の武術である。沖縄では往時より斯術の達人を武士(「さむらひ」の意にあらず)と稱して居る。

空手の拳骨は大體に於て打つに非らずして突くのである。打たんと欲すれば之を振り上げねばならぬが、突くには之を腰に構へることを必要とする。我々沖縄人は先天的に空手の「こつ」を心得て居る者と見え、子供の喧嘩からして既に體の構へが他府縣の風と異なるのは不思議である。

明治四十年の頃と記憶するが、斯術の先輩が苦辛して空手を體操に組みしものを縣下中等學校の體育科目に採用せらるるに至り、爾來今日まで青年學生の體育と士氣の向上振作とに貢献したることは實に少くない。

また畏くも大正十年三月　聖上陛下海外御巡遊の途次沖縄に御寄港あらせられし際に、選拔

學生の空手體操を　天覽に供したことは斯術にとりて此の上もなき光榮と申さねばならぬ。

往年八代海軍大將が第二艦隊司令官在職の節沖繩に巡航せられ、この體操に感心せられてより海軍部内の注意を惹き、當局は機會ある每に之が體操としての價値研究に努められ、大正元年春、出羽大將麾下の第一艦隊が中城灣に寄港した時は、艦隊の下士官十數名を選拔し、縣立第一中學校に寄宿して約一週間稽古せしめられた事もある。

私も微力ながら之を海軍體操として採用せられる事に盡したが、餘りに攻擊精神に富んで居るので、血氣の輩が之を惡用する恐れありとかの理由で遂に採用せられなかつたことは遺憾千萬である。

富名腰氏は五十年來斯術の硏鑚に身を委ねその造詣極めて深く、前述天覽演武の砌、指導者たるの名譽を負うた人であるが、この貴重なる寶を僅かに一沖繩の狹隘裡に埋木と爲すに忍びず、廣く之を全國に擴めんために一書を著し、序を私に求められたのである。

熟々現下の風潮を察するに、青年子弟が小は身を立てて正しく、大は國家の重きに任ずるに、一番大切な事は質實剛健の氣象ではあるまいか。而して之が養成は尙武の精神に俟たねばならぬ。卽ち體を練り術を磨き、胸中自ら賴む處ありて始めて庶幾し得るのである。此の點に於て





空手は柔道・劍道等と優に肩を比べる事が出來ると思ふ。

世間の一部には軍備制限の意味を履き違へて、尙武の精神までも侮辱しようとする狼狽者がある。今日私は本書が一般青年に迎へられて斯術の趣味を喚起し、以て體育を旺盛にし、士氣の振作に資せんことを望むでやまぬのである。なほ本書の上梓に際し、著者其の人を得たることは此の上なきよろこびである。

海軍少將　漢那憲和

# 自序

今から十數年以前、余が空手道普及の目的を以て遙々上京し、始めてお茶の水の教育博物館に開催された文部省主催第一回體育資料展覽會に於て空手の說明をした當時は、空手といふ名稱さへ知つてゐる人が殆んど稀で、まづ以て「空手といふものは琉球古來の武術で身に寸鐵を帶びずして云々」と、一々由來から說明してかゝらなければ分らない有樣であつた。其の後引續いて法曹會・講道館・戶山學校などより招聘され、空手についての講演及び實演を爲したのを始として、幸ひに有識者間に其の精神と効果とを認められるに至り、大正十一年の秋には多方面よりの希望により「琉球拳法唐手」なる小著を公にして、聊か空手に關する文獻の提供を爲したのであつた。何せよ、匆卒の際に筆を執り、而も僅々一箇月程の間に脫稿し上梓したので、不備な點も多く、自らも大いに慊らなかつたのであるが、翌十二年の大震火災に紙型を燒失したので、更に書肆の要請に委せて改版し「練膽護身唐手術」と改題して印刷に付したが、此の時も多忙の爲に十分に改訂する事が出來ず、殆んど版を改めたといふに過ぎなかつたのは誠に遺憾であつた。然るにこの小著が思ひ掛けなくも、天覽・台覽の光榮に浴するを得たのは誠に身に餘

る面目で、欣喜且汗背を禁じ得なかつた。

爾來歲を閱すること十餘、當時名稱をさへ知る人もなかつた「空手」が今日では日本全國は勿論、遠く海外にまで知られるに至り、殊に東京に於ては慶大・早大・商大・拓大・日本醫大・中大・一高・帝大などを始め、各大學では爭つて空手部を設立して其の研究を行ひ、其の他の各官廳・會社・商店などに於ても「空手」の研究に手を染めるもの多く、柔道家の間にも多大の關心を持たれるやうになり、劍道・柔道と共に日本獨特の武術として一般に認められるに至つた。之を十餘年前、始めて小著を公にした頃に比較すれば、實に今昔の感に堪へないのである。一昨年來、寸暇を割いて、多年の懸案となつてゐた小著の改訂に着手したが、十餘年間における研究と體驗とによつて改められた技や名稱も多く、且前著が如何にも不備と思はれるので、斷然稿を改めて執筆し、約一年餘の歲月を費して玆にこの書を公にする次第である。この書の目的とするところは、現に「空手」を學んでゐる人や、嘗て學んだ事のある人々の參考書たるは勿論、未だ「空手」の何たるかを解せぬ人々にも、獨習し得る樣にと心掛けて、極めて平易・懇切を旨とし、總論・組織・基本型・組手・女子護身術・人體急所解說と綱目を分けて圖示解說したから、初學者の爲の空手の獨修書としては殆んど完璧に近いものとの自信を持つてゐる。



たゞ紙數の關係上、十分說明し得なかつた型や組手、及び初學者には難解かと思はれるので省略した所、何れ次の機會に詳述しようと思つてゐる。

なほ、本書の爲に特に裝幀の勞をとられた小杉放庵畫伯、題字を賜はつた海軍大將竹下勇閣下・元侍從武官長陸軍大將男爵奈良武次閣下・宮中顧問官子爵小笠原長生閣下、序文を賜はつた元御召艦長海軍少將漢那憲和閣下、及び編纂校正に力を添へられた植村和堂氏、其の他小著出版に就いて種々お手傳ひを願つた諸君に對し、玆に深甚の謝意を表するものである。

昭和十年乙亥上巳

眞砂町假寓にて

著者識す

# 空手道教範　目次

## 第四編　組手

—目次、終—



# 空手道教範

富名腰義珍著

## 第一編　總論

### 第一章　唐手と空手

**空手とは**　沖繩には古來一種靈妙不可思議なる武術が傳へられてゐる。この術に熟達した者は、身に寸鐵を帶びずしてよく敵を仆し身を護り、其の一拳以て優に數枚の厚板を粉碎し、其の一蹴以てよく天井を蹴破る事が出來る。又手刀を揮つて打てば忽ち牛頭を屠り、四指を揃へて突けば容易に馬腹を貫き、或は梁を摑み渡り、青竹を握り碎き、或は麻繩を捻ぢ切り、栗石を削り去るが如き、殆んど人間業とは思はれぬ位の働きをする。この靈妙不可思議なる武術、これを世間では空手の眞髓だと思つてゐる人もあるが、これらは空手の一端に過ぎぬので、恰も劍道に於ける藁の試し斬りと同じく、これだけを以て直ちに空手の全貌と誤認

してはならぬ。眞の空手とは後段にも述べてあるが如く、技術よりも心術に重きを置き、平生は禮讓の中に體力を鍛へ精神を練り、一朝有事の際には正義に從つて全力を盡して當る。これが眞の空手である。

**唐と空**　空手は沖繩固有の武術である。從來は「唐手」の字を用ひてゐた爲に、動もすると支那拳法と混同され勝であつたが、沖繩に培はれること一千年、其の間幾多の名人によつて研究され、幾多の達人によつて琢磨され、遂に今日の如き渾然たる一大武術となるまでに發達したのであるから、立派な沖繩固有の武術と言ふべきであらう。

然らば何故に久しく「唐手」の字を當ててゐたか。思ふに後章「空手の沿革」の中にも記してある通り、近世支那崇拜熱の高い時代に、數多の武人が支那と往來して支那拳法を稽古し、沖繩古來の拳法謂はゆる「沖繩手」に之を加味して研究し、短を捨て長を採り、愈々精妙を加へたが、其の頃の人が斯術に箔をつける爲に「唐手」の字を用ひ始めたのではなからうか。

世界の一等國になり切つた今日の日本にさへ、まだ歐米心醉者が甚だ多い位だから、當時の沖繩に於ける支那崇拜熱が如何に盛んであつたかは想像に難くない。著者の若い頃までも、なほ土地の舊家と言へば、家具・調度一切すべて唐物を用ひてゐなければ幅が利かぬといふ風であつた。故にその頃の武人が好んで「唐」の字を用ひた譯も推察出來るのである。

著者も舊慣に從つて從來は「唐手」の字を用ひて來たが、往々、支那拳法と同一視される事があり、沖繩の武術「から手」と言はんよりも、既に日本の武術「から手」となつてゐる今日、「唐手」の字を當てる事は甚だ不見識、且、不適當と思はれるので、世と推し移ると云ふ意味を以て、今後は「唐」字を廢して「空」字に改める事にした。

**空の意義**　空手は徒手空拳以て身を護り敵を防ぐの術である。空手の「空」字は一に之に據る。

「空手」を學ぶ者は明鏡の物を映すが如く、空谷の聲を傳ふるが如く、我意・邪念を去り、中心空虚にして只管受くる所を窮めなければならぬ。空手の「空」の字は一に之に據る。

空手を學ぶ者は常に内に謙讓の心を養ひ、外に溫和の態度を忘れてはならぬ。而も一旦義を見て立てば千萬人を敵とするも恐れぬ勇氣がなければならぬ。かの猗々たる綠竹の如く中は空しくして外は直く、そして節がありたい。空手の「空」字は亦一に之に據る。

宇宙の色相は觀じ來れば一切空に歸する。而して空は卽ちこれ一切の色相に外ならぬ。柔・劍・槍・杖、武術の種類は數多あるが、詮じ來れば悉く空手と其の揆を一にする。卽ち空手は一切武術の根本である。色卽是空空卽是色、空手の「空」字は亦一に之に據る。

## 第二章　術より道へ

**空手の利害**　空手は身に寸鐵をも帶びずして、一拳一蹴立どころに敵を倒す武術で、其の攻擊力の猛烈な事は既に世人の悉知する通りである。故にこれを善用すればこれほど重寶な、又これほど有利な武術はないが、萬々一にもこれを惡用すると、これ位危險な、これ位有害な武術はない。

嘗て沖繩の警察で警官に空手を習はせようとした時に、「餘りに危險な術である」といふ懸念から不採用になつた。又嘗て故八代大將や漢那少將が海軍々人に空手を敎へようと提議された事があつたが、「血氣の水兵にこの術を習はせて、喧嘩でもする際に之を濫用されたら……」と云ふ危惧を抱く人が多く、この時も沙汰止みになつてしまつた。

成程、これは一應尤もな心配で、空手を習つたからと言つて無闇に喧嘩などに惡用されたら、全く危險千萬で仕方がない。

然し、單に「危險だから」と言つて、この世界に誇るべき精妙な武術を敬遠するのは甚だ遺憾千萬な次第で、これは、畢竟、敎へる人の人格が卑しく思慮が足らぬため、手足の末技に趨つて肝腎の空手の精神に重きを置かぬからである。又習ふ者の態度・心構が惡く、たゞ一片の喧嘩術として之を習得したからでもある。更に甚だしきに至つては「實戰をしなければ技が磨かれぬ」とか、「何某に勝つて來られなければ空手を習ふのは止めよ」などと鬪爭を奬勵するが如き暴言を吐く先生も居つたのは、斯道のため誠に歎かはしい次第であつた。然しながら、これらは全く空手の何物たるを知らぬ徒輩で、眞に空手の精神を體得して正しく敎へ、正しく習ひさへすれば、空手は危險どころか、敎養ある紳士の武術としてこれほど立派な武術は他に多く見受けられない。劇藥は危險である。毒藥は恐ろしい。然しながら、今日の醫界から劇毒藥を除き去れといふ馬鹿者は恐らく居ないであらう。劇藥といひ、毒藥といふも、一に其の用ひ方如何にあるので、劇毒の藥ほど、その用ひ方宜しきを得れば藥效の偉大なるものがあるのではないか。

空手を惡用すれば、なる程甚だ危險だ。危險であるだけに、又之を善用すれば其の效果も絶大である譯だ。劇毒の藥を與へる際には先づ藥の性質を理解せしめ、其の用ひ方を敎へなければいけない。空手を學ばうとする者にも、先づ空手の何物たるかを理解せしめ、之が正しき用ひ方を敎へなければならぬ。空手の正しい理解と正しい用ひ方、これが空手道である。

本當に空手に達し、眞に空手を知つてゐる者ならば、決して輕々しく喧嘩など出來るものではない。一擊一蹴、直ちに人命に關するのだ。敵を殺すか、敵に殺されるかと云ふ瀬戸際にならなければ空手を使ふべきではなく、又使はるべきものでもない。さういふ危險な場合といふものは、普通の人なら一生に一度あるかないかで、從つて空手を實際に役立てるのも、亦一生に一度あるかないかでなければならない。

著者は門人に向つて常に戒めて言ふ、「人あつての術で、術あつての人でない」と。空手は勿論のこと、如何なる技術でも、それを學ぶのは自己をよりよくせんが爲ではないか。

空手を學ぶについては、健康增進の爲にするのも固よりよい。輕捷機敏の働きを養ふ爲でも差支ない。腕

力・脚力・體力を鍛へんが爲でもよい。剛毅勇武の風を養ふが爲でもよい。深沈大度の度量を涵ふが爲でもよい。克己謙讓の德を養ふが爲であつてもよい。その何れを得るも、自己をよりよくする目的に適ふのであるが、萬一これが用ひ所を誤つて、或は他と闘爭し、或は人を殺傷し、或は自己の五體を損じ、或は名譽を失墜するが如き事があつたならば、空手の有するあらゆる效果も、一切の長所も、一朝にして消滅してしまふ。なまじい空手を習つた爲に却つて身を亡ぼす樣な事になるではないか。

人あつての術である。呉々も術の用ひ方を誤つてはならぬ。

**眞の空手** 眞の空手、卽ち「空手道」なるものは、內には俯仰天地に耻ぢざる心を養ひ、外には猛獸をも慴伏せしめる威力がなければならぬ。心と技と內外兼ね備つて始めて完全なる「空手道」と言へるのである。

空手道を修める者は、第一に禮儀を重んじなければならぬ。禮儀を失つた空手は既に空手の精神を失つてゐる。禮儀は單に稽古中のみではなく、行住坐臥、如何なる場合でも重んじなければならない。

空手道を修める者は、自己を虛しくして敎へを受けねばならぬ。我意增長の慢心者は空手道の門をすら潛る事が出來ぬであらう。知らざるものは知らずとし、他人の批評に耳を傾け、常によく自省するの心掛がなければならない。

空手道を修める者は、常に謙讓の心と溫和の態度とを忘れてはならぬ。腕に覺えがあると、兎角、威張つて見たくなるのは小人の常であるが、世に「武術家ぶる武術家」ほど片腹痛いものはない。かゝる似而非武術家が多い爲に世間の人から「武術家は亂暴者」と思はれ、眞の武術家が非常な迷惑を蒙る事がある。空手修業者はこの點特に注意しなければいけない。

空手道を修める者は、剛毅勇武の風を養はねばならぬ。剛毅勇武の風とは決して强さうな恰好をする意味ではない。又技さへ鍛へればよいといふのではない。形よりも心に就いて言ふのである。一旦事ある場合、自ら正しいと信じたら千萬人の反對をも押切り、如何なる困難でも辭せぬと云ふ意氣がなければいけない。優柔不斷は空手道修業者の最も恥づべき事である。

不肖ながら著者は、この空手道の徹底を期して多年子弟の敎授に當つてゐるが、幸にして子弟も亦著者の意を體して、門下三千人中、未だ嘗て亂暴者の出た例を聞かぬのは、聊か著者の誇とする所である。

慶大・早大・商大・拓大・日本醫大・一高などに於ける空手部の部員が如何にも謙讓溫厚で、敎職員を始め、學生間に非常に好感を持たれてゐるのも、空手道習得の賜物にあらずして何であらう。空手道の普及に盡瘁せる著者の微意が漸く世間にも認められてか、先年「危險」の理由を以て警官の空手修業を禁じた沖繩縣警察部では、昨今、竹崎警察部長の熱心なる努力に依つて盛んに練習しつゝあるのみか、京都武德殿よりは總裁の宮殿下より日本從來の柔劍道同樣に認可されて、沖繩武德殿支部を設けられ、支部旗も賜はり、東京に於けると同樣、空手の段級を與へる處まで進んでゐる。

苟も空手を學ばんとする者は必ず手足の一小末技に終始する事なくして、飽くまで眞の「空手道」を習得

せられん事を切に希望して已まぬ次第である。

## 第三章　空手の沿革

今から凡そ一千四百年前、西天竺の傑僧達摩大師が深山大川を踏破し、梁の武帝に面謁して佛法を講說した。西竺より支那へ通ずる路は瘴厲險阻にして、今日でさへ容易に跋渉し難い所であるが、まして當時人跡未踏の蕃地數千里を、一介の僧侶の身を以て敢然越え來つた大師の氣力と體力とが、全く常人を超絶してゐた事は想像に難くない。後に中州の少林寺に留錫して法を說かれたが、師の德を慕つて教を受ける弟子は雲の如くに參集した。ところが、流石に道心堅固な門弟達も日々の修業に憊て疲れ果てて一人倒れ、二人倒れ、遂には一同氣息奄々として人心地もないまでになつてしまつた。此の時、大師は衆僧に向ひ、「凡そ法は靈の爲に說くものであるが、靈肉はもと一體で離すべからざるものである。今、汝等を見ると、身心共に困憊して、到底修業の功を了へられさうにもない。そこで、こゝに一法を授けるから、以後まづこの法によつて筋肉を旺にし、然る後に法の眞髓を得よ」とて、一つの身心鍛練法を授けられた。これが謂はゆる「易筋經」であつて、これによつて少林寺の衆僧は漸く氣力を恢復する事を得たが、遂には剛健勇猛なる事、中國に冠たるに至つた。

大師の易筋の法は後に各所に傳へられたが、少林寺に於て研究されたものは後年「少林寺拳法」となり、それが琉球に渉つて發達したものは今日の「空手」の淵源をなす「沖繩手」となつたのであらう。

沖繩に於ける「空手」の發蹤は、文献の徵すべきものがないので明確な年代は分らないが、極めて古いものと推察される。從つてその拳法は殆んど琉球固有の武術となつてしまつたのである。今から凡そ五百年前、琉球に於ける不世出の英雄尚巴志王が出て三山統一の功を成し遂げられた後、文治立國の政策を以て武器の携帶を禁じた。其の後凡そ二百年、慶長十四年に琉球は薩摩の屬國となつたが、其の後は一切の武器を取上げられてしまつた。この二回にわたる禁武政策の爲に、徒手空拳の護身術たる拳法、即ち「沖繩手」は異常な發達を遂げて、今日見る如き不可思議なる琉球獨特の武術「空手」とはなつたのである。

勿論、今日の「空手」にまで發達する間には、幾多の名人が支那と琉球とを往來して、其の長所を傳へたのは確かな事實である。口碑の傳へるところに據ると、今から約二百年前、首里赤田の佐久川某が支那に渡つて拳法を修めて歸り、「から手佐久川」の名を一世に謳はれたといふ。

又、今から百四五十年前、土佐の人戸部氏の筆になつた「大島筆記」には、首里人潮平某の談として支那人公相君といふ者が弟子を數人引き連れて渡來し、一種の拳法を傳へたといふ事が載つてゐる。

更に、冊封使に附いて渡來した彼の地の武官「アソン」（發音のまゝ）に師事して拳法を修めた者に那覇の崎山・具志・友寄等があり、「イワー」（發音のまゝ）について學んだ者には首里の松村、久米の前里・湖城等がある。又、右衞門殿の島袋、九年母屋の比嘉・瀨名波・具志・長濱・新垣・東恩納・桑江等は「ワイシ

ンザン」(發音のまゝ)に法を問うた者であり、泊の城間・金城・松茂良・親泊・山田・仲里・山里・渡口等は福洲安南から漂着した支那人某に教はつた事もあるさうだ。斯くの如くして空手は愈々精妙を極め、益々完全に發達して來たのである。

豐見城親方は崎山の教を承けた大家であり、安里は松村の流れを汲んだ名人であり、糸洲は城間の後を繼いだ達人であつた。そして安里・糸洲の兩先生は著者が多年薫陶を受けた恩師である。

## 第四章　空手の流儀と種類

空手の流派を細かに分けると實に際限がない位あるが、それは恰も劍道や柔道が數多の流派に分れてゐるのと同じで、多くはその道の大家の名をもつて何流・某派と稱してゐるのである。空手に限らず、技を練るものは習ふ人々によつて其の解釋が各異なり、其の風も亦十人十色であるのは言ふまでもない。併し、之を型の上から大別すると、重厚堅固、最も體力を練り筋力を鍛へることを主とした昭靈流と、輕捷機敏、進退隼の如き早業を習ふに適した少林流との二つになる。騎馬立・十手・半月・慈恩等は昭靈流に屬し、平安・拔塞・觀空・燕飛・岩鶴等は少林流に屬する。骨格偉大、體軀肥滿の者が昭靈流を使ふところを見ると、如何にも堂々として四圍を壓するの慨があり、實に立派であるが、往々にして敏活を缺くの嫌がある。又、痩身短軀、俊敏飛鳥の如き士が少林流を使ふのを見ると、一拳一蹴、一進一退、目にも止らぬ早技に練達の妙を歎賞せざるを得ないが、氣魄に於て聊か彼に讓る所がある。昭靈は心身を鍛へるに適し、少林は技術を練るによいが、各長短があるから、空手を學ぶ者は二流の特徴を辨へて研究するがよい。

型の種類は全部を網羅すれば夥しい數に上るが、元來型は「知る」べきものでなく、「知つて鍛錬」すべきものであるから、無闇に多くの型を覺えても仕方がない。まづ次に掲げた十五種類位を心得て練習を積まれゝば十分であらう。即ち少林流に屬するものとしては平安初段・同二段・同三段・同四段・同五段・拔塞・觀空・燕飛・岩鶴の九種を、昭靈流に屬するものとしては騎馬立初段・同二段・同三段・十手・半月・慈恩の六種を練習すれば、兩者の長所を兼備することが出來る。

なほ、この外にも多數あるが、何れ後編において説明する事とする。

## 第五章　空手の公開

空手の稽古は古來極秘裡に行はれたので、今日の如く空手の研究や教授を專門にする人はなかつた。從つて空手に關する著書・文献も皆無といつてもよい狀態であつた。勿論、空手を公開演武するなどといふ事は思ひもよらなかつたのである。

明治になつて徵兵令が布かれ、學校に於ても體格檢査が行はれるやうになつてから、空手を稽古した生徒や壯丁が一見して他の者と區別が出來る程に四肢・五體が均齊に發達し、キリッと引締つてゐたので、校醫

や軍醫を驚嘆せしめ、遂に明治三十四五年の頃、當時の視學官小川鋠太郎氏が文部當局に上申し、直ちに縣立男子師範學校と縣立第一中學校とに公然正科として空手を採用した。これが空手が世に出る最初の機會であつた。

明治三十八九年、日露戰爭の直後に、著者は同志を語らつて縣下を空手の公開演武をして巡回した。空手の公開演武は恐らくこれが最初であつたであらう。

又、縣廳の落成式に内地の名士を招待した時、沖繩獨特の武術空手を紹介するため私が委囑されて、縣下より優秀なる武術家五名を選拔し演武して觀覽に供した事もあつた。

其の他、醫師會より委囑されて「體育としての空手」といふ意味で演武し說明した事や、泊小學校の上級兒童に空手を仕込んで那覇市内大運動會に觀衆の喝采を博した事もある。

其の後、大正の初頃から摩文仁・本部・喜屋武・城間・大城・德村・石川・屋比久、其の他多數の同志と或は首里、或は那覇に於て屢々空手を公開演武して、之が紹介と普及とに盡力したので、少くも沖繩に於ては空手といふものが稍々世間一般に知られるやうになつて來た。

大正五六年の頃であつたと思ふ、廣く中央に紹介するため京都武德殿に於て私が縣を代表して空手を演武した事があつたが、大勢の武術大家に古來秘術としてゐた空手を公開したのはこの時が最初であつたらう。

大正十年三月六日畏くも　聖上陛下が未だ皇太子殿下で在らせられた時、御渡歐の途次沖繩に御立寄りになつた際、首里城正殿の大廣間に於て空手を演武して台覽に供したが、其の時不肖私が演武の指導者たる重任を拜命し、師範と中學との生徒を選拔して指導演武せしめる光榮に浴した。其の後、沖繩に於ける御感想として（一）風光明媚なること、（二）首里城内の龍樋の靈泉、（三）空手の靈妙なる事などに辱くも特に御心を留めさせられたと漏れ承つた事であつた。

大正十一年五月、文部省主催の第一回運動展覽會には縣學務課よりの慫慂を受けて、私が苦心作製した空手の沿革、空手の型、及び其の他の寫眞を圖解した條幅三幅を作製して出陳し、上京して說明の任に當つた。展覽會の終了後、直ちに歸鄕の予定であつたが、尙家・講道館・戸山學校を始め、法曹會・中等學校體育硏究會・ホプラ俱樂部、其の他十個所より、是非空手に就いての詳細な說明を聞きたいと頻りに懇望されたので、微力ながら斯道の爲に各所に赴いて或は講演し、或は實演して空手の普及に努めた。

同じ十一年の夏、小杉放庵氏より「貴方が歸鄕されてしまふと、問ふ人が無くなるから、空手について何か書いて置いていたゞきたい」と言はれた一言に動かされ、豫々自分も空手に關する著書を編纂して置かねばならぬと思つてゐた所であつたので、夙夜筆を呵して同年十一月「琉球拳法唐手」なる小著を公にした。空手に關する著書としては實にこの小著を以て嚆矢とする。斯くして從來秘傳とされてゐた斯術を天下に公開したのである。翌年の大震災で紙型を燒失して後改版して「練膽護身唐手術」と改題上梓したが、この小著が畏くも　天覽を賜はる光榮に浴した事は、獨り著者のみならず、斯道に取つても誠に榮譽の至と言はなければ

ならない。

なほ大正十三年末には東京市民體育資料募集にパスして上野自治會館に於て公開演武をなし、昭和三年三月二十日には宮内省より召されて、宮中濟寧館に於て一木宮相を始め、多數の大官・皇宮警察署員列席の裡に、門下生十五名を引卒して演武した事もあつた。

斯くの如く、東奔西走して斯道の普及に盡瘁してゐる中、遂に歸鄕の期を失ひ、請はれるまゝに、或は明正塾に於て、或は各學校、會社等に於て斯道を教授し、荏苒今日に至つたのである。現在著者が直接教授してゐる學校としては、慶應・早稻田・商大・拓大・日本醫大・一高などがあり、學校以外の團體としては松坂屋・二水會などがある。其の他帝大・明大・日大・東大・中大などに於ても空手の研究に餘念なく、また空手教授の町道場も東京市内だけで十數ヶ所を算するに至つた。東京以外に於ては、大阪府及び富山・群馬の二縣が最も盛であるが、今や殆んど日本全國に亘つて空手研究の聲を聞くやうになり、昨今遠く海外にまで紹介されるに至つた。今より三十年前、著者が始めて同志と空手の公開演武を行つた當時の事を追懷すれば、實に隔世の感に堪へないものがある。

## 第六章　空手の價値

**體育として**　空手は其の組織が五體を左右・上下均勢に動かす事になつてゐるので、彼のボートを漕ぐ者が主に腕のみ發達し、跳躍する者が主に脚のみ强くなると云ふが如き、一方に偏する憂は全くない。之が先づ體育としての價値の第一に擧げられよう。

型一つを使ふのは普通一分乃至二分で足りる。而も熟練すればする程、動作は敏捷になり、運動は活潑となつて短時間の割合に十分の運動量を有してゐる。「運動はしたいが時間がない」といふ樣な人の多くなつた今日の時勢に於ては最も理想的な體育である。時間を要せぬこと、これが體育としての價値の第二に擧げられよう。

柔道にせよ、劍道にせよ、或は水泳にせよ、或は馬術にせよ、隨時隨所で練習する事の出來る運動といふのは殆んどない。必ず相當の場所を要するとか、多少の道具を用意せねばならぬとか、又は相手がなくては出來ぬとか、何かしら不便の伴なふものが多い。空手はこの點に於ても全く理想的である。何等の武器も要らぬ、何等の相手も要せぬ。庭先でも、座敷でも、廊下でも、隨時隨所で、思ひ立つた時に直ちに練習する事が出來る。これが第三にあげられる空手の體育的價値である。

男子に適する運動では女子に不向なものが多く、女子に適する運動では男子には物足らないものが多い。又病弱者に出來る樣な運動では健康な者には滿足されないのが多く、壯者に喜ばれるものでは老人・子供には到底出來難いものが多い。然しながら、空手のみは如何なる虛弱な者にも、女子供にも、老人にも容易に練習する事が出來る。卽ち各自、體力に應じて行へばよいので、一運動が僅か一分乃至二分であるから、過

激に亙るとか、疲勞を覺えるとか、危險を伴なふとかいふ樣な心配は全くない。而も追々身體が出來、技が熟練してくれば自然と力が入る樣になり、血氣の壯者が練習するとしても運動量は十分で、練習を積めば積むほど運動力が强大となるのが空手の長所である。これを空手の體育的價値の第四に擧げて置きたい。

其の他、單獨でも、團體でも練習し得るといふ事も體育として空手の優れてゐる特點である。單に體操としてみても一擧手、一投足すべて意義があるので、習ふにも面白く、又色々と型に變化があるので之を覺えるのが樂しみとなり、恐らく非常な效果を齎らすであらうと思はれる。

空手の體育としての價値は、之を實驗によつて徵しても頗る顯著なものがある。練習を開始して僅々一年足らずで全く普通人と識別し得られる程に筋骨が發達する。

又著者の恩師であつた故糸洲先生・安里先生は、共に幼少の頃は虛弱な方であつたが、健康法として空手の稽古を始められたところが、數年ならずして見違へるやうな體格となつたばかりか、遂には近世に於ける第一流の大家として其の名を謳はれるに至つた。そして糸洲翁は八十五歲、安里翁は八十歲といふ高齡を保たれたが、安里翁の先生松村翁は實に九十餘歲といふ長命を保たれた。其の他近世の空手の大家として知られた山口翁・新垣翁・知花翁・仲里翁・屋比久翁・渡嘉敷翁・崎原翁・知念翁は何れも八十歲以上の壽命を保たれた。以て空手が如何に體育として、且、健康法として優れてゐるか、推察するに餘りあるであらう。

**護身術として**　凡そ此の世に生を享けたる者は、必ず身を護り敵を防ぐだけの用意がなければならぬ。もしこの用意に缺ける所があつたならば、忽ち激しい生存競爭に於ける慘めな敗者として滅びてしまはなければならない。極めて卑近な例をあげて見れば虎や獅子の牙、鷲や鷹の爪、蜂や百足の毒針、薔薇や枳殼の棘等、何れも身を護り、敵を防ぐの用意ではないか。鳥獸草木すらこの用意があるのに、況してや萬物の靈長たる人間にしてこの用意を缺けば、鳥獸草木にも劣る譯である。「人を害するの心はあつてはならぬが、人を防ぐの心はなければならぬ」とは這般の消息を語る金言である。さて身を護り敵を防ぐ爲には最も弱き力を以て强敵を制し得る威力ある武術を撰ばなければならない。空手の威力は近頃ではかなり一般にも知られて來たが、寸鐵も帶びずして其の一擊一蹴によつて板を割り、石を碎く力があり、斯道に達した者なら、その頭の先から足の先まで、全身悉く武器と言つても過言でなからう。それほど猛烈な攻擊力を具へてゐる。

空手は投技もあるが、打ち・蹴り・突き・及び逆手を主として居り、其の動作は頗る敏捷で素人には目にも止まらぬほどである。卽ち受けと攻めの手が全く同時に出るので、體力の貧弱な女子や少年でも優に强大な敵を倒し得る威力がある。斯くの如く武器を要せぬといふことと、婦女子・少年・老人等にも習得出來て、而も纖弱な力を以てして立派に强敵を防ぎ得るといふ事とは、空手が護身術として恐らく他に類例を見ない長所であらう。

**精神修養として**　勇氣・禮節・廉恥・謙讓・克己などの美德を養ひ得るのは獨り「空手」に限らず、如何な

る武術でも其の眞髓を悟れば同じ事である。たゞ多くの武術は體質虛弱な者や、體格貧弱な者や、或は元氣の乏しい者には、最初から餘りに動作が激烈なため、氣力阻喪して中途に於て挫折してしまふのが普通である。稀に體軀の貧弱なるが爲に却つて發奮して猛烈な稽古をする者もあるが、體力が氣力に伴なはぬ爲に、或は負傷したり、或は病氣を引き起したりして思はぬ失敗を演ずる事が往々にしてある。故に從來の武術は身體の弱い者や氣力の無い者では上達出來ないものと諦めてゐた人々が多かつたのである。然しながら、勇武の氣象を養ひ剛强の體軀を造るべき武術の練習は、かゝる虛弱・無氣力の人にとつてこそ却つて重要である。この點に於て空手は老幼・男女誰にも出來る武術で、而も場所・設備・時間を要しないので、容易に繼續する事が出來るから、虛弱無氣力な人も不知不識の中に剛健な身體を作り、勇武の氣象を養ひ得るのである。この繼續し易いといふ事が精神修養の上にも偉大な効果を齎すので、半年や一年で廢してしまふ樣では、如何なる武術を學んでも、到底、精神修養とするに足りない。少くも精神修養としては十年、二十年、出來得べくんば一生涯、之を習ひ、之に親しみ、技と共に勇氣・禮節・廉恥・謙讓・克己の美德を磨いて身の光りとしなければならぬ。この繼續し易いといふ點に於ても空手は精神修養に資する諸武術中、最も適當なものでないかと思惟する。

# 第二編　空手の組織

## 第一章　拳の握り方

空手は拳の握り方が大切であるから、先づこれを呑込んで置く必要がある。其の握り方を三段に分けて說明すると、最初に中指・無名指・小指の三本を淺く握り、次に其の三本を折疊む樣に深く握ると同時に、人示指を指先を曲げずに拇指の基部に折り曲げる。而して第一圖の如く拇指の側面を以て人示指を押へつける樣にしつかりと握りしめる。

第一圖



拳の握り方

第二圖は握つた拳の表を示したものであるが、この場合、人示指と中指とが並行してゐなければいけない。即ち人示指と中指の四節(第一圖の白點を付した部分)が同時に敵に當る樣になる譯である。

人示指の先を伸ばしたまゝ折曲げたのは、中指と並行にせしめる爲で、斯くの如く、四節一時に當れば決して手を痛めると云ふ心配がない。

第二圖



握つた拳を裏から見た形

第三圖



巻藁の突き方

最初は一寸握るのに骨が折れるが、二三日も練習すれば、容易に握れる様になる。

　この拳は最も多く突きに用ひられるが、場合により手甲を下にして（裏拳といふ）敵の顔面を打ち、或は小指側面（手槌といふ。第二圖の白線を付した部分）で顔面・關節等を攻撃する事もある。

　拳は常に巻藁を用ひて鍛練しておく。空手家の拳が板を割り瓦を碎く威力を有するのは巻藁による鍛練の賜物である。

　巻藁を突くには、右拳で突かうとする時は右拳を伸ばして巻藁に當る位置に立ち、右拳を右脇腹に手甲を下にして構へ、左拳は手甲上にして左股より少しく離して下げ、左足を一歩踏み出して身構へる。そして突出す時は左拳を捻ぢ上げるが如く、手甲を下に脇腹に引きつけると同時に、右拳を突出し、丹田にウント力を込める。極まる時には手の甲は上になる。



第四圖



中高一本拳

第五圖



一本拳

　左拳で突く時もこの要領でよい。第三圖は即ち左拳にて巻藁を突いてゐる所を示したものである。又時には八字立（第三章立方參照）にて突くのもよい。

　最初は餘り烈しく突かぬ様にし、力も弱く、回數も少く、毎日、朝晩に練習して、段々に力と回數とを增す様にする。半年位も毎日突いて熟練したら右百回、左二百回位（左利きの人なら其の反對）も突けばよい。血氣に任せて無茶苦茶に突く人もあるが、過度の練習は拳を痛めるばかりでなく、　時には肋膜炎の原因となることもあるから注意しなければならない。

　**一本拳**　これには二通り握り方がある。第四圖は中指を高く出したもの、第五圖は人示指を高く出したもの、何れも拇指で人示指を押へておく。

　一本拳は主として顔面（人中・霞・眉間等）を打つの

第六圖



平拳

第七圖



四本突の貫手及び手刀

に用ひる。

**平　拳**　第六圖の如く四指を揃へて淺く握り、拇指は人示指の側面にしッかり折曲げて置く。

この拳は主として顏面攻撃に用ひるが、敵に當る部分は主として圖の白點を付したところである。

## 第二章　貫手と手刀

貫手（ぬき）とは指尖を以て敵を突き貫く手といふ意で、種類は三通りある。

**四本突**　最も普通に用ひられるのは四本突の貫手で、第七圖の如く四本の指を密着させ、拇指をシッカリと内に折曲げて置く。從つて手の甲は平でなく、指の付根の所が少しく高くなる。四本突は主として敵の水月を攻撃するに用ひ、これに熟練すると、拳で突くよりも有效である。





第八圖



二本突の貫手

第九圖



一本突の貫手

**二本突**　二本突の貫手は無名指と小指とを曲げ、無名指の上に拇指を第八圖の如く折曲げる。この手は專ら敵の兩眼を攻撃するのである。

**一本突**　一本突の貫手は握り方も二本突と殆んど同じで、第九圖の如く握り、人示指を以て敵を貫く。これも主として眼を攻撃する。

貫手を鍛へるには、容器に米を入れて之を突いて指先を慣らし、進んでは豆・砂・小石などで、段々に鍛練してゆく。斯くして十分に熟練すれば木の皮を剝ぎ、板を割り、石を削ることも、雜作ないまでに至るのである。

**手　刀**　手刀といふのは手を刀の如くに用ひる意で、貫手と同じく四指を揃へて伸ばし、拇指を淺く曲げておく。これは小指の側、即ち第七圖の白線を以て示した部分を以て相手の霞・眉間・頸動脈、或は腕・

第十圖



閉足立

第十一圖



八字立

足等の急所を打叩くに用ひ、打所によつては拳以上に效くものである。

## 第三章 立ち方

立ち方には、普通、閉足立・八字立・丁字立・前屈・後屈・猫足・騎馬立の七通りある。

**閉足立** これは第十圖の如く、體操の氣を付けの姿勢で指先を閉ぢたものである。

**八字立** これは足を八字形に踏んで立つ立ち方、指先の距離は凡そ一尺五寸。

**丁字立** 左右の足の位置が恰も丁字を爲すので、かく名付ける(第十三圖後屈參照)。

**前屈** 前足の膝を屈して立つ。前足は後へ、後足は前へ、互に引つける樣な心持で立つ。兩足の隔りは普通二尺五寸(身長により伸縮せよ)。



第十二圖



前屈

第十三圖



後屈(丁字立)

**後屈** 前屈の反對で、後足を曲げて立つのをいふ。體重を後足で支へ、前足は後方へ引きつける心持で立つ。兩足の距離は約二尺五寸(但し身長により多少伸縮せよ)。

**猫足** 猫が獲物を見付けて將に飛びかゝらうとする姿勢に似てゐるので、かく名付ける。後足を曲げて之に全身の體重を支へながら、前足は膝を曲げて輕く指先を地につける。この立ち方は進退共に敏捷で、蹴放し、蹴込み等には最も適してゐる。

**騎馬立** これは八字立と似て非なるもので、爪先より踵の方を開き、兩膝を曲げ、尻を後に下腹を前に出し、腰を落し、上體を眞直に立て、太股に力を入れて、恰も馬に騎つたやうな姿勢で、蹠の外側に力を入れ、外部より内部へ向つて力を集中するが如き心持で、踵を爪先と並行する位まで引きつける。この場合、

第十四圖



猫足立

第十五圖



騎馬立

丹田に充分力を籠めておかなければならない。これは最も堅固な立ち方で、之に熟練すれば颶風の際に雨戸を持つて屋上に立つても吹き飛ばされる恐れがない。

## 第四章　手技

手技としては突手・貫手・手刀・猿臂・一本拳・裏拳・裏手・受手・掬手・掛手・摑手・引手の十二種が用ひられる。

**突手**　これは敵の手を受けるや、間髪を容れずに突く手で、實際の場合、突いた拳は突くと同時に引かないと危險である。空手では最も多く用ひられる。

**貫手**　一本貫き・二本貫・四本貫と樣々ある。指先で相手の急所を貫くのである(第二章參照)。

**手刀**　手を刀の如くに用ひるので、普通は小指側面にて相手の手を打落し、或は顔面・頭部、或は手・足などの急所を打つのであるが、熟練すれば拳以上の働き



をする場合がある(第二章參照)。

**猿臂**　臂を以て相手の鳩尾・脇腹・下顎、或は手・足などを突くのである。拳の利かぬ婦人や子供でも、猿臂には十分の力があるから、これを練習しておくと、優に強敵を防ぐことが出來る。

**一本拳**　人示指或は中指を高くして握つた拳で、霞・人中・眉間などを打つのに用ひる(第一章參照)。

**裏拳**　拳の甲を以て打つのであるが、主として顔面の攻撃に用ひる。

**受手**　相手の手、又は足を受け、又は受け拂ふので、上段受・中段受・下段受の別があり、又各自に內受・外受があり、其の種類は非常に多い。要するに、相手を不利の地位に立たしめるやうに受けるのがよい。

**掬受**　受手の一種であるが、相手の手又は足を掬ひ受け、又は掬ひ投げるので、或は掌にて掬ひ受け、或は拳にて掬ひ投げる場合もある。

**掛手**　これも受手の一種である。相手の突込んでくる手を、我が手にてピツタリと受けるのをいふ。例へば騎馬立初段の八の型で、右手は中段の掛手左手は下段の掛手である。この掛手により略々相手の力量・技術などを察知し、臨機應變の處置を講ずる。

**引手**　これは掛手の變化で、相手の拳を受けるや否やこれを摑み引寄せながら攻撃するのである。相手を引くといふ事は敵の技を封じ、體勢を崩し、且我が拳の效力も强大となるので、最も大切な事である。單に引くよりも逆に捻じながら引けば一層效果が多い。

**拂　手**　受手の一種で、相手の手又は足を打拂ふのをいふ。掛手と異なり、敵の手足を拂ひ切る心持である。

**抱　手**　受手の一種で、突込んで來る相手の手を摑み引寄せて小脇に抱へ込むのをいふ。敵の體勢を崩し、自由を奪つて我が術を施すのである。

**搔　分**　平安四段十三の型で、相手の諸手で突いて來るのを、此方の左右の手首で搔分ける心持である。搔分けるや否や忽ち蹴込むか、又は拳を飛ばすのが普通である。

**打　手**　これは攻撃にも防禦にも用ひる。手刀・一本拳などで敵の急所を打ち、或は敵の攻撃してくる手又は足を手刀・手首などにて打落すのである。熟練したものに打落されると、只一打で骨を挫かれて抵抗力を失つてしまふ。

## 第五章　足　技

足技の精妙な事は多くの武術を通じて空手ほど練磨されたものはない。正に足技は空手の獨擅場である。從つて其の技にも種類が甚だ多い。普通用ひられる足技には、蹴放・蹴込・飛手・三日月・横蹴・後蹴・踏込・踏切・膝鎚・寄足・猫足・飛込・波返・蹴返・飛越・三角飛などがある。

**蹴　放**　蹴放といふのは片足で體を支へ、片足を飛ばして相手の脛・胸・腹・金的などの急所を蹴上げ、蹴るや否や其の反動で迅速に足を引く。足の引樣が遲いと相手に掬はれる恐れがあり、又效力も弱い。なほ、時として相手の手首を摑みながら、其の肘關節を逆に蹴上げる樣な事もある。

**蹴　込**　片足を飛ばして相手を蹴るのは蹴放しと同樣であるが、蹴上げた足を引かずに、相手の太股、或は膝關節などを目掛けてガッシとばかり踏み挫くのである。蹴込みの場合は相手の腕を摑んで引寄せながら踏込むと效力が大きい。蹴らずに直ぐに踏みつけるのを踏込むといふ。

**飛　蹴**　觀空に出てゐる型で、兩足で地を蹴つて飛上りざま、相手の胸、又は顏面を左右の足で蹴る。單に蹴放すのと異なり、兩足とも地を離れて蹴るのが特徵である。熟練すると一丈以上の高さを蹴る事が出來る樣になる。

**三日月**　例へば相手が我が左側面から突込み來る右拳を、我が左手にて內側から受けるや否や、其の手首を摑んで引き寄せながら、我が右足を飛ばして相手の胸を蹴るのである。其の時、我が右蹴の動き方が大きく三日月を描くので三日月と名付ける。平安五段・拔塞などにあり、相手の胸を蹴ると同時に右足を踏込み、又は右猿臂で更に敵の水月を當てるのが普通である。

**橫　蹴**　右側面から來る敵を蹴る時は左足で立ち、右足裏を左膝頭の上に輕く當てるや否や、閃電の如く蹴放し、瞬間に右足を引く。蹴るのは右足側面で蹴る。此の場合、多くは蹴ると同時に、右裏拳で相手の顏面を攻擊する。又時としては蹴放さずに踏込む時もある。平安二段・四段・觀空などに出てゐる技である。

**後　蹴**　後から相手に抱きすくめられた時など、突嗟に踵で後方を蹴上るのである。この場合の目標は金的或は向脛などである。

**踏　切**　足の外側面で相手の體・足などを切斷する勢を以て踏込むので、踏込の一種であるが、時として相手の足の甲を踏切つて體勢を挫く事もある。

**膝　槌**　相手と組合つた時、膝頭で金的・太股などを打敲いて體勢を崩し、或は相手の頭を我が兩手にて引落しながら膝頭を以て顔面を打つのである。

**波　返**　騎馬立初段十二の型がこれで、相手と手の組合つた場合などに、相手が我が金的を蹴上げて來るのを、我が足裏にて打拂ふのをいふ。打拂ふと同時に、其の足で相手の太股に踏込み、又は金的を蹴るのが普通である。

**寄　足**　敵の攻撃を外し、或は稍〻間合の遠い相手を攻める場合などに、手足の姿勢を崩さずに其のまゝ刻み足に寄せ、又は退くのをいふ。平安三段の最後の型が即ちこれである。

**猫　足**　後足を曲げて之に體重を托し、前足は輕く爪先を地に着け、踵を上げて、恰も猫が獲物に飛びかからんとする時の如き姿勢である(第三章參照)。

**飛込足**　寄足と異なり、相手が遠く離れてゐる場合などに、相手の隙を見出すや否や、一躍大地を蹴つて飛込みざま技を施すのである。

**蹴　返**　攻撃して來る相手の手又は足を、我が足にて蹴放すと同時に、其の足で相手を蹴るのである。又時としては我が蹴放しを敵に受けられた場合、其の足を引かずに更に相手に向つて蹴放し、又は蹴込むこともある。

**飛　越**　これは跳躍に熟練した人でないと困難であるが、敵の頭上を飛越して背後に廻り、或は棒などで足を打拂はうとする時など、敵の意表外に出て其の氣勢を挫くのである。平安五段十八の型は其の一例である。

**三角飛**　空手の玄妙と稱せられる神秘的妙技で、平常は見ようとして見られる技ではない。即ち幾千仭の絶壁上での爭闘の如き、眞に危機一髪といふ樣な場合、敵の力を利用して三角形に飛越え、以て忽ち攻守所を更へることがある。たゞ十分に熟達した大家にあらざれば望み難い秘技である。

# 第三編　基本型

## 第一章　型の名稱

**型の改稱**　型は第一編總論の中「流儀と種類」の章でも擧げておいた通り普通左の十五種を授けてゐる。

平安の初段、同二段、同三段、同四段、同五段・拔塞・觀空・燕飛（以上少林流）、十手・半月・騎馬立の初段、同二段、同三段岩鶴（以上昭靈流）。

型の名稱は從來口碑のまゝに「ピンアン」「セーシャン」「ナイハンチ」「ワンシュー」「チントウ」などと稱してゐたが、中にはその意味の不明なものもあり、教授上にも紛れ易く、且、立派に我が國の「空手」になり切つてゐるものに强ひて支那風の不可解な名稱を襲用したくないので、不適當と思はれるものは或は古老の形容を參酌し、或は著者の卑見を以て改稱する事としたのである。たゞ從來空手を研究した人々にとつては、卒然と改稱されては却つて不便を感ずるかも知れぬと思ひ、其の名稱を解說するに當り舊稱も併せて記して置く事とした。括弧內が即ち舊稱である。

**平安**（ピンアン）　初段から五段までであるが、最も習ひ易く、而も變化に富み、且、基本となるべき姿勢・拔などが殆んど全部含まれてゐるので、初心者は先づこれから入るがよい。この五つの型に習熟すれば立派

に平常の護身として役立つから安心してゐられる。平安の意味はさういふ風に解釋しておけばよい。なほこの型の内、本書に初段として掲げたのは從來は二段と稱し、本書に二段としたのを從來は初段と稱してゐたが、其の型の難易と教授上の順序とよりして、この通り改めた次第である。

**拔塞**（バッサイ）　この型の中に一旦受けた手を直ぐに受け替へる型が多いが、其の理由は己の不利を有利にする爲で、其の拔が恰も敵塞を拔くが如き氣力を以てゐるので、かく呼ばれる。

**觀空**（公相君）　この型を傳へた支那の武官公相君の名を取つて從來はクーシャンクーと呼んでゐたが、玆に「觀空」と改めたのは、この型の最初に兩掌を組んで空を仰ぎ觀る手がある故である。

**燕飛**（ワンシュウ）　この型の特徴として上段を突上げ相手を摑んで引寄せながら飛込んで突く、其のさまが恰も燕の一高一低、身を翻して虚空を飛ぶが如き趣きがあるので、かく名付けたのである。

**岩鶴**（チントウ）　この型の特徴とする處は片足で立ちて岩上の鶴が他の敵を見て、將に飛びつかんとする形勢に似て、其の様實に見事である。故にこれを岩鶴と名づける。

**十手**（ジッテ）　これ以後は昭靈流に屬する型で、少林流に比すると少しく鈍いところはあるが、其の姿勢は堂々として實に立派で、初心者にはむづかしいが、筋骨の鍛練によい。十手とはこの型に習熟すれば十人の働きを爲すとの意である。

**半月**（セーシャン）　この型の特徴は進んで行く際に、手足とも半圓を描きながら行くので、其の形の似たる處よりかく命名したのである。

**騎馬立**（ナイハンチ）　この型の特徴は其の立ち方にある。卽ち馬に騎つた様に兩足を踏ん張り、内股に力を入れ、兩足裏の外側を内へ引つける様にして立つ。騎馬立と稱するのは其の故である。

**慈恩**（ジオン）　これは舊名のまゝであるが、慈恩の字は古來支那の文獻にも屢々見え、古名刹に慈恩寺あり、古名僧に慈恩大師がある。恐らくは少林寺拳法のそれの如く、慈恩寺に關係ある人によつて傳へられた型であらう。

## 第二章　練習の心得

**效を急ぐな**　空手を練習するのに年齡の制限といふものは別にないが、理想としては十二三歳位から始めて終身繼續したいものである。

何事を習ふのも同じであるが、熱し易く醒め易いといふ様な練習振りでは、空手の様に平常の鍛練を必要とする武術には殊に效果が薄い。習ひ始めには夢中になつて猛練習をするが、一年も經たない中に熱がさめてしまふといふ様な人が往々あるが、空手の練習は繼續しなければ少しも效果が擧がらないのは勿論、身體のまだ鍛へられてゐない中に無茶な猛練習をすると、身體を傷める事もあり、折角の體育が體害にならないとも限らないから、必ず組織的に、急がず、焦らず、最初は力を入れずに回數も少くし、徐々に力を入れ、

回數も多く練習する樣にして、一歩々々堅實に進んで行かなければならぬ。

**練習と倦怠期**　練習を始めてから半年か一年もすると倦怠期に逢着する人が往々ある。空手に限らず何事にもこの倦怠期といふものはあるが、この時が一番大切なので、この時の僅かの心の持ち樣によつて成否が分かれるのである。倦怠期にあるなと自覺したら、奮勵一番意氣を以てこれを乘り越えてしまはなければいけない。この時に挫折してそれ切りで終つてしまつたのでは、今迄の練習も苦心も全部水泡に歸して仕舞ふ。倦怠期に入るといふのは、まだ空手なるものの眞味が分らぬので興味が湧かないからである。故に其の儘中止してしまへば、空手といふものをまだ呑み込まない中に廢してしまふ事になるので、それ位なら最初から習はない方がよい譯である。苟くも空手の必要を感じて習ひ始めたからには、空手といふものを十分理解するまでは徹底的に習ひ通さなければならない。

倦怠期に入る原因の多くは、病氣或は何か事故のために稽古を休んで、一緒に習つた人や、後から習ひ始めた人より遙かに後れてしまつたり、練習不足の爲に手足が思ふ樣に動かなかつたり、或は適當な鞭韃者や競爭者がない爲に稽古が怠り勝ちになつて、興味と熱とがなくなつたりする爲に、人の前で型を使ふのが何となく氣おくれがして、自分には空手が向かないのだなどと諦めて仕舞つたりするのである。

要するに、練習を怠らずに毎日時間を定めて行ひ、たとへ少し位他より後れたからと言つて抛擲したりせず、數年、十數年も習ふ中には苦もなく取返しがつくのであるから、目的を遠く且大きく持つて、急がず、焦らず、怠らず、堅實に練習を續けるがよい。そして常に興味と熱とを失はぬ樣、それには空手をよく知り盡すといふ事に心掛けて、或は他人の型を味はひ、或は組手を研究し、或は空手に關する書籍を繙き、特に空手の演武會は機會ある毎に見る樣にし、更に卷藁其の他の鍛練器具を用ひて身體を鍛へるといふ樣に、空手を念頭から離さぬ樣にさへすれば、倦怠期に陷る懼れは絕對にないであらう。

**個人の練習**　個人で練習する場合には隨時隨所で行ひ得ることが空手の特長であるが、なるべくは身輕な服裝で、場所も四坪(八疊)位あると工合がよい(少し熟練すれば三疊敷もあれば練習出來る)。型を覺えるまではあまり力を入れずに正しく使ふといふ事に注意し、要領を呑み込んだら次第に力を入れる樣にする。そして一つの型を完全に覺えてから次の型に移る樣にしたい。

**團體の練習**　空手は單獨で習つても興味深く習へるが、團體で練習する場合には更に團體としての面白味がある。學校・青年團・在鄕軍人會などに於ては、體操の樣に號令をかけて揃つて練習すれば必ず大喜びで稽古する樣になるであらう。

**昔は型一つ三年**　昔は型一つを習ふのに三年位かゝつたので、相當の達人といはれる人でさへも型は三つか、精々五つ位しか知らないのが普通であつた。つまり澤山知つてゐるからと言つて、生半可では何にもならないので、却つて間口が狹くても奧深い方がよい譯である。著者も騎馬立初段から三段まで習ふのに十年間かゝつた。併し型には各其の型の特長があるから、廣く知つて置くといふ事も甚だ大切で、あまり一つの

型に執着するのは考へものである。一般に昔の人は狹くして深く、今の人は廣くして淺いが、その何れに偏するのも面白くない。宜しく中庸を得べきである。

それで著者は一通り要領を會得したら先へ進め、平安五段まで、或は騎馬立三段まで、或は慈恩までといふ風に區切りをつけて、それまで進んだら、また元へ戻つて反復練習せしめる事にしてゐる。空手の型は單に「知つてゐる」といふだけでは何にもならないのだから、一度習つた型は常に繰返し繰返し練習して、眞逆の時に役立つ樣にして置かなければならない。

**得意と不得意**　誰にでも得意と不得意の手があるもので、或は拳の力の強い者もあり、或は手刀の力に秀でてゐる者もあり、或は蹴技の敏捷な者もあり、或は跳躍の上手な者もある。得意の技は勿論之を助長せしめて、愈々益々其の精妙の度を加へることはよろしいが、得意な技のみに專念して不得意な技を捨てて顧みない樣な事があつてはならない。例へば相手の突きを受けるにも、或は手で受ける時もあり、或は足で拂ふ時もあり、又同じく手で受けるにも、或は拂ひ切る時もあり、或は打ち落す時もあり、或は掬ひ受ける時もあり、或は引き込む時もあり、或は掻き分ける時もある。故にそれ〳〵相手と自分との位置・姿勢・力量・技倆などに應じて變化しなければならない。それを「自分は拂ひ切るのが得意だから、他の受け方は習はんでもよい」などといふ淺薄な考を持つ人もよくあるが、思はざるの甚だしいもので、拂ひ切る受け方にも長所があると同樣、其の他の受け方にも皆長所があるのだから、よく〳〵其の長所と短所とを辨へて比較研究しなければいけない。特に、組手を習ふ際に指導者が宜しきを得ないと、如上の弊に陷り易いから、必ず型を主とし、組手を從として練習するがよい。

**練習の時間**　練習の時間は、單獨で練習する時は普通の男子なら約三十分が適當である。熟練してくれば一時間以上練習しても差支ない。たゞ血氣に任せて無理な練習をする事は吳々も愼むべきで、十二分の時間があるなら朝・晝・晩と三回位に分けて練習するがよい。「人あつての技」で、少くも己をよりよくせんが爲に習ふ空手なのであるから、其の爲に身を損じたり、病氣を引起したりする樣な愚を演じてはならない。一度に長時間練習するよりも、不斷に怠らず練習する方が遙かに效果が擧るのである。

要するに、型一つは一分間乃至二分間で終るのであるから、朝飯の前、晩餐の後、晝休みの時間、或は事務に倦怠を覺えた時など、僅かの時間を利用して隨時隨所で練習する樣にすればよい。

**練習上の三要諦**　型を練習する上に忘れてならぬことが三つある。「力の强弱」「體の伸縮」「技の緩急」この三箇條が即ちそれである。この三要諦を常に念頭から離してはならぬ。型を練習するのに、無闇に力を入れたり、矢鱈に早く使つたりする人がよくあるが、力ばかり入れても上手とは言へぬし、早く使つたからとて巧者だとは申されない。力を入れるべき所を入れ、拔くべきところは拔く。早くすべき所は早く、緩くすべきところは緩く使はなければいけない。そして本當にこの「力の强弱」「體の伸縮」「技の緩急」を會得するには、先づ其の型の特長、及び其の手其の手の意味を正しく理解しなければ出來るものではない。言ひ

換へれば、この三要諦が呑み込めて、然る後に始めて型を正しく使ひ得るといふ事になるのである。

**新しい型の練習法**　新しい型一つを教授し、又は稽古しようとする場合に、一時に全部を覺えて仕舞ふといふ事は困難であるから、數回に分けて覺える樣にするがよい。

今假りに三回で一つの型を覺えようとするには第一回に前半を習ひ、第二回に後半を習ひ、第三回に前後を聯絡して練習するといふ樣にすればよい。そして一通り覺えたら姿勢を正し、技の意味を解釋し、力の强弱、技の緩急、體の伸縮に注意して反復練習するのである。

**教材の配列**　凡そ物事を學ぶには必ず易より始めて難に進み、簡より入つて繁に及ばなければならぬ。空手を學ぶにも無論斯くあるべきで、順序を趁つて學んでゆくべきである。

昔は空手を教へるのに、兎角、自分の好む型から先に教へる人が多かつた。これは教へる人が型を三つ四つしか知らなかつたので、教材の不足な爲に致し方もなかつたのであらうが、爲に初學者を誤る事がないでもない。こゝに鑑みて著者は教材の配列といふ點に最も重きを置いて、過去數十年の經驗に照らし合せて本書を編纂したので、初學者の教本としては無二の良師友であると確信する。

## 第三章　演武線

**演武線**　型を使ふ場合の位置の移動を示した略線を演武線といふ。演武線を大別すると左の五種になる。

一字形　　騎馬立初段・同二段・同三段・岩鶴

丁字形　（左第一線・右第一線・第二線）　平安三段・同五段・抜塞・燕飛

十字形　（後第二線・左第一線・右第一線・前第二線）　半月・十手

工字形　（左第一線・右第一線・第二線・左第三線・右第三線）　平安初段・同二段・慈恩

士字形　（後第二線・左第一線・右第一線・第二線・左第三線・右第三線）　平安四段・観空

この五種は大別したものであつて、型によつてそれ〳〵多少の變化があるが、詳しい事は型の説明のところで述べる事にする。

演武せんとする者は、先づ其の型の演武線を考へて、演武開始の位置を定めるだけの用意がなければならぬ。例へば同じ一字形に屬する者でも、騎馬立初段の場合は左右に十分の廣さを見て置かねばならぬし、岩鶴の場合は前後に餘裕を取つて置かねばならぬ。殊に晴の場所に於て演武する時の如き、その心得がないと

誠に見苦しいものである。

**行くものは必ず元に歸る**　空手の型は演武開始の位置と、演武終了の位置とが必ず同じでなければならぬ。それが同じ所に歸つて來ないとすると、何處かで足の位置を誤つたのである。或は歩幅が不正確である爲に位置の狂ふ事もある。空手は單に手を使ふのみでなく、腰の据りを最も重んずるから、歩幅、足の位置には殊に念を入れて練習しなければならない。

　因に型の解説寫眞の下に一々演武線及び足の位置を示して置いたから、よく〱これに注意して練習するがよい。

## 第四章　基本型

　型の説明に先だつて、型の寫眞中の符號について説明して置く。寫眞は上に演武の姿勢、下に演武線と足の位置を示してある。演武の姿勢に付した符號中、

○　は右手の位置
●　は左手の位置
△　は右足の位置
▲　は左足の位置

…→　は運動方向（人體の裏になる時は細線にて示す）

演武線に付した符號では

黑足　は現在（上の寫眞）の姿勢に於ける足の位置
白足　は前の姿勢に於ける足の位置。特に數擧動に亘つて足の位置を示した場合は、番號を付して順序をつけて置いた。
……　は足の進み方。

　型を正しく習得する事はなか〱むづかしい事であるが、上圖を參考しながら解説によつて熱心に練習されたら獨習にても必ず相當の域に進み得る事を確信する。

### 第一　平安初段（舊稱　ピンアン二段）

　全部で二一擧動、約一分にて全運動を完了する。演武線は工字型に屬する。

**（禮）**　型の前後には必ず禮を行ふ。禮の法式は、場の中央より稍々下手に、演武しようとする型の演武線によつて適當の位置を定め、閉足立にて、兩手は自然に垂れて輕く腿に接する位に置き、上體を少しく前に屈して（屈しすぎるのは不可）第十六圖の如く禮をする。

**（用意）**　禮を終つたら、左右の拳を握りながら、左足から先に、次ぎに右足を開き、左右爪先の間隔が約

第十六圖

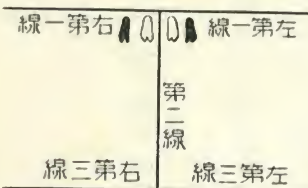


禮の仕方

第十七圖



平安初段用意の姿勢




一尺五寸位になる。

次いで、「始め」の號令（號令は普通教授者が掛けるが、時には自分自身でかけるもよい）。

（一）顔を左方に向けながら、左足第一線上左へ一歩踏出し、左手は右肩前（掌を開いて上向け）より、右手は斜左下（同じく掌を上に）より、互に引張る如く反動をつけて、（二）の如く前屈の姿勢を取る。

（註）この場合左拳は左足の上凡そ六七寸の位置に構へ、我が脇腹を攻撃する相手の手又は

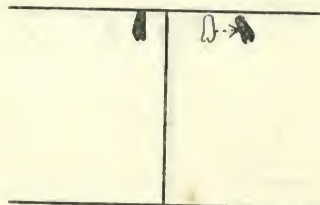




第十八圖



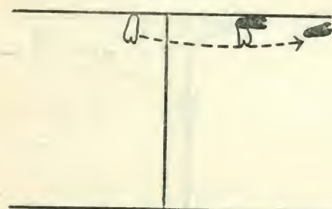
平安初段（一）



第十九圖



平安初段（二）



足を防ぐ心持である。兩足は互に中央へ引きつける様に。

（二）第一線上に更に右手右足を一歩踏出す。この時左手を共に腰に引きつける（手甲を下に向けて）と同時に、（三）の如く右拳を以て中段を突く。

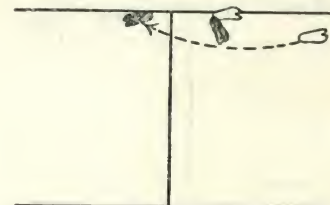
（註）左手を以て相手を摑んで引寄せながら、右拳を以て相手の胸部を突く心持である。上體は常に眞直に立てて、眼は前方、相手の顔を假想して見つめる。

（三）右第一線上に右足を引返しながら（左足は共のまゝ）右手は左肩

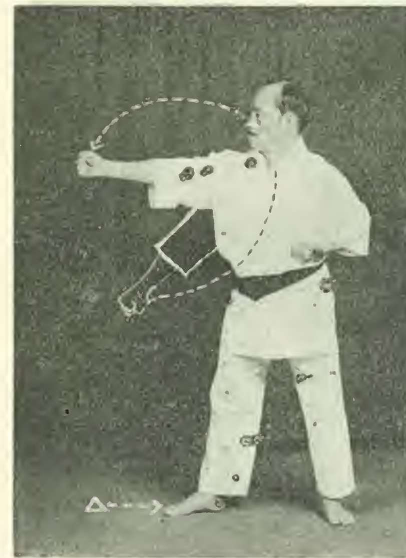
第二十圖



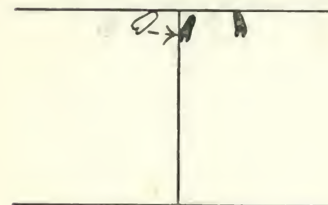
平安初段（三）



第二十一圖



平安初段（四）



前より、左手は右斜下より、（第一の時と同樣）互に引張る如く反動をつけて、（三）の如く前屈の姿勢を取る。第一と正反對の形になる。

（註）一と同樣、脇腹への攻撃を防ぐ心持。足を左右互に內方へ引しめる事も前と同じ。

（四）右手と右足とを同時に引く。右手は左肩の前から（額の前を大きく圓を描く樣に廻して（四）の如く肩と水平の位置に止める。また右足は引くと同時に膝を伸して立つ。

（註）前屈にて下段を受けた右

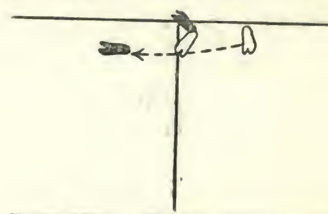




第二十二圖



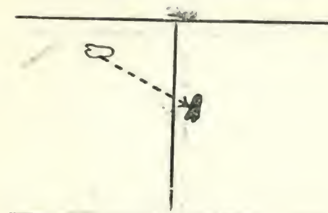
平安初段（五）



第二十三圖



平安初段（六）



手首を相手に摑まれたので、それを振り放しざま相手の手首を打つ心持である。

（五）（五）の如く左足一歩、第一線上右方へ前進しながら、右手を腰に引きつけると同時に、左拳にて中段を突く（二と正反對になる前屈である）。

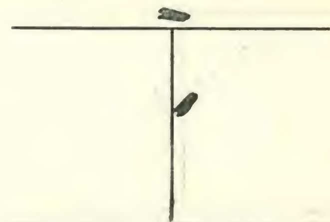
（註）右手にて相手を摑み引寄せながら、左手にて胸部を突く心持。

（六）右足を軸として、左足を一歩第二線上に踏出し、前屈下段受けの姿勢を取る。左手は右肩前より右手は左斜下より互に引張る樣に

第二十四圖



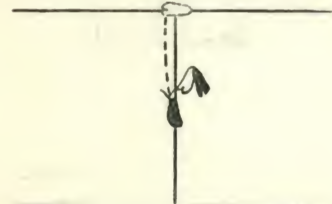
平安初段（七）



第二十五圖



平安初段（八）



反動をつけること。「一」及び「二」に同じ。

（註）（六）の如く顔・拳・足は一直線上にあつて、右肩が前に出ない様にせよ。前方より來る敵の攻撃を受けたる心持。

（七）拳を開いて、（七）の如く額上に擧げる。この時左肘は心持曲げ、左手の甲と額との距離は凡そ六七寸。

（註）相手が、下段攻撃を防がれたので、突如左拳にて我が顔面を突いて來たのを、我が左手首にて受けたる心持。

（八）（八）の如く右足一歩第二線上に前進兩膝を伸ばして立つと同時に、右拳は左肘の前に手甲を接し、左手は甲を外にかへし、左右の手首が十字を描く樣に互に上下に引いて、左手は振りしめながら腰に、右拳は第八圖の如く額に構へる。

（註）相手の左拳を左手で受けると同時に之を摑み、逆に捻ぢ乍ら、右手首を相手の左肘に當てゝ、逆を取る心持である。而して、八の型は又上段攻撃を受ける手にもなる。なほ以上（七）（八）は馴れたら一擧動として早く動作するがよい。



第二十六圖



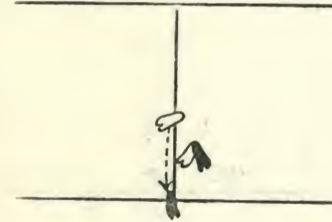
平安初段（九）



第二十七圖



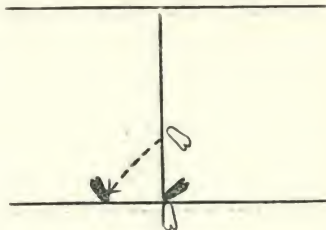
平安初段（一〇）



第二十八圖



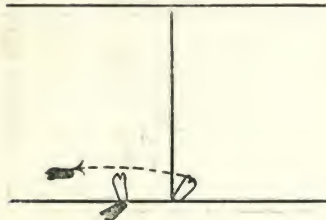
平安初段（一一）



第二十九圖



平安初段（一二）



（九）　左足一歩第二線上に進みながら、額上に擧げた右拳を開き手甲を外にかへし、右拳の甲を右肘前に接するや互に手首が十字を描く様に引いて、右手は握りしめながら腰に、左拳は第九圖の如く高く額上にあげる。すべて（八）と反對動作。

（註）　型の意味も前と同様、（八）に準じて解釋せよ。

（一〇）演武第二線上に右足を更に一歩踏出しながら、額上にあげた左拳を開いて甲を外にかへし、右手甲を左肘は接するや右拳は上へ、左手は握りしめながら腰へ、互に手首が十字を描く様に引いて第十圖の姿勢を取る。すべて（八）と同じ動作。

（註）　右拳が額上に極る瞬間「エイ」と氣合をかけよ。

（一一）　右足を軸として、左足を第三線上に踏出し、前屈の姿勢を取ると同時に、右拳（手甲下）を腰に、左拳（甲を上）は左腿の上六七寸の處に構へる。（一）と同じ。

（註）　この時左拳は右肩前より、右拳は左斜下より互に引くが如く、反動をつける事を忘れぬ様、（一）と同様、脇腹への攻擊を防ぎたる心持。

（一二）　右第三線上に右足一歩前進すると同時に、左拳は捻ぢ上げる如く腰に引き、右拳は中段突。

（註）　左手に相手を摑みて引寄せながら右拳にて胸部を突く心持。

（一三）　左足は其のまゝ、右足を第三線上左方に返して前屈下段受けの姿勢を取る。

（註）　左手の拳に反動をつける事、前の通り。この型は前方の敵を倒したる時、後方より別の敵が攻擊して來るのを察知して、振り返りざま下段受けしたる心持。

（一四）　第三線上左方へ、更に左足を踏出し、右拳を捻ぢ上げるが如く腰に引くと同時に、左拳は中段突。

（註）　型の意味は（五）と同じ。この場合のみに限らず、常に左右の足は内方に向つて引締める様に注意せよ腰の据りといふ事は最も大切である。

（一五）　右足を軸として、左足を第二線上に一歩踏出し、前屈、下段受けの姿勢をとる。

第三十圖



平安初段（一三）

第三十一圖



平安初段（一四）

（註）　左右の拳互に大きく反動をつけること前と同じ。

（一五）は見易くするため、稍斜に撮つたが、實際の位置は演武線の位置に從ふがよい。

（一六）　第二線後方に、右足一歩前進、（前屈の姿勢）左拳を腰に引くと同時に、右拳にて中段突き。

（註）　型の意味は、「二」、「一二」に同じ。

（一七）　第二線後方に、左足一歩前進、（前屈）右拳は捻ぢ上げるが如く腰に引くと同時に、左拳は中段突き。





第三十二圖



平安初段（一五）

第三十三圖



平安初段（一六）

（註）　同じ型が三回連續する時は、多少力の强弱と、變化がなければならぬ。卽ち兩端は强く、眞中は弱くする心持。

（一八）　第二線後方に、右足更に前進、（前屈）、左拳を引くと同時に、右拳中段突き。

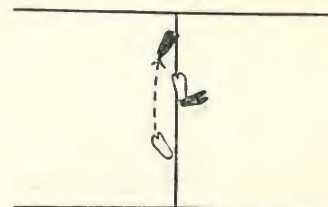
（註）　（一六）、（一七）よりも力を入れて、足も心持廣く踏出し、右拳が極まる瞬間「ヤッ」と氣合を掛ける。

（一九）　右足を軸として、左足を第一線上左方に踏出し、（後屈の姿勢）左右の掌を開いて、左掌は右肩前より（甲を外）右腕

第三十四圖



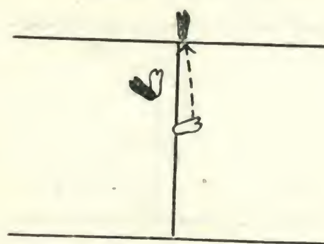
平安初段（一七）



第三十五圖



平安初段（一八）



の上を滑る如く、右掌は左斜下より引つける如く、互に反動をつけて（一九）の姿勢を取る。

（註）平安初段の中にて最も難かしき型であるから注意して練習せよ。後屈にて體は必ず前方に向けたまゝ、顔だけ左方に向ける。左手は肘を少し曲げて、肘と脇腹との間隔は凡そ五六寸、掌は人示指の第一節が肩と水平になる位。拇指は曲げよ。右手は胸を護る意味にて水月のあたりに水平に置き、指先が左脇

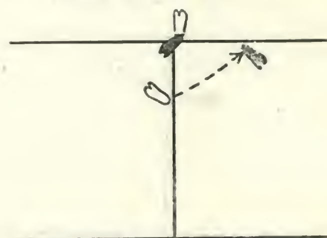




第三十六圖



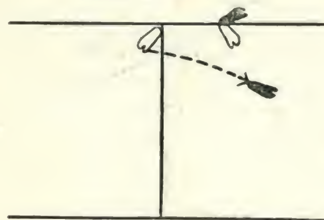
平安初段（一九）



第三十七圖



平安初段（二〇）



腹と並ぶ位。同じく拇指を曲げる。

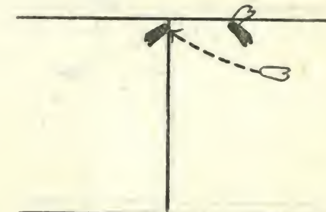
（二〇）左足を軸として、右足を左第一線の斜前方に踏出す（後屈の姿勢）と同時に（一九）と全く反對に、右手を左肩前に肘を稍曲げて構へ、左手は胸部を護つて水月のあたりに水平に置き、顔は右肩越しに右方の敵を見つめる心持。

（註）この型は、右手首にて攻撃を防ぎ、機を見て相手の手首を右手にて掴むや否や引寄せつつ左貫手にて相手の水月を突くといふ含みである。

第三十八圖



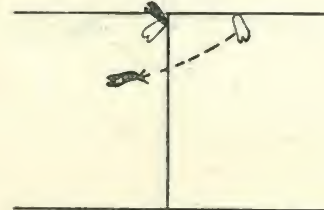
平安初段（二一）



第三十九圖



平安初段（二二）



（一九）（二一）（二二）も同じ。

（廿一）　左足を軸として、右足を第一線上に返し乍ら（後屈）、右肩前方に右手を構へ、水月のあたりに左手を水平に置き、顔は右に向け右肩越しに右方を見る。

（註）　この構への時は殊に足に注意して、後方の足に體重を托し前の足は輕く地につけ爪先に力を入れて後に引つける心持。

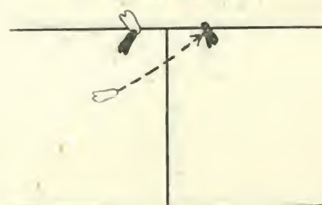
（二二）　右足は其のまゝ、左足を右第一線の斜前方に踏出しながら（後屈）、左手刀を左肩前に、肘を少し曲げて構へ、右手は胸部を護つて水月のあたりに水平に構へる。

（註）　以上（二二）で平安初段の型は完了したのであるが、實際には（七）・（八）は一擧動となるから、全部で二一擧動となる。

第四十圖



直れの姿勢



（直れ）　直れの號令と共に、右足は共のまゝ、左足を第一線上に返しながら、左右の拳を振りしめて、用意と同じ姿勢に復する。直れの動作はユックリと落着いて行ふがよい。

（註）　演武開始の位置と、演武終了の位置、卽ち「用意」と「直れ」の位置は常に同じでなければならぬ。

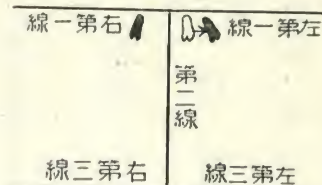
## 第二　平安二段（舊稱　ピンアン初段）

從來平安初段と稱してゐたものである。全部で二六擧動、約一分間にて完了する。號令及び禮、用意の注意につきては、平安初段に同じ。演武線は工字形で、初段に同じ。

第四十一圖



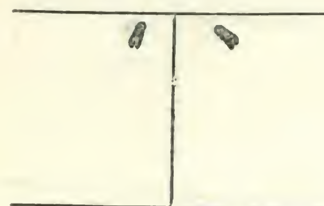
平安二段（一）




第四十二圖



平安二段（二）



（一）（一）の如く左第一線上に左足を踏出すと同時に（右足其の儘、後屈）兩拳を圖の如くあげる。上體は前に向ひ、顔は左向。

（註）左側面よりの顔面攻擊を左手首にて受け、右手に頭上を覆ひながら次の攻擊に移らんとする姿勢。

（二）足は其のまゝ左拳を右肩前に引くと共に、右手は半圓を描く心持で横に大きく打込む、上體も左向に捻ぢる。

（註）左手にて相手を引寄せて右手にて横ざまに打ち込む心持

（三）足は其のまゝ、左拳（手甲下）

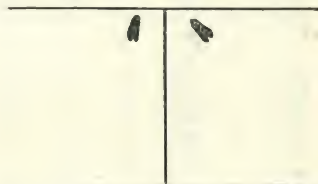




第四十三圖



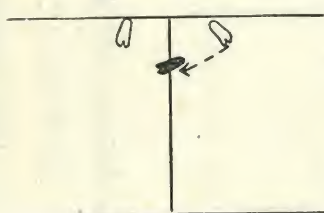
平安二段（三）



第四十四圖



平安二段（四）



を水平に左方に突出すと同時に右拳は右脇腹に引付ける。

（註）右手にて打込むや否や、間髪を容れず、續いて左拳にて突く。

（四）第一線右方を振向きざま（足の位置は其のまゝにして、右足伸ばし、左足屈する）右拳を右肩前に肘を屈して構へ（手甲後）左拳は頭上に構へる（手甲は額より一、二寸）。即ち（一）と正反對の姿勢。

（五）足は其のまゝ、右拳を左肩前に引くと同時に、左拳を大きく横ざまに打込む（二）と反對の動作。

（六）足は其のまゝ、右拳を水平に

伸ばすと同時に、左拳左脇腹に引く。（三）と反對動作である。

（七）左足を元の（用意の姿勢の時の）位置に引いて後方を振向くと同時に、第四圖の如く右足裏を左膝頭の前にあげ、左拳（其のまゝ）の上に右拳を重ねる（手甲外）。

第四十五圖



平安二段（五）

（八）左足にて立ちたるまゝ、右裏拳にて敵の顔面を打つと同時に、右足刀（小指側）にて金的を蹴る心持。手足共に、攻撃すると同時に引く樣に。

（註）（七）（八）は熟練したら一擧動とせよ。（六）の姿勢の時に、敵が後方から襲ひかゝらんとする氣配を察して、振向き樣手足一時に攻撃したる意味である。（五）は見易きために稍ゝ斜に撮してあるが、蹴るのは眞後である。

（九）蹴放したる足を第一線の後方に下ろすと同時に、前方（第二線の方）に向つて後屈、手刀受。平安初段（一九）（二二）參照。

（一〇）第二線上に右足を踏出しながら左足後屈、手刀受。平安初段（二〇）（二一）參照。

（一一）第二線上に、左足を踏出しながら（後屈）手刀受、（九）と同じ。平安初段（一九）（二二）參照。

（一二）第二線上に右足一歩前進（兩膝伸ばしたるまゝ立つ）しながら、右四本貫手を以て中段突き（手甲右方）すると同時に、左手を甲が右腕下を滑るが如く、右脇下に引く。

（註）手足の動作一致して、極まる瞬間「エイ」と氣合を掛けよ。相手の突來る手首を、我が左掌にて押へて引込みながら、貫手にて水月を攻撃する氣持。

（一三）右足を軸として左へ廻り右三線上に左足を移すと同時に、右足後屈、左手刀受。

（註）手足共、すべて平安初段（一九）に同じ。

（一四）左足其まゝ、右足斜右前（右第三線と第二線その中間）に踏出すと同時に、後屈、右手刀受。

（註）平安初段（二〇）に同じ。

（一五）左足原位置、右足を左第三線上に移すと同時に後屈、右手刀受。（一四）と同姿勢。

（註）平安初段（二一）に同じ。

（一六）右足原位置、左足を左斜前（右第三線斜後方）に踏出すと同時に後屈、左手刀受。

（註）平安初段（二二）に同じ。

（一七）右足原位置、左足を第二線上に踏みかへ左足前屈になると同時に（六）の如く、左手を握つて左脇腹

に引き（手甲は下）乍ら、右拳を（手甲外）右斜下より左肩前にかけて大きく半圓を描く様に振り廻しながら、中段受け。

（註）右肩前に出し、左肩後に引く。右足の踵が浮き易いが、やはりシッカリ大地に喰込んでゐなければいけない。

第四十六圖



平安二段（六）

胸を攻撃して來る相手の手を、我が右手首にて受ける。この種の受け方を內受といふ。

（一八）左足原位置に立つたまゝ、右足思切り高く、右拳の前方を蹴上げる。

（註）右手にて相手の左手首を摑み、其肘關節を逆に蹴折る心持。なるべく高く蹴る練習をせよ。

（一九）蹴上げた右足を其場（第二線上）に下すと同時に、右拳を腰に引き（手甲下）、左拳にて中段突き。

（二〇）足は其のまゝ、突き出した左拳を右前方へ半圓を描くやうに廻しながら中段內受け、（一七）と左右反對の姿勢である。

（註）左肩前に出し右肩後へ引く事、及び後足の踵の浮かぬ事に注意。

（二一）右足原位置に立ちたるまゝ、左右の手も其のまゝ、左足を高く前方に蹴上げる。

（註）（一八）と左右反對になるだけにて同じ。

（二二）蹴上げた左足をその場（第二線上）に下すと同時に、左拳を左腰に引きつゝ、右拳にて中段突き。

（註）（一九）と左右反對。

（二三）左足其まゝ、右足大きく一歩前進（第二線上）前屈の姿勢をとり乍ら、右手首にて中段受（手甲下）。すると共に左拳は右肘のあたりに輕く接する（この受け方を諸手受といふ）。

（註）中段受けの時も、手刀受けと同じく肘を少し曲げて、肘と脇腹との間隔は五六寸。

（二四）右足を軸として、左足を左後（左第一線上）に移して左前屈の姿勢をとると同時に、右手腰に、左手下段受け。

（註）平安初段（一）と同じ。

（二五）左足其まゝ、左掌を開いて額上にあげるや右足を右斜前（左第一線の左斜前方）に踏出し、兩膝を伸して立つと同時に、右拳（甲は額に向ふ）上段受、左拳腰に引く。

（註）平安初段（七）（八）と同じ。先づ左拳を開いて頭上にあげ、右拳の甲を左肘に接する如くして、左右の手首が十字を描く樣に引く事も、平安初段（七）と同じである。

（二六）左足其のまゝ、右足を後方（第一線上）に移し右前屈の姿勢を取ると同時に、右手下段受け、左拳腰に。

（註）平安初段（三）に同じ。

（二七）右足其のまゝ、左足を右斜前（右第一線と第二線との中間）に踏み出し、兩膝伸ばして立つと同時に、下段に受けてゐた右手を開いて頭上にあげ、敵の腕を摑んで捻る如くに右腰に引きつけ乍ら、左拳を頭上にあげる。左右の手首が十字形を描くこと前の通り。

（註）この時極まる瞬間に「エイ」と掛聲をかける。

（直れ）以上でこの型を終了したので直れの號令と共に左足を引いてユックリと元の用意の姿勢に復する

（註）說明には廿七擧動となつてゐるが、實際は（七）（八）を一擧動として、二六擧動とする。

## 第三　平安三段（舊稱　ピンアン三段）

全部で二三擧動約、一分間で完了する。號令・禮、其の他の注意に就いては、平安初段に同じ。演武線は丁字形である。

（用意）平安初段と同じく、八字立、兩拳を自然に垂れて腿の前に置く。平安初段用意の圖參照。

（一）右足原位置、左足を左第一線上に踏出すと同時に（右足後屈）右拳を左肩前より、左拳は下より、互に引張る樣に（一）の如く受ける。上體は前向、顏は左向。

第四十七圖



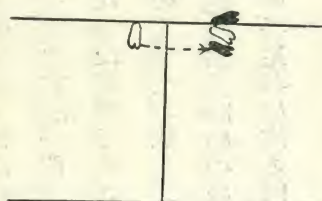
平安三段（一）

左第一線　右第一線　第二線

第四十八圖



平安三段（二）



（註）左側面より敵が左脇腹に突込んで來る拳を受ける氣持。

（二）左足其のまゝ、右足を左足に引つけ閉足立する（左方を向いて）と同時に、右手を左肘外から上に、左手を右肩前から下に、互に引張る樣に受けかへる。卽ち右手は中段受け、左手は下段受け。（二）を見よ。

（註）此の時右手は半曲げ、右臂は胸と距る約五寸、右拳は肩と水平になり、左右の手の開きは凡そ肩の幅位。

（一）にて左手で敵の右手を防いだ所が、敵が急に右手を引き、

左手と左足とで同時に攻撃して來たのでこれを受けかへた心持である。

（三）　姿勢其のまゝ、右拳は左肘内側より下へ、左拳は右肘外側より上へ、互に引張る樣に、右手下段受け、左手中段受け。（二）の手だけが左右反對になつた姿勢である。

（註）　相手が更に手足を引いて、同時に反對の手足で攻撃して來たので、我が左手で手を受け右手で足を打落す心持。（二）と（三）は左側面より手足の來る時の受け方であるが、又敵の手を受けた場合、我が不利な位置を有利にする場合もある。なほ手足共に來る時は、實際には前屈の姿勢を取つて低くなつた方が有利である。

第四十九圖



平安三段（三）

（四）　左足其のまゝ、右足を第一線右方へ踏出すと同時に（左足其のまゝ後屈）左拳を右肩前より腰に、右拳を左肘外より右横中段受け。顔は右拳前方に向け、體は前向。第一圖と左右反對の姿勢である。

（五）　右足其のまゝ、左足を右足に引つけ閉足立する（右方を向いて）と同時に、左手中段受け、右手下段受けすること、（二）と左右正反對である。

（六）　其のまゝの姿勢で、右手中段受けに、左手下段受けに受けかへる。（三）と左右正反對である。

（七）　右足其のまゝ、左足を第二線上に踏出すと同時に、（右足後屈）左手刀受け、右手（掌を上）胸前に。

平安初段（一九）に同じ。

（八）　左足其のまゝ、右足一歩第二線上に踏出すと同時に、左手刀を右脇下（掌を下）に、右手（四本貫手掌を左向）にて前方中段突。

（註）　右貫手は左手首の上より突出す。拇指は曲げて置く。

我が胸を目がけて突込んで來る敵の右手首を左掌で押へて引寄せつゝ右四本貫手で水月を攻撃するのである。

（九）　突出した右貫手を逆に返し、（三）の如く體を左に捻るや否や、右足を軸とし、一廻轉して左足を更に第二線前方に踏出す（騎馬立）と同時に、左手槌（甲を上）を伸ばして横打ちしながら、右拳腰に、顔を前方に向ける。

（註）　腰を落して左手槌（拳の小指側で打つ事）は肩と水平に伸せ。

わが四本貫手を敵が外して、直ちに手首を逆に捻ぢたので、我は體を捻ぢつて右手を逆に背へ廻す樣にしながら、左へ廻轉して左手槌で敵の脇腹を打つ心持。

(一〇) 左足は其のまゝ、右足大きく第二線前方に一歩踏出す(前屈)と同時に、左拳を腰に、右拳中段突き。

(註) 相手か不意を打たれて一歩退くのに乘じて、前進して水月に最後の一撃を加へた心持。此所氣合をかけよ。

(一一) 右足其の位置に、左足を右足に引つけ乍ら、廻れ左にて後を向く(閉足立)と同時に、兩拳を腕骨(こしぼね)の上に(甲を前に、肘を張る)とる。

(註) (一〇)にて十分の力と氣合を込め、(一一)はユックリと動作せよ。力の强弱、技の緩急とはかかる意である。

(一二)左足其のまゝ、上體の姿勢を崩さずに、右足高く(膝を曲げたまゝ)あげて第二線上後方へ一歩踏込むと共に右肘(拳は腰につけたまゝ)後に引いて反動をつけ、右足が地につくと同時に猿臂を使ふ(此時も拳は腰につけたまゝ)顏は第二線上後方の敵に向けよ。この時騎馬立ちとなる。

(註) 足にて敵の腿を踏碎くと同時に、右肘にて水月を當てる心持。猿臂とは肘にて當てる事をいふ。實際には兩拳を腰につけたまゝでは不便であるから、突込んで來る敵の右手首を我が左手で受け、掴んで引寄せながら、右肘で胸を當て、直ちに右裏拳にて人中を打つ。

(一三) 其のまゝの位置、姿勢にて、右拳を右肩前より右横(第二線上後方)へ打下ろす。肘は心持曲げ、拳は肩の高さ(甲は下向)。

(註) 前記の如く、裏拳にて敵の人中を打つ心持。

(一四) 其のまゝの位置、姿勢にて、右拳を元の位置(右腰骨の上に、甲を前に向けて)に戻す。

(註) (一三)(一四)は敏速に續けて行へ。

(一五) 右足其まゝ、姿勢を崩さぬ樣に、左足を第二線後方に踏込むと同時に、左猿臂を使ふ。「一二」と反對の動作。

(一六) 姿勢其のまゝ、左拳を左肩前より左横へ打下ろす(甲は下)。拳の高さは肩位(一三)の反對動作である。

(一七) 姿勢其のまゝ、左拳を元の位置。左腰骨の上、甲を前に。(一四)の反對に戻す。

(一八) 左足其のまゝ、姿勢を崩さぬ樣に、右足を第二線後方に踏込むと同時に、右猿臂を使ふ。「一二」と同じ動作。

(一九) 姿勢其のまゝ、右裏拳にて右横へ打下す。(一三)と同じ動作。

(二〇) 姿勢其のまゝ、右拳を元の位置に戻す。(一四)と同じ動作。

(註) (一二)より(二〇)までは同じ動作を三回づつ繰返してゐる。此の種の繰返しは澤山あるが、二回目は輕く、三回目に力を入れる樣にするがよい。

(二一) 右足を其のまゝ、左足を更に第二線後方へ踏出す(後方に向いて左足前屈となる)と同時に、左拳中段突、右拳は腰(手甲を下)に。

（二一）　左足共のまゝ、右足を右前に進める（第一線上に左足と並べる）や否や、右足を軸として左に廻り、左第一線上に左足を移す（騎馬立）と同時に、右拳（右肘曲げたまゝ）を大きく振る様に左肩上へ突上げ（甲は上）左肘（拳のまゝ）十分に後に引く。顔は前方を向く。（四）と左右の手が反對になつた姿勢である。

（註）　後方から敵が抱きすくめんとしたので、腰を落して右拳にて敵の顔面を突き、左肘にて敵の脇腹を突いた形。

第五十圖



平安三段（四）

（二二）　騎馬立の姿勢のまゝ、右方へ寄足しながら、左拳を右肩上に突上げ、右肘を引く。（四）の姿勢である。（一六）の反對動作。

（註）　この寄足といふのは、左足に力を入れて地を蹴ると共に、右足を右へすり寄せ、同時に左足も右に寄るので、足の形を變へずに進退するのである。

（二三）　（二一）（二二）の如く、空手では左右同じ手を使ふ事が非常に多いが、これは單に運動としての均整を保つ上からのみでなく、前後左右自由自在に動して、危急の場合の護身術となる様になつてゐる事を忘れてはならない。

（直れ）　左足共のまゝ、右足を少し左に寄せて兩膝伸ばすと共に、兩拳を靜かに腿の前に下して、用意の姿勢に復する。

## 第四　平安四段　（舊稱　ピンアン四段）

（用意）　平安初段に同じ。平安初段（二）參照。演武線は大體士字形に近い。

全部で二七擧動、約一分間で完了する。

（一）　右足原位置、左足を第一線上に踏出す（右足後屈）と同時に兩手を開き（四指を揃へ伸して拇指を曲げる）、右手を額上に（肘を曲げて甲を内側に）上げ、左手前膊を（肘を曲げて甲を左側に）左横に向つて直立し、顔を左方に向ける。（一）參照。

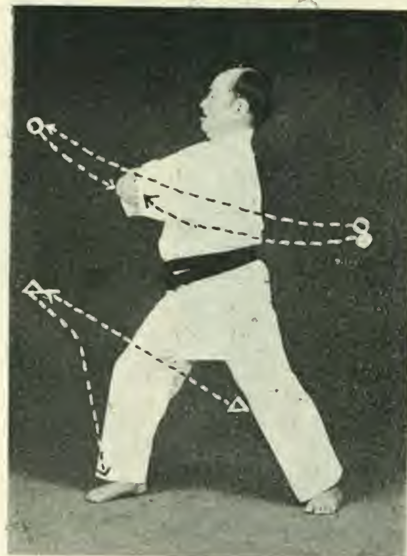
（註）　平安二段第一圖の兩拳を開いた形である。型の意味も平安二段（一）と大體同樣で、左手にて敵の手首を受け、之を摑んで引寄せながら、右手刀にて敵の人中又は頸動脈を打たんとする心持。

（二）　兩足の位置そのまゝ、左足後屈に直して顏を右方に向けると同時に、右手（開いて）にて右方上段、左手甲を額上に當てる、（一）と左右反對の姿勢である。

（三）　右足其のまゝ、左足を一歩第二線上に踏出すと同時に（前屈）兩拳を交叉（兩手の甲を合せる樣にして右手首が上）して前方下段に突出す。上體を起して顏は前方敵の顏に向ける。

（註）　兩肘を十分伸ばして、兩拳は體より六七寸位離れる。敵が我が金的を蹴つて來たので、兩拳で其の向脛を受ける心持。故に上體が前屈みになつたり、視線が下へ向いたりしてはいけない。

第五十一圖



平安四段（一）

（四）　左足其のまゝ、右足一歩前進（第二線上へ、後屈）すると同時に、右拳中段受け（手甲下）、左拳は右肘に輕く接する（手甲下に）。

（五）　右足其のまゝ、左足を右足に引つけ顏を左方に向け乍ら、右拳右腰に（手甲下）とり、左拳を其上に（手甲前）重ね、左足裏を右膝上にあげる。平安二段（四）と左右反對の姿勢。

（六）　右足で立つたまゝ、左方に向つて左裏拳、左足刀を同時に飛ばす（平安二段（五）と左右反對の姿勢）。

（註）　足刀とは足の小指側をいふ。型の意味は平安二段（七）（八）を參照せよ。

（七）　左足を左第三線上に下す（左足前屈）と同時に、右猿臂（拳甲外に向け、右前、膊と胸との間五六寸）を突出し、左掌で右肘外を打つ。（一）と左右反對の姿勢である。

（註）　左方の敵に對し、左裏拳で人中を、左足刀で脇腹（又は金的）を攻擊すると同時に、左足で敵の胸に踏込み、敵の手を摑んで引寄せ乍ら右猿臂を當てる心持。

（八）　左足そのまゝ、右足を寄せて左膝上にあげ顏を右に向けると同時に、左拳を左腰に（甲下）右拳を其の上に（甲前）に構へる。平安二段（四）と同じ姿勢。

（九）　右足で立つたまゝ、右方に向つて右裏拳、右足刀を飛ばす。平安二段（五）と同じ姿勢。

（一〇）　右足を右第三線上に下す（右足前屈）と共に、左猿臂を突出し、右掌にて左肘外を打つ。（六）と反對の動作。（一）の姿勢である。

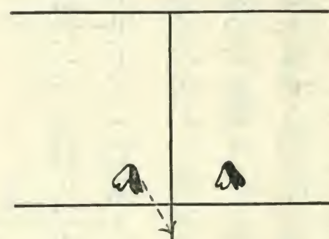
（一一）　兩足の位置其のまゝ、上體前に向く（兩膝伸して）と同時に、右手（開いて、甲を額に接する樣）額前より右方へ大きく半圓を描く樣に打伸ばす（手甲下、（一）を見よ）と同時に、左手（開いたまゝ、甲內側に）上段受け。上體の姿勢は（二）と同樣である。

（註）　前方より突來る敵の手首を右手にて取つた心持。

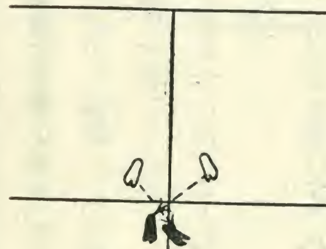
（一二）　其のまゝの姿勢で、（二）の如く右足をなるべく高く右手先を蹴上げる。

（註）　相手の手を我が右手にて摑み引きつゝ、右足にて其の關節を蹴折る意味。故に右足先は右手先


第五十二圖
平安四段（二）




第五十三圖
平安四段（三）



より高く上げるを要する。蹴った足は直ぐに引くやう。

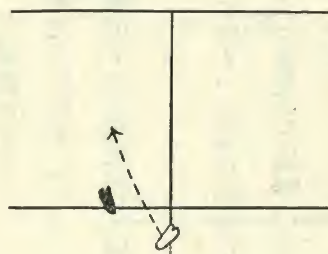
（一三）　右足一歩飛込む（右足で立ち、左足は後に輕く添へること（三）の如し）と同時に、伸ばした右手は一旦胸前に引くや否や、裏拳にて前方を打ち、額の左手は一旦前方に伸す樣に（物を摑み寄せる心持で）して腰に引く。（三）を見よ。

（註）　型の極る時に「エイ」と氣合を掛けよ。

（一四）　右足を軸として廻れ左しながら、左足一歩右第三線上に斜に踏出す（前屈）と同時に、兩拳を交叉（右上に手甲外向）するや否や左右に搔き分ける（搔き分けた時は手甲は外向となる）。

（註）　諸手突の攻擊を我が手首にて左右に搔き分ける心持で、肘を少し曲げ、兩拳の間隔は肩の幅位。上體の姿勢は第四圖と同樣である。


第五十四圖
平安四段（四）



（一五）　上體及び左足共のまゝ、（四）の如く右足を飛ばして兩拳の間を高く蹴上げる。

（一六）　蹴上げた右足を前に下ろす（前屈）や否や、右拳にて中段突、左拳を腰に引く。

（註）　この時右拳を一旦引いてから突かぬやう、（一五）の姿勢に於ける右拳の位置から突出す。從つて（一四）（一五）の時に肘が少し曲つてゐなければいけない。

（一七）　姿勢其のまゝ、左拳中段突すると同時に右拳腰に。

（註）（一六）（一七）は馴れたら敏速に續けて突く。これを連突きといふ。

（一八）左足其まゝ、右足を右斜（左第三線と第二線の間）に踏出す（前屈）と同時に、兩拳を交叉（右上）するや否や掻き分ける。（一四）と反對。

（一九）右足及び上體其のまゝ、左足で兩拳の中間を高く蹴上げる。

（二〇）左足を一步前に下すや否や、左拳中段突、右拳を腰に。

**（註）** 左拳は「十九」の姿勢の位置から直ぐに突出すやうに。

（二一）姿勢其のまゝ、右拳中段突すると同時に、左拳腰に引く。

**（註）** 此所も、足を下すと同時に左、右と連突きをなすこと、（一六）（一七）と同樣。

（二二）右足其のまゝ、左足を左斜（第二線上）に踏出す（右足後屈）と同時に、諸手中段受け。兩手共手甲下、平安三段（七）と同樣。

**（註）** 體は右を向き、顔は前（第二線後方）を向く、左拳は前方中段受け、右拳は左拳の肘に接する。

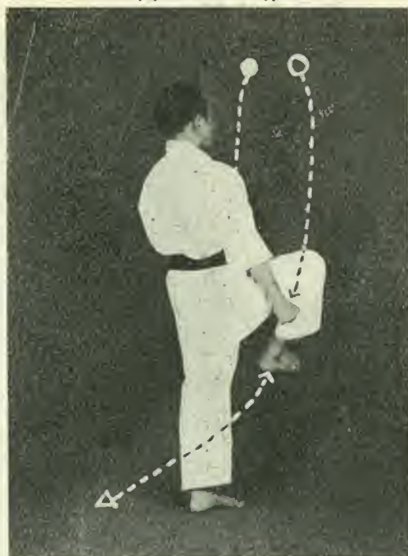
（二三）左足其のまゝ、右足を第二線上後方に向つて進めると同時に、諸手中段受け。（二二）と反對の姿勢。

（二四）右足其のまゝ、左足を第二線上後方に向つて前進すると同時に、諸手中段受け。（二二）と同じ。

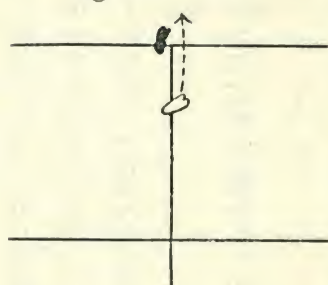
（二五）兩手（開いて掌が向ひ合ふ樣）を頭上に高く上げるや否や、（五）の如く左足にて立ち、右膝を高く上げると同時に、兩手を握りつゝ右膝の左右下に引下す。

**（註）** 兩手で敵の頭を摑み引下ろしつゝ、我が膝頭に顔面を打つける心持である。此所にて「エイ」と掛聲をかけよ。

第五十五圖



平安四段（五）



（二六）右足を前に下すと同時に後を向き（兩足其の位置のまゝ左廻り、右足後屈となる）左手刀受け、右手刀（掌を上）胸前にとる。平安初段（一九）と同じ。

（二七）左足其のまゝ、右足一步前進（第二線上に左足後屈）すると同時に右手刀受け。（二六）と反對の姿勢。

**（直れ）** 左足其のまゝ、右足を引いて八字立、用意の姿勢に復する。

## 第五　平安五段（舊稱　ピンアン五段）

**（用意）** 八字立、平安初段の用意の姿勢に同じ。

全部で二五擧動、約一分間にて完了する。演武線は丁字形に屬する。

(一) 右足其のまゝ後屈、左足を左第二線上に開くと同時に、顔を左に向け、左拳中段内受け(甲下)、右拳腰にとる。(平安三段(一)と全く同樣。

(二) 下體其まゝ、左拳腰に引くと同時に、右拳を左方に（上體を左に捻ぢる樣にして）中段突き。但し右肘少し曲る位がよし。

(註) 左方の敵の拳を左手で内受けするや否や、其の手を摑んで胸部を突く心持。

(三) 左足其のまゝ、右足を左足に引つける(閉足立)と同時に、顔を右に向け右拳腰に、左拳胸部前方（手甲上、胸から五・六寸)に水平に構へる。

(註) 此所はユックリ、手・足・顔の三つが一致するやう。目は左拳を追ふやうな心持で右に移せばよい。左拳は謂はゆる水流れの構へで拳先が少し下り氣味に右脇の向ふまで來る、水月を護るのである。

(四) 左足其のまゝ後屈、右足を右第一線に開くと同時に、右拳中段内受け、左拳腰に。(一)の反對、平安三段(四)と同じ。

(註) (一)(四)共に兩拳に反動をつけるやうに、先づ交叉してから中段受けをなす事も平安三段の時と同じ。

(五) 下體其のまゝ、右拳腰に引くと同時に左拳を右方に(上體右へ捻ぢるやうにして)中段突き。但し左肘が少し曲る位。

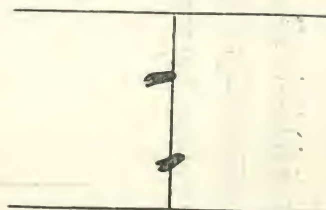




第五十六圖



平安五段(一)



第五十七圖



平安五段(二)



(六) 右足其のまゝ、左足を右足に引きつける(閉足立)と同時に、顔を前に向けながら、左拳腰に、右拳を胸前に水平に構へる。(三)を參照せよ。

(七) 左足其のまゝ、右足を第二線上に一歩前進する(後屈)と同時に、右拳中段内受け、左拳は右肘に接する(共に手甲下)。

(註)體は左向、顔は前を向く。

(八) 右足其のまゝ、左足第三線上に一歩踏出す(前屈)と同時に、兩拳を交叉(右手を上に兩拳の甲を合せるやうに手首を重ねる)して前方下段に突き出す。上體を起し

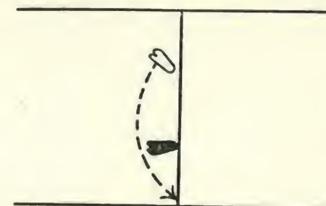
て目は前方を見る。平安四段(二)に同じ。

(註) 兩肘を伸ばして、兩拳は左膝より少し内側。敵の下段蹴りを受けた形。(一)の丸印のある所が拳の位置である。

第五十八圖



平安五段(三)



(九) 下體其のまゝ、手首を交叉したまゝ(一)の如く頭上に突上げつつ兩手を開く。

(註) 此所機敏を要する。敵の下段攻撃を受けた時、續いて上段を襲つて來たので間髪を容れず之を突上げた心持。機に臨み變に應じて自由自在に防禦するのが空手の特長である。敵に依つて轉化するとは之等の事をいつたものであらう。

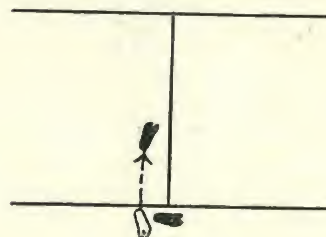
(一〇) 下體其のまゝ、兩手首をつけたまゝ、一旦兩掌を向ひ合はせるやうに開くや否や、左手首にて右手首を押しつけるやうな心持で(二)の姿勢をとる。卽ち右手(掌は上)を前方に伸ばし、左手(掌は下)と手首の所で交叉するやうに。



第五十九圖



平安五段(四)



(註) 上段交叉受けの時、相手が更に左拳で突いて來るのを押へて受ける意味。

(一一) 下體其のまゝ、左拳を前方に突き出すと同時に、右拳腰に引く。

(一二) 左足其のまゝ、右足第二線上に踏出す(前屈)と同時に右拳中段突き。左拳腰に引く。

(註) 此所は止めを刺すといふ心持で十分に力を込め氣合を掛けよ。

(一三) 左足を軸として左廻りに右足を第二線後方に移す(騎馬立)と同時に、右拳下段拂ひ。左拳は腰にとつたまゝ、體は前(第二線右方)向、顏は右(第二線後方)に向ける。

(一四) 下體其のまゝ、顏を左(第二線前方)に向けると同時に、兩手は弓を引くやうな心持で右拳腰に、左手(開いて掌を前に)を左方に伸ばす。

(註) 左方からの中段突を左手首にて引掛けて受ける心持。

（一五）左足其のまゝ、（三）の如く右足を三日月形に飛して、伸ばした左掌を蹴る。

（註）實際は左手で敵の右手首を摑んで引寄せながら、其の胸部を蹴るのである。故に、稽古の時になるべく高く蹴る習慣をつけて、決して左手を下げてはいけない。之を三日月蹴りといふ。

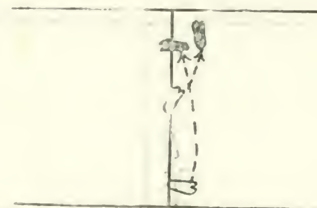
（一六）右足を第二線前方に下す（騎馬立）と同時に、右猿臂（手甲外、右前膊と胸との距離五・六寸）を左掌に打當てる。左掌の位置は（一四）から動かさぬやう顔は前（第二線の左方）を向く。

（註）左手に敵を引きつゝ右肘にて當てる心持。

第六十圖



平安五段（五）



（一七）右足其のまゝ、左足を寄せて右足の後に輕く接し（右足で立つて）同時に顔も右方（第二線前方）に向けながら、右拳を右方に中段內受け、左拳は右肘に輕く接する。

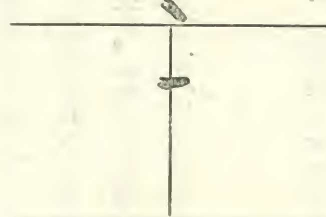
（註）右膝は少し曲げる。拳は左右共甲下。（一六）にて敵に右猿臂を當てたとき、右方から中段の攻撃を受けたので防いだ心持。



第六十一圖



平安五段（六）



（一八）右足其のまゝ、顔を左方（第二線後方）に振向け、左右の拳を第五圖の如く伸ばす（甲下）と共に、左足も左方（第二線後方）に伸ばす（爪先を輕く地につける）。（四）を見よ。

（註）右足は少し曲げたまゝ、之に體重を支へる。上體も少し右に傾け、右拳から左爪先までが斜に一直線をなす様。

（一七）にて身を縮めるや否や（一八）にて大きく伸ばして敵を威壓する心持である。「體の伸縮」といふのはかゝる意味である。

（一九）第二線後方に、右足で地を蹴つて左廻りになるべく高く廣く飛込み、（五）の如く右膝を屈めて立ち、左足は右足の後に輕く接し、左右の拳を交叉（右を上）して下段受けをなす。顔は前（第二線右方）を向く。

（二〇）左足其のまゝ伸ばすと共に、右足を右方（第二線後方）に大きく踏出し（前屈）、同時に右拳（甲は下）にて右方中段受け、左拳（甲は下）右肘に接し、顔は右に向ける。

(二一) 顏を左方（第二線前方）に向けると同時に、右手刀を左膝上に打込み（掌を上）、左手刀（掌を上）を右肩前にとる（左手が上に）や否や、(六)の如く、左右の手を互に引張るやうに握りしめながら、右拳上段受け、左拳下段受けをなす。

（註）この時下段受けの手は同じ側の足と平行するやうに。

(二二) 右足及び上體共のまゝ、左足を右足に引きつける。

(二三) 左足其の位置にて、左へ廻りながら右足を右方（第二線前方）に踏出す（左足後屈）と同時に、左手刀（掌を上）を右膝上に打込み、右手刀（掌を上）を左肩前にとる（右手を上に）や否や、左右の手を互に引張る如く、左拳は左方上段受け、右拳は右方下段受け。(六)と反對の姿勢となる。

（直れ）左足其のまゝ、右足を第一線に戻して左足と並べ八字立となり、左右の拳もユックリと引いて用意の姿勢に復する。

## 第六　拔塞初段（舊稱　バッサイ大）

全部で四十二擧動、約一分間で完了する。演武線は丁字形に屬する。

（用意）(一)の如く、閉足姿勢にて左掌の上に右拳を置く。左掌は右拳を摑まずに輕く曲げておく。金的を護るが如き心持。





第六十二圖



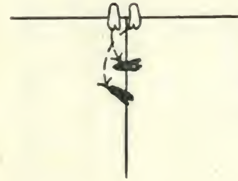
拔塞用意の姿勢　(一)



第六十三圖



拔塞　(二)



(一) 右足一歩第二線上に飛込むや、(二)の如く、右足を屈してこれに體重を支へ、左足を右足の後に輕く接し、同時に右拳は中段內受け、左掌は右手首の橫に圖の如く添へる。此の時體勢は左に向き顏は前方に向く。

(二) 右足其のまゝ、左足を第二線上後方に引き乍ら、上體を左へ廻して後を向き（左足前屈となる）・同時に左拳中段內受け、右拳右腰にとる。

(三) 姿勢其のまゝ、右拳を左肘外より中段受けすると同時に、左拳左腰に引く。此の時右肩を前に出すやうにする。

（註）左手にて相手の右拳を内受けするや、直ちに右手と受け替へて我が不利（相手の左拳及び足が自由に働ける）の位置を有利（相手の左拳及び足によつて攻撃され難い）の位置にかへる意味で、拔塞の特徴とすべき手の一である。この受け替へは今後屢々繰返される。

（四）兩足の位置其のまゝ、上體を右へ廻して第二線前方に振り返りながら、右拳を腰に、左拳（半ば曲げたまゝ上體と共に廻して）中段外受け。右足前屈に變る

（註）後方の敵を防いだ時、前方から又攻撃して來たので振り向きざま左拳で外受けする心持。

（五）姿勢其のまゝ、右拳にて受け替へると同時に左拳腰に引く。

（註）受け替へる拳は、前に受けてゐる手の下より肘外を通るやうに。腰に引く手と、受け替へる手との手首が互に十字を描く如き心持である。

（六）左足其のまゝ、左足に體重を支へつゝ、右足は右第一線上に移す（一旦左足に引きつける樣に半圓形を描く）と同時に右拳は半ば曲げたまゝ、上體を屈して（上體の姿勢崩さぬ樣）右側下段を內より掬ひ受けるやうにしながら、右足の極まる（前屈）と同時に右拳中段外受けをなす。

（註）この時の右足の動き方は（三）の演武線に示してあるから參照せよ。

（七）姿勢其のまゝ、左拳にて受け替へると同時に右拳を腰に引く。此の時なるべく上體を捻つて左肩を前に出すやうにする。

（八）足は其のまゝ、上體を正面（第二線前方）に向き替へると同時に右足も伸ばし、右拳を右腰に左拳を右拳の上に重ね（左拳の甲前向）、前方を見る。

（九）姿勢其のまゝ、左手を開き（四指揃へ、掌下向）前方に伸す。

（註）前より敵が突込んで來るのを吾が左手にて內側より拂ひ受けた心持。

（一〇）下體は其のまゝ左手を握りしめ乍ら腰に引くと同時に右拳前方中段突をなす。

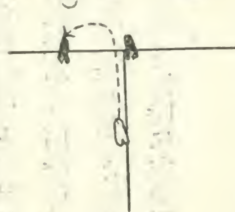
（註）敵の手を摑んで引寄せながら右拳で突く心持。

（一一）足の位置は其のまゝ、（三）の如く、左肩を引くやうにし乍ら上體を左に捻ると同時に、右拳を（四）の如く左へ圓を描くや

第六十四圖



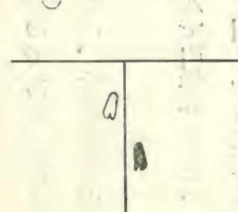
拔塞（三）



第六十五圖



拔塞（四）



うに廻して中段内受けをなす（肘を少し曲げて、手甲は下）右肩は前に出し、上體左方を向き、左足を稍屈する。

（註）敵が吾が胸を攻撃してくるのを受けたのである。目は常に敵の目を注視せよ。

（一二）足の位置其のまゝ、右拳を腰に引くと同時に、左拳前方中段突をなす。此の時兩足は伸して、上體も正面を向く。

（註）斯の如く受けた手を引く時は常に摑んで引寄せるといふ心持を忘れてはならぬ。

（一三）足の位置其のまゝ、（三）と反對に、右肩を引くやうにしながら上體を右に捻ると同時に、左拳を右へ圓を描くやうに廻して（此の時肘を少し曲げ、手甲下を向く）中段内受けをなす。左肩を前に出し、上體右方を向き、右足稍屈し、顏は前向き。すべて（一一）の反對になる。

（一四）左足其のまゝ、右足を第二線上に踏出す（左足後屈）と同時に、右手刀受け。左手胸前（掌を上）に。

（一五）右足其のまゝ、左足第二線上に踏出す（右足後屈）と同時に、左手刀受け、右手胸前に。

（一六）左足其のまゝ、右足を第二線上に前進する（左足後屈）と同時に、右手刀受け。左手胸前に。

（一七）左足其のまゝ、右足一歩後へ戻す（右足後屈）と同時に左手刀受け、右手胸前に。即ち「一六」から（一五）の形に戻る譯である。

（一八）足の位置其のまゝ、右肩を前に突出すやうにして左手の下から右手を前に出し、右受けをなす。右肘少し曲げ左足前屈となる。



第六十六圖



抜塞（五）

第六十七圖



抜塞（六）

（註）右手の動き方は第四圖を參照せよ。

（一九）（四）の如く右足を高く上げるや否や（蹴るのではない）、（五）の如く強く前方に踏込むと同時に兩手を握りしめ乍ら胸の前に強く引きつける。但し左拳が右乳下のあたりにくるやう。

（註）（一八）にて敵の手を引摑むと同時に、（一九）にて足をあげて敵の膸骨上に踏込む心持。故に右足はなるべく高くあげて、手足同時に動作すべし。

（二〇）兩足其のまゝ左廻りに後を

振り向くと同時に、左手刀中段受け、右手は胸前に。

（二一）　左足其のまゝ、右足第二線上後方に向つて一歩踏出すと同時に、右手刀中段受け。左手胸前に。

（二二）　左足其のまゝ、右足を左足に引つけ後方に向つて閉足立になると同時に、（六）の如く諸手上段受け。

（註）　左右の拳を頭上に構へ、左右手首にて敵の上段諸手突を受ける心持である。

（二三）　左足其のまゝ、右足一歩第二線上後方に踏出す（前屈）と共に、頭上の兩拳を、恰も物を引裂くやうな勢で左右に一尺位開くや否や、大きく左右に半圓を描くが如く廻して（手甲を外にして）（七）の如く手槌にて前方中段を挾み打つ（此の時手甲は下になる）。手足同時に極るやうに。

（註）　敵の諸手突を我が諸手で受けるや、之を左右に押し開きざま一歩踏込んで敵の兩脇腹を手槌にて挾撃する心持。

（二四）　姿勢其のまゝ寄足にて進みながら、左拳腰に引き、右拳にて中段突き。

（註）　脇腹を挾撃されて驚き退く敵を、すかさず追ひかけて突止める心持。

（二五）　兩足其のまゝ、上體を左に廻して第二線前方へ振向くと同時に、右手刀を下段に打込み、左手（開いたまゝ甲下）右肩前にとる（右手が下になる）や否や、左右の手を互に握りしめ乍ら引張る如く右拳にて右方上段內受け、左拳にて左方下段受けすると共に、左足を右足に引きつけて立つ。顔は左方（第二線前方）を向く。平安五段の（六）（二一）（二二）を參照せよ。





第六十八圖



拔塞（七）

第六十九圖



拔塞（八）

（二六）　左足そのまゝ、右足を第三線前方に踏出すと同時に、右拳にて右方（第二線前方）下段拂、左拳を腰にとる。顔は右方に向けよ。

（二七）　兩足の位置其のまゝ、顔を左方（第二線後方）に振り向けると同時に、兩手を胸前に交叉して（右が上）互に引張る如く（弓を引く様な心持で）左手（開いて掌を前）左方に伸ばし、右拳は腰に。

（二八）　左足を軸とし、右足を三日月形に飛して、伸した左掌を蹴り左足を其の場（第二線後方、即ち「二七」の姿勢に於ける左手の下）に下ろすと同時に右猿臂を使ふ。此

の時騎馬立となる。蹴る時に左手を下げぬ様注意せよ。平安五段（三）を參照せよ。顔は正面（第二線右方）を向く。

（二九）　位置、姿勢其のまゝ、右拳を下に打伸ばすと同時に、左手は其の場（胸の前）にて握る（左右共手甲前）。

（註）　右手にて下段を受けたる心持。左拳は水月を護る意味。

（三〇）　位置、姿勢其のまゝ、左拳を下に打伸ばすと同時に右拳を胸前にとる。此の時下ろす手は内側を通るやうにせよ。

（三一）　位置、姿勢其のまゝ、右拳を下に打伸すと同時に、左拳を胸前にとる。「二九」と同じ姿勢。

（三二）　兩足の位置其のまゝ、右足前屈になると同時に、左右の拳を左腰に重ね（左拳は甲下に、右拳は甲を前にして左拳の上に）、顔は右方（第二線後方）を見る。

（三三）　位置其のまゝ、左拳にて上段突（甲上向）右拳にて下段突（甲下向）同時に突出す。左右の拳先が垂直に揃ふやうに。（八）の反對の姿勢である。

（三四）　左足其まゝ、右足を左足に引きつけると同時に、右拳を右腰に左拳を其上に重ねる（右甲下、左甲前）。

（三五）　右足其のまゝ、左足を一歩第二線後方に踏出すと同時に（前屈）（八）の如く、右拳上段（甲上）左拳下段（甲下）に突込む。

（三六）　右足其のまゝ、左足を右足に引きつけると同時に、兩拳を左腰に重ねる。

（三七）　左足其のまゝ、右足一歩踏出す（第二線後方へ）と同時に、左拳上段（手甲上）・右拳下段（手甲下）に突込む。

（註）　（三三）から（三七）までは例の三回繰返してある。この手は前髮を捕られた時の攻撃法である。引き寄せられた頭は其のまゝ、敵を見つめて、人中と下腹部に諸手の攻撃をなす。謂はゆる「皮を切らせて肉を切る」の戰法である。

（三八）　右足を軸として、左足を引いて第一線上に左右の足を並べて（間隔廣く）立つと同時に、右拳を上より左下へ圓を描く如く廻しながら下段内受けをする。この時左拳は腰に引き、左肩を十分後へ引き、右肩が前に出るやう。左足は自ら前屈となる。

（三九）　兩足の位置其のまゝ、右拳を腰に引き、右肩を後に引くと同時に、左拳を肩の前より大きく右下へ圓を描く如く廻して下段内受けをなす。此の時左肩を前へ出して半身になること（三八）に同じ。足は自然右足前屈となる。

（註）此の手は敵の足を掬ひ受けるや、之を振り捨てるのであるから、その心持で低く受けることが肝要である。

（四〇）　左足を中央まで寄せ、右足を第二線前方に進める（左足後屈）と同時に、右手刀受、左手胸前に。顔は前方に向ける。

（四一）左足其のまゝ、顏を左斜に向けながら、右手、右足を手刀受の姿勢のまゝ第一線上に移す。

（四二）顏其のまゝ、右足を少しく左足に引きつけ、左足を左斜に進めると同時に（右足後屈）左手刀受、右手胸前に（手刀受の姿勢は平安初段を參照せよ）。

（直れ）直れにて、右足其のまゝ、左足を右足に引きつけると同時に、兩手は用意の姿勢に復する。

全部で六五擧動、約二分間にて完了、演武線は土字形に屬する。

## 第七　觀　空（舊稱　公相君）

（用意）開脚八字立、兩肘を伸し、兩手を金的の前に斜に重ねる（四指を揃へて伸し、拇指は少し離して伸し、四指の先と、拇指の先とを右を上に重ねる）。手甲外向。恰も小笠原流の禮をする時の手の組方に似てゐる。（一）參照。

（一）兩手を其のまゝ靜かに上げて第一圖の如く、額より少し前上の邊に止め、指の間より空を觀る。

（二）組んだ手を引裂くが如き心持にて左右に一尺ばかり開き、又靜かに左右へ圓を描く如く下して左掌（金的の前、掌を外に）の上へ右手（掌を左方に向け）を斜めに重ねる。

（註）用意から（二）までは、何も武器を持たぬといふ事を示すと共に、金的を護る心持も含んでゐる。而してこの手の中に、陰陽は二にして一であり、一にして二であるといふ意味を藏してゐる事を忘れてはならぬ。

第七十圖



觀空（一）

第七十一圖



觀空（二）

（三）左足を一歩左第一線上に開くと同時に（右足後屈）（二）の如く左手（開いたまゝ）上段受け（手首背面にて受ける）右貫手を胸前に構へる。（右手は手刀受の時よりは少し高く）顏は左向。

（四）足の位置其のまゝ、左足後屈にすると同時に、右手（開いたまゝ）上段受け、左貫手胸前に構へる。（二）の反對姿勢。顏は右向。

（五）足の位置其のまゝ、兩膝伸して正面に向き直ると同時に、左手を右脇下に（甲を上）入れて袖を押

へるやうにし乍ら平に前方に打伸すと同時に、右手は(四)の右手の位置から、右方へ掻い込む如く廻して拳を握りしめ乍ら右腰にとる。(三)を參照。

(註) 右手は相手の手を抱へ込む心持、左手は前方からの攻撃を内受けする心持。

(六) 左手を握りしめ乍ら左腰に引くと同時に、右拳中段突。姿勢を崩さぬやう、特に右肩が前へ出ぬやうに注意せよ。

(七) 兩足位置其のまゝ右拳を圓形を描く如く廻して中段内受けすると同時に右肩を出し、左肩を引く(左拳を腰にとつたまゝ)。卽ち上體を左へ捻つて半身になる。左足は自ら屈する。拔塞(三)を參照。

第七十二圖



觀空(三)



(八) 足の位置其のまゝ上體を正面に復すると同時に左拳中段突、右拳は腰に引く。此の時兩膝は伸ばす。

(九) 足の位置其のまゝ、上體を右に捻りながら左拳を廻して中段内受けすると同時に、左肩前に出し右肩を引く(右拳腰にとつたまゝ)。

(註) (七)(八)(九)の動作は拔塞の時と同じである。

(一〇) 左足を中央まで引き寄せながら、後方を振り向くと同時に、左腰に兩拳を重ね(左甲下右甲前)、右足裏を左膝頭の上まで上げる。平安二段(四)に同じ。

(一一) 右裏拳にて後方の敵の上段を打ち、同時に右足刀にて金的を蹴放す。平安二段の(八)に同じ。

(一二) 右足を下すと同時に(右足後屈)第二線前方を振向き左手刀中段受け、右貫手を胸前に構へる。

(註) これも平安二段と同じ。而して(一一)(一二)は敏速に續けて動作することを忘れぬよう。

(一三) 左足其のまゝ、右足一歩第二線上に前進する(左足後屈)と同時に、右手刀中段受け。

(一四) 右足其のまゝ、左足一歩第二線上に前進する(右足後屈)や否や、左手刀中段受け。

(一五) 左足其のまゝ、右足一歩前進すると同時に、右四本貫手にて中段突(掌左向)。左手は右手の下を滑るように右脇下に(掌下向)つける。

(註) (一〇)より(一五)までは平安二段と全く同じであるから參照せよ。

(一六) 兩足の位置其のまゝ、左廻りに第二線後方を振向くと同時に、右手甲を額に接するように大きく振廻し乍ら前方(第二線後方)に打伸ばし(右手刀の極まる時は甲は下)、同時に左手(開いたまゝ手甲は額に向ふ)上段受け。

（註）（一六）（一七）の要領は平安四段（一一）（一三）と全く同じであるから、參照せよ。

（一七）右足を飛して右手の先を蹴上げる。

（一八）右足を第二線上後方に下すと同時に第二線前方を振り向きざま、右手刀にて下段（左腿上の邊）に打込み左手刀を右肩前にとる（右手を下にして掌は共に上向）や否や、左右の手を互に引張る如く握りしめ乍ら、右拳を右方（第二線後方）に上段内受け（手甲外向）、左拳を左方（第二線前方）に下段拂ひ。此の時右足後屈に顔は左方を向く。

（一九）兩足其のまゝにて再び右手刀を下段に打込み、左手刀を右肩前にとる（兩掌とも上向）。

（註）平安五段（六）と全く同じ。此時右拳より胴を通り左拳まで斜に一線をなす。

（二〇）右足の位置そのまゝ、左足を少し右足に引きつけて立上ると同時に、左右の手を握りしめ乍ら互に引張るやうな心持で、右拳を右腰に引き、左拳を左方（第二線前方）に水平に伸ばす（手甲上）。顔は左方を向く。

（二一）足の位置其のまゝ第二線前方に向つて（一六）と同樣、右手刀を額前より右方へ大きく廻して打伸し（掌上向）右手刀の極まる時、左手刀は額前に上段受け（掌前向）。

（二二）右足を飛ばして右手の先を蹴る。

（二三）右足を第二線前方に下すと同時に、（一八）と同樣後方を振り向きざま右手刀を左方下段に打込み左手刀を右肩前にとるや否や、左右の手を握りしめながら互に引張る如く、右拳は右方（第二線前方）に上段受け、左拳は左方に下段拂ひ。此の時右足後屈にて、顔は左方（第二線後方）を向く。

（二四）兩足其の位置にて、再び右手刀を下段に打込み、左手刀を右肩前にとる。

（二五）右足の位置其のまゝ、左足を右足に引きつけて立ち上ると同時に、左右の手を握りしめ乍ら互に引張る心持で、右拳を右腰に引き、左拳を左方（第二線後方）に水平に伸ばす。（二〇）と同じ。

（二六）右腰に兩拳を重ねる（右甲下、左甲前）と同時に、左方（第三線右方）に顔を向け、左足を右膝上に上げて左横蹴りの構へ。

（二七）左裏拳にて左方（右第三線上）上段に打込むと同時に、左足刀にて左横蹴り。

（二八）蹴放した左足を其の場（右第三線上）に下す（左足前屈）と同時に、右猿臂を使ひ、左掌にて右肘を打つ。（二七）より（三一）までは平安四段の横蹴りと全く同じであるから、同項を參照せよ。

（二九）右足を左足に引きつけて立ち上ると同時に、右方（左第三線上）を向き、兩拳を左腰に重ね、右足裏を左膝上に揩り上げる。

（三〇）右裏拳にて右方（左第三線上）上段に打込むと同時に、右足刀にて右横蹴り。

（三一）蹴り放した右足を其の場（左第三線上）に下す（右足前屈）と同時に、左猿臂を使ひ、右掌にて左肘を打つ。

（註）右足を下す時、少し左足を引摺つて進める氣持があつてよい。（二八）も同じ要領。

（三二）兩足の位置其のまゝ、右足後屈の姿勢にて左方（右第三線）を振り向くと同時に左手刀受け。

（三三）左足其のまゝ、右足を一歩斜左前方に踏出すと同時に右手刀受け（左足後屈となる）

（註）（三二）より（三五）までは平安二段（一二）より（一五）までに全く同じ。同項を參照せよ。

（三四）左足其のまゝ、右足を第三線上に戻して（左足後屈のまゝ）右手刀受け。

（三五）右足其のまゝ、左足を一歩斜右前方に踏出すと同時に、左手刀受け（右足後屈となる）。

（三六）右足其のまゝ、左足を第二線上後方に移すと同時に、右手刀を額前より（手甲が額に接する位に）右方に廻して前方（第二線上後方）に向つて水平に打伸し（掌が上向）右手極まる時左手刀を額上（掌前向）に上段受け。此の時左足前屈になり、右肩を前に出して、上體左へ捻る心持。

（註）（一六）（二一）に同じ。

（三七）右足を飛ばして右手の先を蹴上る。蹴つた足は直ちに引け。

（三八）右足を前方（第二線後方）に一歩飛び込み、右足を屈して之に體重を支へ、左足を右足の後に輕く添へて立つと同時に、左手は一度伸して前の物を攔んで引寄せる心持で腰にとり、右手は腹から胸へ摺り上げるやうに大きく廻して裏拳にて上段を打つ。手足同時に極まるやう。

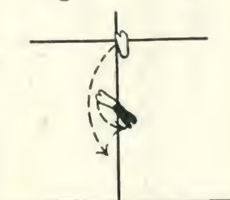




第七十三圖



觀空（四）



第七十四圖



觀空（五）



（註）これも平安四段の飛込みの手と全く同じであるから、同項を參照せよ。

（三九）左足を一歩引く（右足前屈）と同時に右拳にて中段內受け。

（四〇）下體其のまゝ、右拳を腰に引くと同時に左拳中段突。

（四一）下體其のまゝ、左拳引くと同時に右拳中段突。

（註）（四〇）（四一）は連突きであるから敏速に續けて突くのである。

（四二）左足を軸として、左廻りに後方（第二線前方）へ振向くと同時に、（四）の如く右膝を高く上

げ、兩掌にて右太股左右から摺り上げるやうにしながら右拳（甲下）前方中段に突出し、左掌を右手首に添へる。

（四三）左足其のまゝ、右足を前方に下すと同時に、（五）の如く右足前屈兩手の指先を地に着ける。但し目は前方を見つめよ。

（註）これは觀空獨特の姿勢で、互に手の詰つた時急に身を伏せて意表に出で、敵の虛を衝く手である

（四四）兩足其のまゝ、上體左へ捻つて後方を振り向きざま、右足後屈の姿勢にて、左手刀にて左方下段拂（左掌は左腿と向ひ合ひ五六寸の距離）、右手刀は乳下に構へる（掌上向）。

（四五）左足其のまゝ、右足一歩第二線上後方に踏出して右手刀受け（左足後屈）。

（四六）右足を軸として左廻りに左第一線に左足を移す（左足前屈）と同時に、左拳にて左方中段內受け、右拳右腰にとる。

（四七）足其のまゝ、左拳を引くと同時に右方中段突。

（四八）足の位置其のまゝ、上體を右へ捻つて（右足前屈）右拳にて右方中段內受け、左拳腰に引く。

（四九）下體其のまゝ、右拳を引くと同時に左拳中段突。

（五〇）下體其のまゝ、左拳を引くと同時に右拳中段突。

（註）（四九）（五〇）は連突きをなせ。

（五一）左足で立つて右方（第二線後方）に振向くと同時に、右足を左膝前に摺り上げ、兩拳を左腰に重ねて、右橫蹴りの構へをなす。

（五二）左足で立つたまゝ、第二線後方に向つて右裏拳にて上段を打ち、同時に右足刀にて下段を蹴放す

（五三）後第二線上に右足を下すと同時に、（右足後屈）第二線前方に振り向き、左手刀中段受け。

（五四）第二線上に右足一歩前進すると同時に、右四本貫手にて中段突（掌左向）左手刀は右腕下を滑るやうに、右脇下にとる（掌下向）。

（五五）右手を逆に捻ぢられたるものと假想して（但し平安三段の場合とは反對に、右廻しに）右肩の上に捻るやうに、體と共に捻ぢ廻しながら、右足を軸として左廻りに、左足を第二線前方に踏出す（騎馬立）と同時に、左裏拳にて大きく左方（第二線前方）上段を打つ。左裏拳の極まる時、右拳は右腰に構へよ。顏左向。

（五六）左方（第二線上前方）へ（寄足にて進むと同時に、左拳を大きく廻して裏拳にて上段を打つ。姿勢崩さぬやう。

（五七）足の位置其のまゝ、上體を左へ捻りながら、右猿臂にて左方（第二線前方）の敵に一擊、左掌にて右肘を打つ。左足は自然前屈になる。

（五八）足の位置其のまゝ（右足前屈になる）、上體を正面（第二線右方）に復すると同時に、顏は右方（第二線

第七十五圖



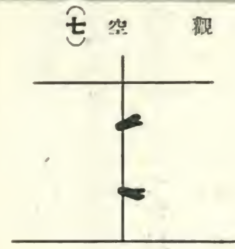
觀空（六）



第七十六圖



觀空（七）



後方）に向け、兩拳を左腰に重ねる。

（五九）姿勢其のまゝ、右拳にて下段拂。

（六〇）右足を軸として、（六）の如く右廻りに左足を第二線上後方に移す（騎馬立）と同時に、左拳を上より大きく打下し、右拳を高く振り上げる。

（六一）姿勢其のまゝ崩さぬやう、（七）の如く、振り上げた右拳を左拳の下（左右の手首が交叉するやう）に打下ろす。

（六二）其の位置にて、兩手を開き乍ら（手首交叉したまゝ）頭上に突

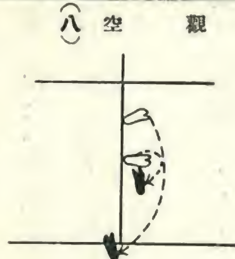




第七十七圖



觀空（八）



上げると同時に、兩膝を伸ばす。（八）の手の形參照。

（六三）兩手を頭上に組んだまゝ、第八圖の如く右足を軸として右廻りに、左足を第二線前方に移す、右足前屈になる（第二線後方に向ふ）。

（六四）下體其のまゝ、手首組んだまゝ兩手を握りしめ乍ら少しく引き下げる（目より見下す高さまで）。

（六五）第二線後方に向つて、左足にて蹴上げるや否や、右足も續けて高く蹴上げる（左足の地に着かぬ先に右足を蹴上げよ）と同時に、左手を以て前の物を摑み寄せる心持にて左拳を腰に引き、右拳は腹から胸を摺り上げるやうに大きく廻して、裏拳にて前方（第二線後方）上段に打込む。手の極まる時、兩足は地上について右足前屈となる。

（直れ）右足を軸として右廻りに、左足を左第一線上に移しながら、上體を屈して右拳（甲下）にて下段を内より拂ふ如く廻しながら、左足の地に着く時、兩拳は腿の前に自然に垂れる。平安

初段の用意の姿勢に同じである。

(註)　この觀空の型は、空手の型の中でも最も長いものの一で、俗に「八人の敵と鬪ふ手」と言はれてゐる位、非常に變化に富んだいゝ型である。たとへ敵が何人ゐても同一人に同時に襲ひかゝれるのは四人に過ぎないといふ事は、昔から言はれてゐる通りであるから、この型に熟練すれば、何百人を向ふに廻しても立派に鬪ひ得るのである。

## 第八　騎馬立初段　(舊稱　ナイハンチ初段)

第七十八圖



(騎馬立初段用意の姿勢)

全部で二九擧動、凡一分間で完了する。騎馬立の演武線は、初段より三段まで、何れも第一線のみである。

(用意)　閉足立にて左右の掌を開いて、左を上に、金的を護るが如き位置に重ねる。

(註)　兩掌を開いたのは、武器を持たぬ事を表示してゐる。又金的を護る意味にて兩掌は體から少し離れた方がよい。





第七十九圖



騎馬立初段　(一)

第八十圖



騎馬立初段　(二)

(一)　右側面を向くと同時に(一)の如く、右足及體位は其のまゝ、左足は輕く第一線上右方に右足を越えて脚を交叉する。

(註)　この時腰を落す心持である。右側の敵に對して防禦の心構へである。

(二)　左足は原位置、目は右方を見たるまゝ右足を第一線上右方に大きく踏出す(騎馬立の姿勢)と同時に、左拳腰に、右手(掌を前に)を右方へ伸ばし(右肩前に圓弧を描くが如き心持で)、(二)の姿勢となる。

(註)　騎馬立の姿勢については、組織篇の立方の所で詳しく解説して置いたから參照せよ。この立方がこの型の生命であるから十分注意して練習せられたい。右方からの攻撃を右手首に引掛けて受けた心持。

第八十一圖



騎馬立初段（三）

第八十二圖



騎馬立初段（四）

（三）腰から下は動かさず其のまゝ、（三）の如く上體だけ右に捻ぢながら、左猿臂（肘の當身を猿臂と言ふ）を張ると同時に、右手は相手を引寄せるが如き心持で右掌にて左肘を打つ。

（註）猿臂を使ふ時には、拳は握つたまゝ、手甲は外に向けて、前膊部は胸と並行して其の間隔五六寸。上體だけ捻ぢつて下體を崩さぬやうに注意する。

（四）下體は其のまゝ動かさず、（四）の如く顔は左側（第一線上左方）を振り向くと同時に、右拳腰に、左方（甲を外）を其の上に重ねる。

（註）上體は正面に向ひ、顔だけ左を向ける。肩の上らぬやうに注意せよ。





第八十三圖



騎馬立初段（五）

第八十四圖



騎馬立初段（六）

（五）其のまゝの姿勢を崩さず、左拳を右肩前より反動をつけて下段受け。（五）の姿勢。

（註）左拳は左腿より五六寸離れた位置に、平安初段（一）の前屈下段受けが騎馬立に變つただけで、他はすべて同じ。

（六）其のまゝの姿勢で、左拳を捻ぢ上げるが如く左腰に引きつけると同時に、右拳を（六）の如く胸の前に構へる。

（註）右手の位置は前膊が水月の前あたりに、胸部と並行する位、腕と胸の距離は五六寸。而して右拳の先が左脇腹を過ぎぬやう、肘から手首にかけて幾分下り氣味（之を水流れといふ）にせよ。この右手は水月を護る意味である。

第八十五圖



騎馬立初段（七）

第八十六圖



騎馬立初段（八）

（七） 左足其のまゝ、體の姿勢を崩さぬやうに、（七）の如く右足は左足の上を輕く越えて交叉する。

（註） この時も腰を落したるまゝ動作せよ。左側の敵に對する防禦の用意である。

（八） 右足原位置に、左足を大きく左方に踏出す（騎馬立）と同時に、顔は正面を向き、右前膊を起して中段內受け。即ち（八）の姿勢となる。

（註） 右拳は目より見下ろす高さにあり、肘と體との距離は凡そ五六寸。





第八十七圖



騎馬立初段（九）

第八十八圖



騎馬立初段（一〇）

（九） 其のまゝの姿勢を崩さず、右拳を左肩前に（手甲は下）左拳は前方にとるや、（九）の反動にて直ちに

（一〇） （一〇）の如く右は右拳下方に（甲外）下段受け、左拳は左肩前方に（甲外）中段受けするや否や

（註） この際右拳の先が左肘の內側を擦る位に、左右の拳を上下に強く引張る心持。敵の手足を同時に受けた形である。

第八十九圖



騎馬立初段　(一一)

第九十圖



騎馬立初段　(一二)

(一一)　左裏拳にて(一一)の如く眞向を打つと同時に、右拳(甲は上)の手首を左肘下に接する。

(註)　この(九)(一〇)(一一)の動作は騎馬立特有の型でむづかしい型であるから十分に練習を要する。而して(九)(一〇)は動作の順序を示す爲に入れたので、實際は(九)(一〇)(一一)まで一擧動として瞬間に動作すべきである。(一一)の型の意味は、敵の拳を右手にて押へ引き寄せつゝ、左裏拳にて人中を打つ心持である。從つて左裏拳はなるべく顔の眞向になければならぬ。

(一二)　其のまゝ姿勢を崩さず、(一二)の如く顔だけ左側面を見る。



第九十一圖



騎馬立初段　(一三)

第九十二圖



騎馬立初段　(一四)

(一三)　上體の姿勢は其のまゝ、(一三)の如く素早く左足を内側に蹴上げる如く上げる。左蹠が右膝頭の上あたりに來るやう。

(註)　敵が蹴込んで來た足を、我が蹠にて拂ひたる意味。熟練したら(一三)(一四)は一擧動とせよ。

(一四)　(一四)の如く左足を元の位置に強く踏み込む(騎馬立)と同時に、左拳をギリリと廻し(手甲が上に向く位まで)ながら、上體だけ左方に捻ぢ向ける。この時右手は其のまゝ左肘の下に接しておく。

(註)　上體を左に向ける時、下體の崩れぬやう注意せよ。

左足にて相手の足に踏込みつゝ、左手首にて相手の拳を受けたる意味。

第九十三圖



騎馬立初段（一五）

第九十四圖



騎馬立初段（一六）

（一五） 其のまゝの姿勢を崩さず、（一五）の如く顔だけ右側面を向く。

（註） 右側よりの敵の攻撃を察して用意する心持である。

（一六） 上體の姿勢、及左足は其のまゝ、（一六）の如く素早く右足を内側に蹴上げる如く上げる。右蹠が左膝頭の上あたりに來るやう。

（註） 左足は屈して、腰を落したるまゝ。すべて（一三）の反對の姿勢である。熟練したら（一六）（一七）は一擧動とせよ。





第九十五圖



騎馬立初段（一七）

第九十六圖



騎馬立初段（一八）

（一七）右足を強く元の位置に踏み込む（騎馬立）と同時に、上體だけ手と共に（一七）の如く右に捻ぢ廻はしながら、左手にて中段受けこの時左手の甲は下になるやうに。

（註） 右足にて敵の足を拂ひざま、直ちに敵の今一方の足に踏み込み、左手にて敵の中段攻撃を受けたる意味。

（一八） 下體其のまゝ、（一八）の如く顔を左方に向ける（上體は正面を向く）と同時に、右拳は腰に、左拳は其の上に（手甲外）重ねる。

（註） 右方の敵を防ぎたる時、左方よりも敵の來るを察して、振り向きて用意したる意味。

第九十七圖



騎馬立初段（一九）

第九十八圖



騎馬立初段（二〇）

（一九）其のまゝの姿勢を崩さず、右腰に構へた左右の拳を同時に（一九）の如く左方に突出す。但し左拳は眞直に左方に伸ばし、右拳は肘を曲げて、前膊部が胸の前五六寸に、拳先が左肩の下、脇腹と並ぶ位。

（註）諸手突の一種である。左拳は敵の突込む拳を外方に拂ひのけ乍ら中段を攻撃し、右拳も胸を護ると共に攻撃の意を含む（實際には上體をもつと左に捻ぢて右拳にて胸部を攻撃する事も出來る）。

（二〇）姿勢は其のまゝ、（二〇）の如く右拳を右腰に引くと共に、左手を開いて（手甲を後に）左方から突いて來るのを、我が左手首に引掛けて受ける心持。

（註）（二）と反對の姿勢である。





第九十九圖



騎馬立初段（二一）

第百圖



騎馬立初段（二二）

（二一）下體は其のまゝ、上體だけを（二一）の如く左に捻ぢ向けると共に、右猿臂を突出し（右拳握りたるまゝ甲を外に）ながら、左手にて相手を掴み引き寄せる心持にて、左掌にて右臂を打つ。

（註）（三）と左右反對の姿勢、下體崩れぬやう。

（二二）下體は其のまゝ、（二二）のやうに顔を右方に振り向ける（上體は前面に向く）と同時に、左拳腰にとり、右拳を其の上に（手甲外）重ねる。

（註）（四）と反對の姿勢。

第百一圖



騎馬立初段（二三）



第百二圖



騎馬立初段（二四）



（二三）　其のまゝの姿勢にて、右拳を肩前より斜めに、右側面下段受け。（二三）の姿勢となる。

（註）　（五）と左右反對の姿勢。

（二四）　其のまゝの姿勢にて、（二四）の如く右拳を捻ぢ上げる如く右腰に引きつけ、左拳を胸部の前方に水平に構へる。

（註）　左拳の先が右脇腹より出ぬやう。胸と腕との間は隔り五六寸、肘から手首にかけて少し下り氣味になる。謂はゆる「水流れ」である。





第百三圖



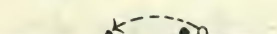
騎馬立初段（二五）



第百四圖



騎馬立初段（二六）



（二五）　上體及び右足は其のまゝ、左足は（二五）の如く輕く右足を越えて踏み出す。

（註）　この際腰を落し、膝を屈する事を忘れぬやう、兩足の開く時も交叉する時も、腰の高さは常に一定と思へばよい。

（二六）　左足其のまゝ、右足を大きく一歩右に踏み出す（騎馬立）と同時に、（二六）の如く左手を起して中段内受けし、顔も前方に向ける。

（註）　（八）と反對の姿勢。

第百五圖



騎馬立初段　（二七）

第百六圖



騎馬立初段　（二八）

（二七）　其のまゝの姿勢にて、（二七）の如く左拳を右肩前（甲前）にとり、右拳を前下方（甲前）に伸ばすや、其の反動で直ちに、

（二八）　（二八）の如く右拳は右上に、左拳は左下に（共に手甲前）互に強く引張る如く引くや否や、

（註）　左右の手首にて敵の手足を同時に受けたる心持。





第百七圖



騎馬立初段　（二九）

第百八圖



騎馬立初段　（三〇）

（二九）　右拳を右肩上に振り上げ（手甲後向）ざま（二九）の如く眞向目がけて打ち下ろすと同時に左拳の手首を右肘下に接する。

（註）　（九）（一〇）（一一）と同様に（二七）（二八）（二九）は一擧動として敏速に動作せよ。（二九）の右拳は、相手の人中を打つ心持にて眞正面に向はなければいけない。

（三〇）　其のまゝの姿勢にて、（三〇）の如く顔だけ右方を向く。

第百九圖



騎馬立初段（三一）

第百十圖



騎馬立初段（三二）

（三一） 其のまゝの姿勢にて、（三一）の如く敏速に右足を内側に蹴上げる如く引く。

（註） 右蹠が左膝頭の上あたりに來るやう、而して左足は屈して、腰を落したるまゝ。熟練したら（三一）（三二）は一擧動とせよ。

（三二） 右足を元の位置に強く踏み込むと同時に、（三二）の如く手と共に上體を右方に捻ぢ向け、中段受けをなす。

（註） 右手首をギリッと廻すやうに、手甲を上向にして、右手首で受ける。左手は右肘に接したるまゝ。





第百十一圖



騎馬立初段（三三）

第百十二圖



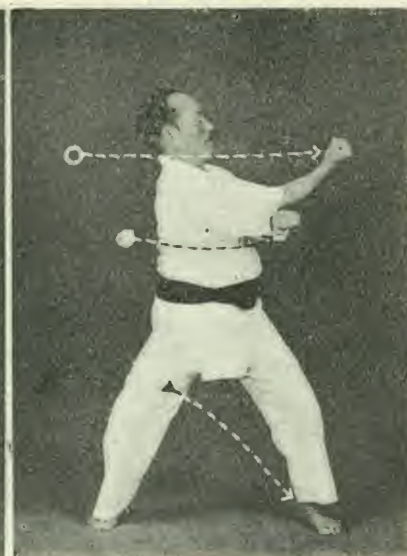
騎馬立初段（三四）

（三三） 其のまゝの姿勢にて、（三三）の如く顔だけを左側面に向ける。

（三四） 其のまゝの姿勢にて、（三四）の如く左足を敏速に内側に蹴上げる。左蹠が右膝頭の上に來るやうに。

（註） 右足を屈し、腰を落したまゝ。これも熟練したら（三四）（三五）を一擧動とせよ。

第百十三圖



騎馬立初段　（三五）

第百十四圖



騎馬立初段　（三六）

（三五）　あげたる左足を（三五）の如く元の位置に力強く踏み込むと同時に、上體だけ手と共に左方に捻ぢ向けて中段受けをなす。

（註）　下體がシッカリ騎馬立になつてゐなければならない。

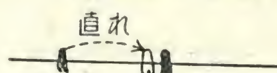
（三六）　下體は其のまゝ、（三六）の如く顔を右方に振り向けると共に（上體は正面を向く）左拳を腰にとり、右拳を其の上に重ねる。



第百十五圖



騎馬立初段　（三七）




（三七）　其のまゝの姿勢にて、（三七）の如く左右の拳を一時に右方に突出す。

（註）　右手は右方に眞直に伸ばし、左手は肘を曲げて、前膊が胸部の前五六寸の位置に、左拳の先が右脇腹より出ぬやう。

（直れ）　直れの號令と共に、左足は動かさず右足を引いて先づユックリと手足を元の用意の姿勢に復し、次いで顔も静かに正面を向く。

（注意）　この解説では解り易いやうに三七に分けて説明したが、實際には（九、一〇、一一）（一三、一四）（一六、一七）（二七、二八、二九）（三一、三二）（三四、三五）がすべて一擧動となるから二九擧動となる。

## 第九 騎馬立二段（舊稱 ナイハンチ二段）

全部で二六擧動よりなり、約一分間にて完了する。演武線は前の初段と同じく第一線のみである。

**（用意）** 演武線の左端に八字立ち、兩手を握り自然に垂れて、兩拳は腿の前に、平安初段の用意の姿勢に同じ。

**（一）** 顔だけ右方に向くと同時に、（一）の如く右足其の儘、左足は右足を輕く越えて交叉し、兩肘を折曲げて水平に張り、兩拳は乳の下に。

**（註）** 右方の敵に對し、胸部を護りながら用意する。

**（二）** 左足其のまゝ、右足を大きく一歩右へ踏出す（騎馬立）と同時に、兩手を立てる（兩手甲外向兩拳が顔の前に來る）やうに反動をつけて（二）の如く右手中段受け（手甲上向）すると共に、左手は胸部の前に水平に構へる（手甲上）

**（註）** 右拳は肩の高さに、右肘は脇腹より五六寸、顔は右方に向けたるまゝ。右側からの中段突きを、右手首にて内受けしたる所、左手は胸部を護る。

**（三）** 右足其のまゝ、左足は輕く右足を越えて交叉しながら顔は右方を向けたまゝ、右拳は前方（手甲下向）に打ち伸ばすと同時に、左手を開いて（四指を揃へ拇指下）右肘を輕く左方より支へる。



第百十六圖



騎馬立二段（一）

第百十七圖



騎馬立二段（二）

**（註）** 左拳の高さは乳の下位。右肘は伸ばして左前膊は胸と平行する。右方の敵を禦いだ時、前方からも攻撃して來るのを察して、右手にてそれを防ぎながら顔だけ右を向いて、なほ右方の敵に對する注意を怠らぬ意味。

**（四）** 左足其のまゝ、右足大きく一歩右へ踏出す（騎馬立）と同時に、顔、上體は其のまゝ、右拳（甲下向）を右方へ、左手を添へたまゝ押しやる。此の時右拳の高さは腰の上位。

**（註）** 右側の敵の中段攻擊を、右手首にて外側へ押除けた形。

**（五）** 右足其のまゝ、左足を引いて閉足立する（兩膝を伸ばして）と同時に、顔は左側を振向き兩肘を曲げて水平に張る。兩拳は甲を上に兩乳の下あたり。（一）に同じ。

(六) 顔及び右足其のまゝ、左足を左方へ大きく一歩踏出す(騎馬立)と同時に、兩手を立てるやうに(甲は外)反動をつけ乍ら左手(甲は上)中段受、右手は胸部の前に水平に(甲は上)構へる。(二)と反對。

(七) 顔左向、上體前向のまゝ、右足は輕く左足を越えて交叉すると同時に、左手(拳のまゝ甲は下向)を前方に打伸ばすと共に、右手を開き(四指を揃へ、拇指下)、左肘に右方から輕く添へる。すべて(三)の反對。

(註) 左拳の高さは水月のあたり、右肘張つて右上膊は胸と平行する。

(八) 上體及び右足其のまゝ、左足は一歩左方へ大きく踏出し(騎馬立)乍ら、左手(拳の甲下向)を左方へ右手を添へたまゝ押しやる。すべて(四)の反對。

(註) 左肘は伸ばしたまゝ、左拳の高さは腰の上くらゐ。

(九) 下體其のまゝ、顔を右方へ振向けると同時に、左手を開いて左腰に(手甲左)引くと共に、右拳を左腰(手甲外)に構へる。右拳に左掌が接するやう。

(一〇) 顔及び下體其のまゝ、(三)の如く左右の手は同時に、右拳にて右側中段受け(甲下向)、左掌は右手首に添へる。

(註) 左右の手が離れぬやうに動作せよ。上體は前向きのまゝ。

(一一) 左足其のまゝ、(四)の如く顔は前に向けると同時に右膝を高くあげ、右脇腹に兩手を流す如く、右



第百十八圖



騎馬立二段 (三)

第百十九圖



騎馬立二段 (四)

拳腰(甲下)に、左掌之に當てる。

(一二) 右足を元の位置に(五)の如く強く踏込むと同時に、(騎馬立)上體を左に捻つて右肘を前方に突出す。右拳の甲は上向、左掌之に當てたるまゝ。

(註) この時下體が崩れぬやうに、上體立てて左に捻るも、顔は前方に向けたるまゝ。寫眞及解説では(十一)(十二)と分けて説明したが、本當は右二つを一擧動とする。この手の意味は右足にて相手の足に踏込みざま、右猿臂にて水月を當てたところ。

(一三) 下體其のまゝ、(六)の如く上體元に復すると共に顔は右に向け、同時に右手を開いて中段受け、左拳を腰に。

(註) 右方よりの中段攻撃の拳を、右手に


第百二十圖　騎馬立二段（五）


第百二十一圖　騎馬立二段（六）

て摑む心持、手は肩の高さ。

（一四）其のまゝの姿勢を崩さず、右手を握りながら腰に（甲向下）左拳を胸の前に水平（甲上向）に構へる。

（註）右手にて相手の手首を摑んで捻ぢ上げながら腰に引込む心持。

（一五）上體及び右足其のまゝ、左足輕く右足を越えて交叉する。

（一六）左足其のまゝ、右足大きく右へ一歩踏出す（騎馬立）と同時に、顔は前方を向き、左手（甲下向）を起して前方中段受け、右拳腰にとりたるまゝ。（騎馬立初段（二六）參照。

（一七）姿勢は其のまゝ、左拳は右肩前より下へ、右拳は左肘外より上へ、互に引張る如く受ける（左下段受、右中段受）や否や、

（一八）右拳を右肩上に振上げざま（手甲後）裏拳にて前方上段に打込むと同時に、左拳（手甲上）の手首が右肘下に接する位に、左手を胸部の前水平に構へる。

（註）（一七）（一八）は一擧動にてなせ。騎馬立初段（二七）（二八）（二九）に同じ。

（一九）兩足其のまゝ、顔を左に向けると共に、右手を開いて（甲右向）右腰に引き、左拳を右掌に當てる（九）の反對。

（二〇）姿勢は其のまゝ、左拳にて左方中段受け（甲下向）すると同時に、右掌は左手首に添へる。（一〇）の反對、（三）を見よ。

（註）左右の手が離れぬやう動作せよ。

（二一）右足其のまゝ、顔を前に向けると同時に、左膝を高くあげ、左脇腹に兩手を流す如くに左拳を腰に（甲下）右掌を之に當てる。（四）の反對姿勢。

（二二）左足を元の位置に強く踏込むと同時に（騎馬立）上體を右へ捻つて左肘を突出す。左拳の甲は上向、右掌之に當てたるまゝ。（五）の反對姿勢。

（註）（一一）（一二）の反對動作、注意要領も同じ實際は（一一）（一二）を一擧動とせよ。

（二三）下體其のまゝ、上體元に復すると共に、顔を左方に向け、同時に左手を開いて中段受け（甲を上）、右拳腰。（六）の反對。

（二四）其のまゝの姿勢を崩さず、左手を握り乍ら腰に引きつける（甲は下）と同時に、右手（拳のまゝ甲は上）胸の前に水平に構へる（一四）の反對、騎馬立初段（**六**）參照。

（二五）上體及び左足其のまゝ、右足輕く左足を越して交叉する。

（二六）右足其のまゝ、左足大きく左へ一歩踏込むと同時に、顔は前方に向け、右手を起して前方中段受け（甲下）をなす。左拳腰に取りたるまゝ。騎馬立初段（**八**）參照。

（二七）姿勢其のまゝ、右拳は左肩前より下方へ、左拳は右肘外より上方へ、互に引張る如く受ける（右下段受、左中段受）や否や、

（二八）左拳を左肩上に振上げざま（手甲後向）裏拳にて前方上段に打込むと同時に、右拳（手甲上）の手首が左肘に接する位に、右手を胸部の前に水平に構へる。

（**註**）（一七）（一八）と反對動作で實際は（二七）（二八）を一擧動として敏速にせよ。詳しい事は、騎馬立初段（**九**）（**一〇**）（**一一**）を參照。

（**直れ**）以上にて完了したのであるから、直れの號令と共に、左足を引いてユックリと用意の姿勢に復する。



## 第十　騎馬立三段（舊稱　ナイハンチ三段）

全部で三六擧動、約一分にて全運動を完了する。



第百二十二圖



騎馬立三段（一）

第百二十三圖



騎馬立三段（二）

演武線は初段二段と同じく第一線のみ。

（**用意**）八字立、兩拳を腿の前に自然に垂れ前方を見る。平安初段用意の姿勢に同じ。

（一）左足其のまゝ、右足一歩右へ踏込む（騎馬立）と共に、左手中段受（手甲下）右拳腰にとる。騎馬立初段（**二六**）參照。

（二）姿勢其のまゝ、左拳は右肩前より下方へ、右拳は左肘外より上方へ、互に引張る如く右手中段受、左手下段受。（**六**）と反對の姿勢。

（三）姿勢其のまゝ、（**一**）の如く左手を（手甲上）胸部前方に水平に構へると同時に、右拳（甲外）を左方に倒す。右肘が左手首に接するやう。

（**註**）（二）にて中段、下段を受けたるに敵が素早く引いて直ちに諸手突きの攻撃に來たので我が左手にて敵の左手を押へ、右手首にて

敵の右手を打ち外したところである。

（四）　姿勢及び左手共のまゝ、右手だけ右後に引く。（二）を見よ。

（註）　執拗な敵は左手を押へ右手を外づされたるも屈せず、左手を引いて更に突いて來るのを、右手首にて敵の左手首を受けたるところ。

（五）　姿勢、及び左手共のまゝ、右裏拳にて眞向上段へ打込む、右肘が左手首に接するやう。（三）を見よ。

（註）　右拳の位置は中央、目より見下す高さ。敵の人中と覺しき位置に打込め。熟練したら（三）（四）（五）は成るべく續けて敏速に動作せよ。

第百二十四圖



騎馬立三段（三）



（六）　姿勢其のまゝ、右拳を右腰に引く、（甲下）と同時に、左手を開き（四指を揃へて伸ばし拇指は下）、右手首の上に掌を輕く當てる。

（七）　姿勢其のまゝ、右拳を前方中段に突出すと同時に、左掌は右手に隨つて流れ、右肘の上に接する。

（註）　（六）（七）も熟練したら敏速に行へ。

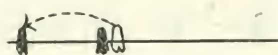
（八）　顏を右方へ向けると同時に、右拳を裏返す（甲下向）姿勢、及び左手は其のまゝ。



第百二十五圖



騎馬立三段（四）



第百二十六圖



騎馬立三段（五）



（九）　其の姿勢を崩さず、左足は輕く右足を越えて交叉する。

（註）　右足は屈し腰を落したまゝ、上體前屈みにならぬやう。

（一〇）　左足其のまゝ、右足右方へ踏出す（騎馬立）と同時に、左手を添へたまゝ、右手を右方へ押しやる。（四）參照。

（註）　右方よりの中段突きを拂つた所。

（一一）　其のまゝの姿勢で、右拳を返す（甲上向）や否や、左前方より額上にかけて大きな圓を（右肩を軸として）描く如く振り廻す。左手を肘に添へたるまゝ。（五）參照。

（註）　右側の敵が足をあげて脇腹を蹴んとするを我が右手首内側にて其の足首を引掛

け振り捨てる所。

（一二）下體其のまゝ、右拳を腰に(甲下向)とると同時に、左掌は輕く流して右手首に添へ、顏前方に向く。

（一三）姿勢其のまゝ、右拳前方へ突出す(甲上)と共に、左掌は輕く右前膊を辷らして右肘に添へる。

（一四）姿勢其のまゝ、右拳を起して中段受け(甲下向)すると同時に、左拳下方に打下して下段受(甲上向)、

（一五）姿勢其のまゝ、左拳は右肘外より上へ、右拳は左肩前より下へ、互に引張る如く、第六圖のやうに右手下段受、左手中段受に受けかへる。

（一六）其のまゝの姿勢で、左拳を左肩上に引くや否や裏拳にて前方上段を打つと同時に、右手（拳のまゝ甲を上）胸部前方に水平に構へる。左肘が右手首の上に接するやう。

第百二十七圖



騎馬立三段（六）

（註）（一五）（一六）は續けて救速に行へ。

（一七）其のまゝの姿勢で、顏だけ左方に向ける。

（一八）上體及び左足其のまゝ、右足を輕く左足の上より越して交叉する。

（一九）兩手及び右足其のまゝ、左足を一歩左方へ踏込むと同時に、顏を前方に向ける。



（二〇）其のまゝの姿勢で、左拳だけ右方へ倒す。(一)と左右反對動作。

（註）左手首にて敵の中段突を右へ打拂ふ意味。

（二一）其のまゝの姿勢で、左拳のみ左後方に引く。(二)と左右反對の動作である。

（註）續いて突込み來る敵の拳を左方へ打拂ふ心持。

（二二）其のまゝの姿勢で、左裏拳にて前面中央に打込む。(三)と左右反對の姿勢。

（註）（二〇）（二一）（二二）は熟練したら敏速に續けて行へ。

（二三）其のまゝの姿勢で、左拳左腰に(甲下)引くと同時に、右手を開いて（甲上、四指揃へて伸ばす、拇指は下）、掌を左手首の上に當てる。

（二四）其のまゝの姿勢で、左拳前方に突出す(甲上)と同時に、右掌は左前膊を輕く滑つて左肘の上に添ふ

（二五）下體及右手其のまゝ、左拳を裏返す(甲下)と同時に、顏を左に向ける。

（二六）上體の姿勢及び左足そのまゝ、右足は輕く左足の上を越し、交叉する。

（二七）右足其のまゝ、左足を左方へ一歩踏出す(騎馬立)と同時に、右手を左肘に添へたまゝ、左拳を左へ押しやる。(四)と左右反對。

（二八）姿勢其のまゝ、左拳を返す(甲を上に)や否や、右前方より額上にかけて大きく圓を描くが如く振り廻す。右手は左肘に添へたまゝ。(五)と反對動作。

（二九）　姿勢其のまゝ、左拳を左腰にとると同時に、右掌は輕く辷らして左手首の上に當てると共に、顏を前方に向ける。

（三〇）　姿勢其のまゝ、左拳を前方に突出す（甲上向）と共に、右掌は左前膊を辷つて左肘上に當てる。

（三一）　下體其のまゝ、顏を右に向けると共に、右手を開いて右方より來る拳を摑まんとする如く出すと同時に、左拳腰に引く。騎馬立二段、（六）と同じ姿勢。

（三二）　下體其のまゝ、右手を握つて右腰に捻ぢる如く引つけると共に、左拳（甲を上）を胸部前方へ水平に構へる。騎馬立初段（二四）と同じ姿勢。

（三三）　上體及び右足其のまゝ、左足輕く右足を越して交叉する。

（三四）　左足右拳其のまゝ、右足一歩右方へ踏出すと共に（騎馬立）左拳中段受けをし同時に顏は正面を向く。

（三五）　其のまゝの姿勢で、右拳は左肘外より上へ、左拳は右肩前より下へ、引張る如く、右拳中段受け、左拳下段受け。

（三六）　其のまゝの姿勢で、右拳右肩上に振り上げる（甲後）や否や、裏拳にて前方上段に打ち込むと共に、左拳（甲を上）を胸前に水平に置く。左拳手首に右肘を接する。

（註）　（三五）（三六）は續けて敏速に動作せよ。

（直れ）　左足其のまゝ、右足を少し引いて兩膝を伸ばすと共に、兩手をユックリ元の用意の姿勢に復す。

## 第十一　半月（舊稱　セーシャン）

全部で四一擧動、全運動約一分間にて了る。演武線は十字形、前後の縱線を第一線、左右の横線を第二線とする。

第百二十八圖



半月（一）

（用意）　八字立、兩拳を握り、自然に腿の前に垂れる。平安初段の用意の姿勢に同じ。

（一）　右足は其のまゝ、左足第一線上へ、（一）の如く、半月形に踏出す（前屈）と共に、左拳も右前より大きく半圓を描いて前方中段受をなし、右拳を腰にとる。

（註）　筋骨の鍛練を主とする昭靈流であるから其の心組で、動作はユックリと、型の極まる所に十分力

を入れて、力の入り工合、足の締り方などをよくよく玩味し乍ら動作せよ（何れも手甲下）。

（二）其のまゝの姿勢にて、ユックリ左拳を腰に引き乍ら、右拳を伸ばす。

（三）左足其のまゝ、右足を第一線上に半月形に廻して踏出す（前屈）と共に、右拳を左肩前より半圓を描いて前方中段受をなすこと「一」と同じ要領。

（四）其のまゝの姿勢で、右拳腰に引くと同時に左拳を伸ばす。

（五）右足其のまゝ、左足第一線上へ半月形に踏出す（前屈）と同時に、左拳を右肩前より半圓を描いて前方中段受をなし、右拳腰にとる。（一）参照。

（六）其のまゝの姿勢で、右拳を伸ばすと同時に左拳を腰に引く、「二」と同じ動作。

（七）姿勢其のまゝ、兩手に人示指の一本拳を作ると共に、「六」の姿勢に於ける兩拳の位置からユックリ兩乳の下に（手甲上）構へる。

（註）兩肘を張つて、兩肩を下げよ。

（八）姿勢其のまゝ、兩拳（一本拳のまゝ）を前方に伸ばす（手甲は上向のまゝ）。

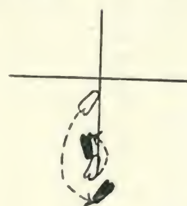
（註）兩手の間隔は肩の幅位

（九）「八」の姿勢其のまゝ、兩拳を開いて四本貫手とし（兩掌内向）、兩肘を曲げ乍ら兩手を後方へ引く。左右の掌は頭を挾んで向ひ合ふやうに。

第百二十九圖



半月（二）



（註）上膊は大凡肩と水平に保ち、胸を開く、左右の腕が直角を作つて曲り、頭が其の中央に在り山といふ字に似てゐるので、これを山構へといふ。左右上段受けの構である。

（一〇）姿勢其のまゝ、兩肘より先を前方に倒す心持で、肘を伸ばし兩手を下げる（兩掌は腿に向ふ）。

（註）左右下段受けの構である。

（一一）左足其のまゝ、右足一歩前に踏出すと同時に、廻れ左で後へ振り向き（前屈）ながら、右手は左肘外より上へ、左手は右肩前から下へ、互に引張る如く、右手は中段受け（甲下）、左手は下段受け（甲上）。（二）の姿勢。

（註）（一一）の動作は敏速に行ふがよい。手は人示指だけ伸ばし、他の四指は力を入れて淺く曲げる。（二）は解り易いやうに横向に撮つたが、實際は演武線に示した如く後向になるのである。

兩手は肩の幅位の間隔、卽ち右手は右肩の前に、左手は左腿の前に在るやうに。

（一二）（一一）の姿勢のまゝ、右手首をユックリと力を入れて裏返す（手甲上）。

（註）裏返へし乍ら前膊を少し引下げる心持。

敵の手を我が手首で中段受けすると共に、手を返して敵の手首を摑み引つける意味である。

（一三）左足其のまゝ、第一線上後方へ右足を一歩進める（前屈）と共に、手の形は「一二」のまゝ、右手は左肩前より下へ、左手は右肘外より上へ、互に引張る如く、右手下段受（甲上）、左手中段受（甲下）。（二）の左右反對の姿勢である。

（註）常に型の極まる時には力を入れよ。

（一四）「一三」の姿勢のまゝ、左手首をユックリと裏返へす（手甲上）。（一二）と同じ要領である。

（一五）右足其のまゝ、第一線上後方へ左足を一歩進めると共に、（二）の姿勢をとる。

（註）（一一）と同じ動作である。注意も要領もすべて（一一）に同じ。

（一一）から（一六）までは三回繰返しの型である。

（一六）（十五）の姿勢のまゝ、右手をユックリ裏返へす（手甲上）。

（一七）左足其のまゝ（この左足の位置が第一線と第二線の交叉點に當る譯である）右足を右横（卽ち左第二線上）に踏出す（前屈）と同時に、顔も右方に向け、右拳中段內受け（甲下）左拳腰に

（註）此所は敏速に行ふ。

（一八）姿勢其のまゝ、右拳腰に引く（甲下）と同時に左拳中段突き。

（一九）其のまゝ左拳引くと同時に、右拳中段突き。

（註）（一八）（一九）は敏速に續けて突く。これを連突きといふ。

（二〇）足は其のまゝ、右第二線上の方向（一七と反對方向）に振り向きざま、寄足で右第二線上に進む（前屈）と同時に、左拳中段受け（甲下）右拳腰に、（一七）と反對の姿勢。

（註）寄足については組織篇の立方の部及び平安三段（五〇）等を參照せよ。

此所では（一九）の姿勢に於ける前屈の右足で地を蹴つて、左足の方へ進み寄るので、寄足で進むと共に上體も向をかへる。

（二一）姿勢其のまゝ、左拳を引くと共に右拳中段突き。

（二二）姿勢其のまゝ、右拳を引くと共に左拳中段突き。

（註）（一八）（一九）と同じく（二一）（二二）も連突きせよ。

（二三）左足其のまゝ、右足を後第一線上に半月形に踏出す、多少寄足の氣味ある方がよい。前屈になると同時に右拳中段受け、左拳腰に。（一七）と同じ姿。

（二四）姿勢其のまゝ、右拳引くと同時に左拳中段突き。

（二五）姿勢其のまゝ、左拳引くと同時に右拳中段突き。

（註）（二四）（二五）は敏速に連突きせよ。

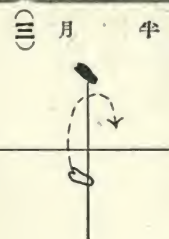
（二六）右足其のまゝ、右拳右腰にとり、顏を後に（第一線の前方）振向けると同時に、左拳を右拳に、左足を右足に引つけながら（三）の如く、左拳、左足、なるべく高く廻すやうに、第一線前方に左足を下す（騎馬立）と共に、左裏拳（手甲下）を打伸ばす。目は前方左拳に注ぐやう。

（註）左拳、左足はユックリと大きく廻し、右拳、右足に接する時も運動中止せぬやう。型の極まる瞬間には手足、丹田に力を込め、左裏拳にて敵の手を打つ心持あるべし。



第百三十圖

半月（三）



（三）は（二五）から（二六）に移らんとする途中を示したものであるから其の積りで見られたい。又體の向き方も便宜上横向に撮つてあるが、實際は演武線に示した通りである。

（二七）其のまゝの姿勢を崩さず、右足は輕く左足を越して（第一線前方へ）交叉する。

（註）我が左拳を敵が右手で取つて引き寄せんとしたので、敵に引かせつゝ近寄る心持。

（二八）右足其のまゝ、左足で左拳の先を蹴上げると同時に、左拳を右肩先まで引く。

（註）敵の右手を蹴上げると共に、取られた手を引抜いた所。

（二九）左足を第一線上に下す（騎馬立）と同時に、左拳（甲上）にて左方へ中段突き。

（註）上體・下體共に前向（右第二線の方を向く）。顏だけ左肩の方に向ける。多少寄足の氣味があつてよい。

（三〇）左拳腰に引くと同時に、上體左方に捻ぢる如くしながら右拳で中段突、同時に前屈（足の位置は其のまゝで左足を屈する）となる。

（註）左手を捕つた敵の手を蹴つて左手を抜くや、隙さず中段を突き、續いて右拳にて連突きする意味

（三一）姿勢其のまゝ（左手にて上段受け平安初段（九）參照）。

（註）（二八）より（三一）までは熟練したら續けて敏速に動作せよ。

（三二）左足其のまゝ、左拳腰にとり顏を後（後第一線の方）に振り向けると同時に、右拳を左拳に、右足を左足に引きつけるやうにし乍ら高く廻して、第一線後方へ右足を下す（騎馬立）と共に、右裏拳（手甲下）を打伸ばす。（二六）と反對動作。

（三三）其のまゝの姿勢を崩さず、左足は輕く右足を越えて（第一線後方へ）交叉する。（二七）と反對動作。

（三四）左足其のまゝ、右足をあげて右拳先を蹴ると同時に、右拳を左肩前に引く。（二八）と反對動作。

（三五） 右足を第一線上に下す（騎馬立）と同時に、右拳（甲上）にて右方へ中段突き、左拳腰にとつたまゝ、（二九）と反對動作。

（三六） 右拳を腰に引くと同時に、上體を右方に捻ぢて左拳中段突き、同時に前屈（足の位置は其のまゝで、右足を屈し、左足を伸す）となる。（三〇）と反對動作。

（三七） 姿勢其のまゝ、右手にて上段を受ける。平安初段（一〇）參照、但し前屈。これと同時に、左拳腰に引く。（三一）と反對動作。

（註） （二四）より（三七）までは熟練したら敏速に動作せよ。

（三八） 右足其のまゝ、右拳腰にとり、顔を後（第一線前方）に振り向けると同時に、左拳を右拳に、左足を右足に引つける如くし乍ら高く廻して、第一線前方に左足を下す（騎馬立）と共に、左裏拳を打伸ばす。（二六）と同じ動作。

（三九） 左足其のまゝ、右足を大きく前方より左方に廻して左手（掌を開く）を蹴る。三日月蹴りである。

（註） 平安五段（一五）及び拔塞（二七）の三日月蹴を參照せよ。

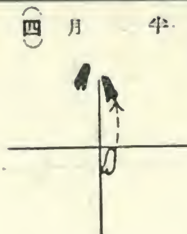
（三八）の姿勢にて、左手で敵を摑んで引寄せ乍ら右足にて敵の胸部を蹴る心持である。

（四〇） 左足其のまゝ、右足を元の位置に戻す（前屈となる）と同時に、上體左に捻つて左拳腰に、右拳中段突き。

第百三十一圖



半月（四）



（註） 右拳を突出す處は、丁度左拳のあつた位置。（三九）（四〇）は敏速に續けて行へ。

（四一） 右足其のまゝ、左足を右足に引つけて（四）の如く猫足立となり、兩手を左膝頭の處で圖の如く合せて足受けの姿勢。

（註） 猫足立は組織篇立方の部にも述べた通り、こゝでは右足を曲げて之に體重を托し、左足も曲げて輕く爪先を地につけ、上體眞直に立てる。難かしい型であるからよく圖を見て練習せよ。

（直れ） 右足其のまゝ、左足を引いて用意の姿勢に復する。

## 第十二 十手（舊稱 ジツテ）

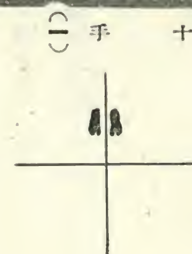
全部で二四擧動、約一分間にて全運動を完了する。演武線は平安初段と同じ十字形である。

（用意） （一）の如く、閉足立にて、右拳に左掌を輕くかぶせ、頤の前七八寸の處に構へる。

第百三十二圖



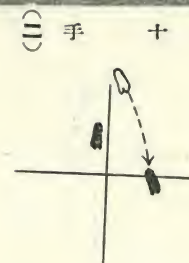
十手（一）



第百三十三圖



十手（二）



（註）腋下をひろく、やゝ肘を張る。

（一）右足そのまゝ、左足を後方に引く（前屈）と同時に、左拳は腰に、（二）の左手の形のやうに右手の五指を淺く曲げて指先に力を入れ、その甲をユックリと胸から頤にふれる位に前方に向つて圓を描いて中段押へ受の形（掌が上になる）。

（註）我が手首にて相手の手首を押へつけた形である。燕飛（五）の左手が腰に來た姿勢になる。この手の形は十手の特徴で（一）から（七）まで同じであるからよく練習せよ。

（二）右手其のまゝ、左足を左斜前（左第一線上）に踏出す（前屈）と同時に、（二）の如く左手（五指淺く曲げ）を下よりユックリ押上げる如く中段受（甲は下）に、右手（五指淺く曲げ）を裏返して（甲を上に）上よりユックリ押へつける如く中段受をなす。

（註）指先に力を入れ、左右の手の開きは肩の幅位。右手は相手の手首を摑んで押へた形。

（三）兩足及び右手は其のまゝ。左手（肘より先）を右へ倒す（手甲上に、前膊が胸部と平行して水平になる）と同時に、顏を右へ向ける。

（註）この手は、相手の手首・肘などを我が手甲にて押下げ、又は我が掌（手首に近い部分）にて押上げ、打ちのけるのである。

（四）左足其のまゝ、右足を右第一線上に進めると同時に、左手（拳として）を腰にとり、右手（五指淺く曲げたまゝ）の手首にて右方中段受。

（五）左足、左拳そのまゝ。右足を第二線上に移す（騎馬立）と同時に、右手（五指淺く曲げたまゝ）にて右横より打出すやうに（甲右上）中段受。右肘少し曲げて。

（註）「四」にて右方の敵を防いだ時、前方よりも敵が突いて來たので、右足一歩踏出すと同時に、我が掌にて敵の手を打拂つた意味である。故に、顏は前方に向けよ。

（六）右足其のまゝ、左足一歩第二線上に前進する（騎馬立）と同時に右拳を腰に引き、左手（五指を淺く曲げたまゝ）を以て左方より中段受け。

（註）（五）と反對の形である。（五）（六）（七）と三回繰返すが、顔だけは常に前方（敵の方）に向け、上體は足に從つて左・右・左と向をかへる。

（七）左足其のまゝ、右足一歩第二線上に前進する（騎馬立）と同時に、左拳腰に引き、右手（五指淺く曲げたまゝ）を以て右方より中段受け。（五）と同じ姿勢である。

（八）左足其のまゝ、右足を引いて左足の前に交叉すると同時に、兩拳を頭上に交叉する（右手を前）。此の時顔は第二線左方（體の向つてゐる方）を向く。

（註）（七）にて第二線前方の敵を防いだ時、第二線左方（體の向つてゐる方）から別の敵が上段を攻撃して來たので、兩掌を交叉して受けた所。兩足交叉するは、平安五段にもある如く、金的を蹴られぬ用心である。

（九）右足其のまゝ、左足一歩左（第二線上後方）へ踏出す（騎馬立）と同時に、兩拳兩腿の左右へ打下す。（甲は上）（第二線の左方を向いたまゝ）。

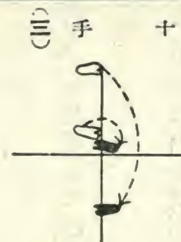
（註）兩拳は腿より五六寸の位置。左右より同時に脇腹へ攻撃して來る拳（又は足）を打拂ふ心持。

（十）騎馬立のまゝ、左方（第二線上後方）へ寄足すると同時に、兩拳を大きく搔き分けるやうに（兩肘を帶の前方にて交叉するや、そのまゝ兩拳を頭上に突上げる樣にし乍ら）左右に開き、（三）の如き山構へをなす（但し顔は横を向けずに）。

（註）山構へとは頭と兩手とが山と云ふ字の形をなすからで、半月（兩手を開いてゐるが）にもある。前方より顔面目がけて突いて來る敵の諸手を搔分ける意味。

第百三十四圖





十手（三）

（十一）顔を右（第二線前方）に向け右足原位置に、左手、左足（其のまゝの姿勢を崩さぬやうに保ちながら）同時に前方に打込む。此の時顔だけは前の敵を見つめたるまゝ（三）の姿勢となる。

（註）左手首にて上段突を打拂ひ、左足にて敵の足に踏込む心持である。右足にて身を支へ、左腿高く上げて踏込むやう。

（十二）顔は前方の敵に向けたまゝ、左足原位置に、右手、右足（姿勢崩れぬ樣）同時に第二線前方に打込む（三）と同じ姿勢で體の方向と顔の向方だけが反對になる。山構へにて、騎馬立。

（註）（一一）の繰返しである。（一三）も同じ。

（一三）　顔を前方の敵に向けたまゝ、右足原位置に、左足、左手同時に（姿勢を崩さぬやう）、第二線上前方に打込む。**（二）**の姿勢となる。

（註）（一一）と全く同じ。

（一四）　其の位置にて、ユックリ兩拳を下すと同時に、顔を正面（第二線の右方）に、足を伸ばし、平安初段用意の姿勢（足の開き方が少し廣く）となる。

（一五）　其の位置にて、顔を右（第二線後方）に向け、右足屈して前屈の姿勢となると同時に、右手開いて右へ出し（手甲右向肘を曲げて）、左拳を腰にとる。

（註）　右手は物を掴まんとする形。騎馬立二段第六圖の足が前屈になつた姿勢である。

（一六）　姿勢其のまゝ、右手を（形は其のまゝ）膝頭より五寸程上まで下ろすと同時に、左手（右手同様、開いて四指を揃へ、手甲左向）を右手のあつた位置まで伸ばす。

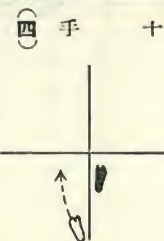
（註）　左右の手は垂直な一直線上にあるやう。敵が棒を以て打込まうと構た瞬間我が兩手にて之を封じたのである。組手篇武器と空手の章參照。

（一七）　右足其のまゝ、**（四）**の如く左足を高く上げ、右手を右肩上に、左手を右脇に取るや否や、左足踏込む（前屈）と同時に、左手を左膝五六寸の處に、右手は肩の高さに押出す。左右の手は開いたまゝ。

第百三十五圖



十手 **（四）**



（註）（一六）と反對の姿勢になる。敵の棒を押戻し乍ら敵の鼠蹊部に踏込んだところ。

（一八）　左足其のまゝ、右足高くあげ、左手を左肩上に、**（四）**の反對に右手を左脇に取るや否や、右足踏込み（前屈）右手を右膝頭上五六寸の處に、左手は肩の高さに押出す。（一六）（一七）の繰返へしである。

（一九）　右足其のまゝ、左足を左第一線上に移す（右足屈し左足伸す）と同時に、顔を左方（第一線の左方）に向け、右拳（甲外）にて右方上段受、左拳（甲上）にて左方下段受をなす。上體少し右に傾けよ。

（註）　右肘曲げ右拳は頭の高さ、左肘は伸ばし左拳は左腿より五六寸離す。平安五段の最後の姿勢及び觀空（一九）の姿勢に同じ。

（二〇）　足の位置其のまゝ、左膝を屈し、右膝伸ばすと同時に、顔を右方に振向け、左拳にて左方上段受け、右拳にて右方下段受け。

（註）（十九）と左右反對動作。

（二一）右足其のまゝ、左足一歩第二線上に前進する（左膝伸ばす）と同時に、左拳にて前方上段受け、右拳腰に。

（註）平安初段（九）と同じ姿勢。この時まづ右手を頭上にあげ、左拳を上げる時に左右の手首が十字を描く樣にする事は平安初段に詳述せる通り。

（二二）左足其のまゝ、右足前進（第二線上前方へ）すると共に、左拳を腰に、右拳を額上に構へる。（二一）の反對動作。

（註）平安初段（一〇）を參照。

（二三）兩足の位置其のまゝ、廻れ左して後を向くと同時に、左拳額上に上段受け、右拳腰に。

（二四）左足其のまゝ、右足一歩進む（第二線上後方へ）と同時に、右拳上段受け、左拳腰に。

（註）（二一）より（二四）まで同じ動作の繰返しである。拳足の注意は平安初段を參照せよ。

（直れ）右足を軸としてユックリ廻れ左しながら左足を右足に引つけると同時に、（一）の用意の姿勢に復する。

## 第十三　燕飛（舊稱　ワンシウ）

全部で三十七擧動、約一分間にて完了する。演武線は丁字形。

（用意）（一）の如く閉足立で、左掌（甲左）を腰に、右拳（甲前）を左掌に當てる

第百三十六圖



燕飛（一）

（一）右足其のまゝ、第一線上に左足を開くと同時に、（二）の如く右足を折り敷き顏を右に向け、右拳（甲前）右足前に、左拳（甲下）を右胸前に構へる。

（註）右側よりの敵に對し、右手にて足を掬ひ、左手にて敵體を引いて投げんとする構へ。

（二）顏其のまゝ、其の場に立上り右を向くと同時に、右拳を左拳に重ねる（左拳甲下、右拳甲前に）。

（三）姿勢其のまゝ、右拳にて下段を拂ふ。平安初段の（三）に同じ。

（四）目を第二線前方に向けると同時に右足を伸し、右拳を右腰に捻ぢ上げる如くぶつける（甲下）と同時に、左拳（甲上）を水月の前に水平に構へる。左手首は胸を去る約五寸。

（五）右足其のまゝ、左足を第二線上に一歩踏出すと同時に、右手を左下より、左手を右肩上より互に引

張る如く反動をつけて左拳にて下段拂、右拳腰。

（六）位置其のまゝ、左拳を左腰に引くと同時に、右拳で上段突、上體稍左に捻つて正面を突く様。

（註）右拳は敵の下顎を突上げる心持。

第百三十七圖



燕飛（二）

（七）右拳を開いて物を摑んで引寄せるが如く、左肩前に引つけながら、右足一歩前方に、飛込むと同時に、（三）の如く左足を右踵後に引きつけ、左拳にて下段突きをなす。

（註）左拳は敵の丹田を突く心持。

（八）右足其のまゝ、左足一歩後へ退く（後屈）と同時に、手を絞るが如き心持で、右拳を右方下段に、左拳を左腰に構へる。目は前方敵の顏に向けたまゝ。

（註）突込んだ左拳を敵に取られたので、すかさず右手首で相手の手を押のけるやうに左手を拔く意味であるが、時には右手槌（又は右手首）にて敵の手の急所（尺澤或は關節）を打つて引拔く事もある。



第百三十八圖



燕飛（三）

（九）足其のまゝ、顏を後方に向けて、（自然左足前屈となる）左拳にて下段拂をなすと同時に、右拳を右腰にとる。平安初段（一）と同じ姿勢。

（一〇）足其のまゝ、左拳を左腰に引つけると同時に、右拳にて上段突、（六）と同じ。

（一一）右足一歩第二線後方へ向つて飛込むと同時に、左足を右踵後に引つけ、右手は摑み寄せるが如く左肩前に引つけ、其の下より左拳にて下段突、（七）と同じ。（三）參照。

（一二）左足を一歩後へ引き（左足後屈）ながら、左拳を左腰に引くと同時に、右手首は左手首の上を通つて、捻ぢるが如く右拳下段拂。（八）に同じ。

（一三）足其のまゝ、後（第二線前方）を振向く（自然左足前屈になる）と同時に、左拳下段拂、右拳右腰にとる（九）に同じ。

（一四）右足其のまゝ、左手を開いて目の高さにあげながら、（四）の如く、左手。左足を共に（目も之を遂

ふ心持)左方へ移し(左足を左第一線上に移す)騎馬立となる。左手は開いて左斜前方、目の高さに構へ、目は之に注ぐ。

(一五) 左手、左足の位置其のまゝ、右拳を振上げざま(手甲後)左掌へエイと掛聲諸共右手首(甲前向)を打つけると同時に、右足甲を左膝裏に上げ、顔は正面に向ける。

第百三十九圖



燕飛（四）

(一六) 左足其のまゝ、右足を元の(一四の姿勢の)位置に下して騎馬立となると同時に、左掌を右脇下に當て（右袖を絞る如き心持）右手を開いて額の前より右側面にかけて大きく圓を描いて敵の手を抱へ込むが如き心持で握りしめ乍ら右腰にとり、右拳が腰に極まる時、左手を前方へ水平に伸し、(四指を揃へ)敵の中段突を內から受ける心持。觀空の(五)を參照せよ。

(一七) 騎馬立の足其のまゝ、伸してゐる左手を握りしめ乍ら左腰に引つけると同時に、右拳で中段突、

(一八) 足其のまゝ、右拳を引くと同時に左拳で中段突をなす。

(註) (一七)(一八)は續けて素早く連突きせよ。

(一九) 右足其のまゝ、左足を左第一線上に開き(左足前屈)ながら、左拳を右肩前より、右拳を右斜下より、互に引張る如くに、左拳下段拂、右拳右腰にとる。顔は左向、すべて平安初段(一)に同じ。

(二〇) 足は其のまゝ、左拳を左腰に引つけると同時に、右拳にて上段突、此時上體を少し左へ捻る樣。

(二一) 左足原位置、右足を第一線上左方へ踏出す(左足後屈)と同時に、右手刀中段內受け。

(二二) 右足を左足の處まで引き、左足を第一線上左方(右足のあつた位置)に踏出す(右足後屈)と同時に、左手刀中段內受けをなす。

(二三) 足其のまゝ、左手を腰に引く(握つて)と同時に、右拳で中段突。

(二四) 左足原位置、右足を更に第一線上左方へ進める(左足後屈)と同時に、右手刀中段內受けをなす。

(二五) 兩足の位置其のまゝ、後方(第一線右方)を振向くと同時に(左足前屈)左拳下段拂ひ、右拳を右腰にとる。

(二六) 足其のまゝ、左拳を引くと同時に右拳にて上段を突上げる。此時上體を捻つて、左肩を後に引く樣。

(二七) 第一線右方に向つて、右足一歩飛込みながら、右手にて物を摑み寄せるが如く左二の腕の上に引寄せると同時に、左拳にて下段(丹田)を突く、此の時左足は、右足の後に輕く接する。

(二八) 左足を一歩後方(第一線上左方)へ引く(左足後屈)と同時に、左拳左腰に、右拳を下段に構へる(「八」

と同じ要領）

（二九）足其のまゝ、第一線左方を向いて（自然左足前屈となる）左手下段拂、右拳右腰にとる。

（三〇）足其のまゝ、左拳を左腰にとると同時に、右掌（掌を上に、指先を折曲げ、手首を下へ折曲げて）で押上げる様に中段を受ける。

第百四十圖



燕飛（五）

（註）右手の形は（五）參照。

（三一）左足其のまゝ、右足を第二線上に移す（前屈）と同時に（五）の如く、右掌（上向）押上げるが如く、左掌（下向）押下げるが如く、兩手受けをなす。

（三二）左足を一歩、第二線上に前進する（前屈）と同時に、左掌上へ、右掌下へ、（五）と左右反對の姿勢をとる。

（三三）右足一歩前進、右掌上へ、左掌下へ、互に上下を受ける。（五）の姿勢。

（註）「三一」より「三三」までは例の通り同じ技の三回繰返しである。二回目輕く、三回目に十分の力を入れる事を忘れぬやう。

（三四）足の位置其のまゝ、左手を下より、右手を左肩前より、互に上下に引絞るが如き心持で、左拳左腰に、右拳右方（第二線上前方）下段に構へると同時に左足後屈となる。

（註）左肩を引き、上體は第二線左方に向ひ、顔は前方を向く。右拳は右腿上約五寸のところにある。

第百四十一圖



燕飛（六）

（三五）第二線前方に向つて寄足にて進むと同時に、（六）の如く、右肘曲げて、（肘は脇腹に接する位、掌は上に向け、左手は頭上より（掌上向）七八寸位に構へる。

（三六）エイと掛聲諸共兩足にて地を蹴り、第二線上後方へ向つて左廻りに、なるべく高く廣く飛上つて、一回轉して地上に立つと同時に左足後屈、右手刀中段内受けの構へをなす。

（註）敵の上段突の手を左手で受けると同時に、右手を敵の股に入れ、兩手にて投飛す意味。

地上に立つ際は、兩足一時に地に着く樣に。

（三七）右足一歩退き（右足後屈）ながら、左手刀中段内受けをなす。

（直れ）左足を引き乍ら徐ろに用意の姿勢に復する。

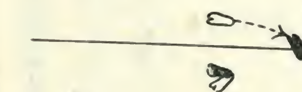
全部で四十二擧動、約一分間にて完了する。演武線は一字形に屬するが、騎馬立の如く横の一でなく、縱の一である。

## 第十四　岩　鶴（舊稱　チントウ）

第百四十二圖



岩鶴（一）



（用意）八字立となり、兩拳を自然に股の前に垂れる。平安初段の用意の姿勢に同じ。

（一）右足を一歩後へ引くと共に（一）の如く、右手を右脇下より左肩の前に振り上げる樣に、左手の上に重ねて組み、側面上段受けの姿勢。

（二）其のまゝ兩手を右へ返して、右手首





の上に左掌を横に置く、兩手首が十字形を描く、平安五段（一〇）を參照。

（三）其まゝ左手眞向、右手腰に、互に引張る樣に、左拳にて突く氣持。平安五段（一一）を參照。

（四）左拳を引付けると同時に、右拳で中段突。

（五）左足を軸として左廻りに右手右足同時に後方へ一歩踏込み、後から臀部を蹴る足を打拂ふ氣持で下段受け。

（六）其のまゝ前方を振向いて左足前屈になり、指を伸したまゝ（右手上）突上げる樣に手首を額前に交叉し、其の下から相手の顏を注視する心持。

第百四十三圖



岩鶴（二）



（七）下體其のまゝ、兩手を握りしめ乍ら少し胸の前まで引下げる。

（八）前方に向つて右足、左足と續けざまに蹴上げ、兩足が地につくと同時に左足前屈の姿勢を取つて、兩手握つたまゝ右手を上に交叉して、左膝頭より約六七寸の處に下段受けの姿勢をとる。

（九）右足を軸として右廻りに左足を後方に移



第百四十四圖

岩鶴（三）



第百四十五圖

岩鶴（四）

動すると共に左足前屈となり、兩手組んだまま膝頭の上に下段挾み受けを爲すこと八の反對。

（一〇）其のまゝ前方振向き左足後屈となり、兩拳握つたまゝ（三）の如く右拳を前方下段受け（甲を上）左拳を腰前に構へる。右手は右足と並行する樣に伸す。

（一一）左足一歩前方踏出し、右足後屈となると同時に、左手刀にて前方下段受け（掌は下）、右手刀は左腰前に（掌を上）構へる。

（註）斯の如き場合は常に後の手を前の手の上から越して受けることを忘れてはならぬ。

（一二）右足一歩前に踏出し右足前屈となると同時に、右手を上に一旦交叉してから（三）の如く掻分けの姿勢をとる。

（一三）兩足の位置其のまゝ、前方を向いて騎馬立となり、右手を上に兩手首を交叉しながら（甲外向）、（四）の如く中段掻分けの姿勢をとる。

（一四）兩手を下すと同時に身を起し左（後方）を見る。

（註）斯の如く兩手を下すときは、單に元に復ると思はず、下に掻分ける氣持で下せ。

（一五）其のまゝ、右足後屈となり、指を伸したまゝ、左手は右肩前より、右手は左下斜より、互に引張る如く兩拳を握りしめ乍ら右拳にて右上段を、左拳にて左下段を受ける。平安五段（四）に同じ。

（一六）左足其のまゝ、右足を演歩線の後方（一歩踏出し左足後屈となる）、體勢は演武線の右方に向ひ、顔は後方に向ふ）と同時に、右手を左肩上、左手を右斜下より、左手を下に互に交叉して引張る如く握りしめ乍ら、左拳にて上段受け、右拳にて下段受けをなす。

（一七）右足を軸として、左廻りに左足を演武線後方に踏出し右足後屈となると同時に、左手を右肩前より、右手を左下斜より、互に交叉して引張る如く、右拳上段受け、左拳下段受け。

（一八）其場で右足を一歩退いて右足を地につけ、左膝を立て左右拳を組み（右上）足を挾み受ける氣持、此時相手の顔を見詰める心持。（五）參照。

（一九）左足と同一線上に右足を引き寄せ腰を起しながら騎馬立となつて中段掻分けの姿勢をとる。但し兩

手を一旦交叉して（右を上）共反動で掻分けるやうに。

（二〇）腰を起しながら、兩手を下に掻分ける様な氣持で徐ろに下ろし、足も伸す。

（二一）兩拳を腰にとり甲前に臂を左右に張る

（二二）左膝を曲げ、右膝伸し、上體を左へ捻りながら右猿臂を使ふ。顔は相手の方に向けたまゝ。

（二三）右膝を曲げ、左膝を伸し上體を右へ捻つて左猿臂を使ふ。全く前の反對。

（二四）右足を軸として廻れ右をしながら、中段掻分けの姿勢をとつて（拳甲下）と共に、左足を右踵後へ引付ける。

（二五）一旦右手を左斜下左手を右肩上に、兩手を交叉して、兩手握りしめながら引張る

第百四十六圖



岩鶴（五）



第百四十七圖



岩鶴（六）



と同時に、左足を右膝裏に上げて（六）の如く左側面の敵を見る。

（註）此の片足立の姿勢が岩上の鶴に似てゐるので此手を岩鶴と名づけたのである。

（二六）片足立ちのまゝ、右腰に兩手を重ね（右甲下、左甲前）左側面を見る。

（二七）左裏拳を飛すと同時に、左足蹴放す。拳は人中へ、足刀は腹部へ。

（二八）左拳を引き左足を地に下すと同時に、右足前進、右拳にて中段突をする。

（註）「二九」「卅」は熟練したら迅速に續けよ。

（二九）左足で立ち、左手右下斜より、右手左肩上より、互に引張る如く上段、下段を受けながら、右足を左膝裏に上げ、敵を見つめる。（六）の反對姿勢。體勢は演武線の左方に向ふ。

（三〇）其のまゝ、兩拳を左腰に重ねる。（二六）の反對。

（三一）右裏拳、右足を同時に飛す。（二七）の反對。

（三二）右足が地につくと同時に（此時騎馬立となる）、右拳を右腰に引きながら左拳右方（演武線前方）へ中段突。

（三三）右足で立ち、左足を右膝裏に上げて、左方（演武線後方）を振向くと同時に、左右の手を一旦交叉して上下に構へる。（六）に同じ。

（三四）其のまゝ兩拳を右腰に重ねる。

(三五) 左裏拳、左足刀を同時に飛す。

(三六) 左足が地につくと同時に左拳を左腰に引き、右拳左方(演武線後方)へ中段突。

(三七) 共のまゝ顔を右方(演武線前方)へ向けると同時に、右手(四指を揃へ掌を前に)で物を摑むが如き氣持で右方中段受け。騎馬立二段(六)參照。

(三八) 下體共のまゝ、上體を右へ捻つて左猿臂を右方(演武線前方)に突出す(前膊直立して)と同時に、右掌にて左肘を打つ。胸部より約五寸の間隔。

(三九) 下體共のまゝ、左手を左腰に引き、右拳(甲前)を左掌に押當てる。目は右方に注げ。

(四〇) 右足一本で立つて右廻りに一廻轉すると同時に、兩手は四指を揃へて(左手を上)頭上高く身體と共に廻しながら握りしめ、體勢の極まる時兩拳右腰に重ね、顔は左方(演武線後方)に向ける。

(四一) 左裏拳、左足刀を同時に飛す。

(四二) 左足地につくと同時に、左拳を腰に引つけ、右足一歩踏込みざま、右拳中段突。

(直れ) 廻れ左して、左足を引きながら用意の姿勢に復する。

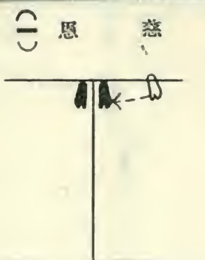
## 第十五 慈恩 (舊稱 ジオン)

全部にて四十七擧動、約一分半にて完了する。演武線は工字形に屬する。



第百四十八圖





慈恩 (一)

(用意) 十手の用意の姿勢と同様で、閉足姿勢にて右拳を左掌で包むが如く當て、胸前にとる。高さは目より見下す位。十手(一)參照。

(一) 左足一歩後へ退くと同時に前屈となり、左拳を右肩前より、右拳を左股前より互に上下に引張る様な氣持で、前方へ右拳中段受け左拳下段受けをなす。

(二) 左足を左斜に一歩踏出すと同時に、兩拳を一旦交叉(右上に)しながら中段搔分の姿勢。

(註) 此の如き搔分の姿勢にては、手の形が拳・手刀或は裏向、表向と種々あるが、掌の兩手の間隔は肩の幅といふ事を忘れぬ様。

(三) 左足共のまゝ、右足を上げて兩拳の間を高く蹴放す。

(四) 右足を前に踏込むと同時に、右拳で胸部を突く氣持で中段突。

(五) 足共のまゝ、右拳を引くと同時に左拳で中段突。

第百四十九圖



慈恩（二）

第百五十圖



慈恩（三）

(六)　足其のまゝ、左拳を引くと同時に右拳で中段突。

(註)　熟練の上は(五)(六)は連突きを爲す。又左右交換して引いた拳は、常に攻撃の構へをなす事を忘れてはならぬ。

(七)　左足其のまゝ、右足を斜右方に一歩踏出す(前屈)と同時に左右の拳を一旦交叉(右を上)にして中段搔分け。

(八)　左足を飛して兩拳の中間を高く蹴上げる。

(九)　右足其のまゝ、左足一歩前に踏込むと同時に、右拳を引き左拳で中段突。

(一〇)　足其のまゝ、左拳を引くと同時に、右拳で中段突。

(一一)　足其のまゝ、右拳を引くと同時に、左拳で中段突。

(註)　熟練したら(一〇)(一一)は連突きせよ。以上(二)より(一一)までは平安四段の連突きと大體同様である。

(一二)　右足其のまゝ、左足を第二線上に移すと同時に、右掌を前向きにして額上より引下し、左手（握ったまゝ）上段受をなすこと、平安初段上段受けと同じ要領。

(註)　此の時兩手互に上下に引張る如く十字形を描く事も平安初段に同じ。

(一三)　足其のまゝ、左拳を左腰に引くと同時に右拳で中段突。

(一四)　右足一歩前進すると共に左掌を前向きに、額上より引下すと同時に、右拳を上げて上段受けをなす、平安初段の上段受けに同じく手足同時に極る。

(一五)　足其のまゝ、右拳を右腰に引付けると同時に、左拳で中段突。

(一六)　左足一歩前進すると共に、右掌を額上より引下すと同時に、左拳を上げて上段受けをなす。平安初段の上段受に同じ。

(一七)　右足一歩踏出すと同時に、右拳で中段に突込む、左拳腰に。

第百五十一圖



慈恩（四）

（一八）　右足其のまゝ、左足を第三線上に移すと同時に身を躱しながら（後屈）右手下、左手右肩前（掌を上）より互に上下に引張る。

（一九）　左手を捻上げながら寄足で騎馬立となり、右拳を水月の前約五寸に（拳甲上）左拳腰にとり左を見る。

（二〇）　左足其のまゝ、右足一歩第三線上左方に進めると同時に左足後屈となり、右手上、左手下より互に引張る。

（二一）　寄り足しながら右手腰に捻ぢ上げる如く、左手で突く氣持（騎馬立初段參照）。

（二二）　右足其のまゝ、左足を第二線に移すと同時に、右手は下から左手は上から、互に引張る如く左拳下段拂ひをなす。右拳腰に。

（二三）　右足一歩摺出しながら（騎馬立）平手で横から中段受けをなす。此の時右肩が前に、全く半身となる。左拳は腰に。



（二四）　左足一歩摺出しながら（騎馬立）左平手で横から中段受けをなす。此時左肩が前に、全く半身となる右拳は腰に。（二三）の反對。

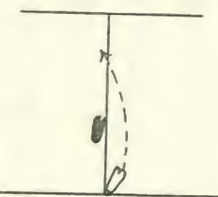
（二五）　右足一歩摺出しながら（騎馬立）右平手で横から中段受け、全く「二三」に同じ。

（二六）　右足を軸として、左足を第一線上に移し、右手下、左手上より、一旦交叉して、互に引張り、後屈姿勢を取つて左側面を見詰める。

第百五十二圖



慈恩（五）



（二七）　右足を左足に摺り寄せながら（閉足直立）顔は左を向き、左臂を直角位に曲げて、右拳甲下を左臂前に添へる。左側面諸手上段受けの姿勢である。第一圖の反對姿勢

（二八）　左足其のまゝ、同一線上に右足摺出すと同時に、左手下、右手上から、互に引張りながら後屈姿勢を取る。顔は右に向けて。

（二九）　左足を右足に摺り寄せながら（閉足直立）（一）の如く、右側面諸手上段受けをなす。（二七）と反對

姿勢。

（三〇）足は其のまゝ、前を向きながら兩手（左内）にて下に搔分けるやうに靜かに下す。

（三一）第二線に向つて、右足から先に飛込むと同時に、左足を右踵後に引付け、腰を落し、（二）の如く兩手を組み（右上）下段蹴りを受ける。

（三二）左足を一歩退くと同時に、兩手を（三）の如く後方に搔分ける。

（註）兩手で受けた足を、右手か左手で搔き拂つた意。

（三三）右足を其のまゝ、左足一歩進むと同時に、兩手（右上）で中段搔分け。

（三四）右足一歩進む（前屈）と同時に、兩手で額上高く（四）の如く上段挾み受けを爲す。左手は下に。

（註）此所三項は空手組織中最も精妙を極めた處で、下段、中段、上段と千變萬化、實に面白く出來てゐる。空手を學ぶ者は、型の中から斯の如き手を探し出してよく〳〵玩味すべきである。

（三五）其のまゝ右裏拳で敵の顔面を打つ。

（三六）其のまゝ左掌で打ち冠せて受けると同時に、右拳を高く肩の上に（肘を曲げて）構へる。

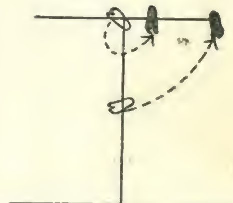
（三七）相手の人中を裏拳で打つ心持にて、右裏拳を眞向に打出す。此時左手首の上に右肘が接す樣。騎馬立初段（二四）參照。

（註）以上三擧動は熟練せば敏速に續けて動作すべき所である。

第百五十三圖



慈恩（六）



（三八）右足を軸として左へ廻りながら、前屈、左中段受けの姿勢。

（三九）同一線上に、右足前進すると同時に、左拳を引き右拳中段突き。

（四〇）同一線上で、左足を軸として右へ廻りながら、右足を一歩踏出して右手中段内受、左手腰

（四一）左足一歩踏込み（前屈）左手中段突き、右拳を腰に引く。

（註）以上左右の動作は同樣の要領である。

（四二）右足を軸に、第二線に向つて左足を一歩踏出すと同時に、前屈の姿勢をとる左手下段拂、右手腰。

（四三）（五）の如く右拳右足共に高くあげて、相手の突込む手を打落しながら、右足を踏込む。

（四四）左拳左足共に高く上げて、左手首にて敵の上段突を打落すと同時に、左足を踏込む。

（四五）右拳、右足共に高く上げて、右手首にて敵の上段突を打落すと同に、右足を踏込む。

（四六）右足を軸として、左廻りに左足を第一線上に移すと同時に、右手を上に、兩手（甲を上）を交叉して、

（六）の如く左へ寄足しながら、互に兩手を引張るやうに、左拳を左方へ伸し、右拳を胸の前に止める。顏左向。

（四七）前と反對に、右へ寄足しながら、左右の手を交叉（左を上）するや否や、引裂く様な心持で右拳を右方へ伸し、左拳を胸の前に止める。顏右向。

（註）側面から突込み來る敵の手を、引摑むと同時に引寄せながら、敵の脇下を突く意である。

（直れ）右足を徐ろに引き、兩手も用意の姿勢に復する。

（註）燕飛、岩鶴、慈恩の如きは、研究すればする程深い味があり、實に又と得難き型である。

# 第四編　組手

## 第一章　組手の意義

組手といふのは型に於て練習した攻防の技を、實地に當て篏めて練習する一種の型であるが、これは技を掛ける者と防ぐ者と必ず二人で行ふ。型だけ練習してゐたのでは血氣の青年達には慊らぬこともあらうから、多少型が呑み込めたら、場所と相手とが得られる者は、型と同時に組手も練習するがよい。

勿論組手といふのは型を離れてあるべきものでなく、すべて型の應用なのであるから、組手のために型を亂す様な事があつてはならない。とかく組手に熱中すると型が惡くなる傾きがあるが、空手は飽くまで型を主とし、組手を從として稽古すべきである。

扨て古來「空手に先手なし」と言はれて型に於ても組手に於ても、空手は常に前の手は防禦、後の手は攻撃となる。而して敵の攻撃を前の手で受けるや、間髪を容れず後の手は敵を粉碎する。この際瞬時たりとも停滯すれば常に受身の位置に立つて苦境に陷ることになる。防禦即ち攻撃、所謂「後の先を取る」とはこの事である。これで防禦と攻撃との關係が大體分るであらう。但し機に臨み變に應じて、防禦の手が俄かに變

じて攻撃の手となる場合もある。これを變手と名づけるが、實戰の場合には往々にして正式の手よりも效驗のある事がある。この邊で其の人の技倆が分るのである。

又防禦のため構へた前の手を死手、雌手等といひ、又陽の手、正の手とも言ふ。攻撃に備へた後の手を活手、雄手等といひ、又陰の手奇の手等といふ。古人の言にも「闘は奇正の間に在り、奇變じて正となり、正變じて奇となすに非ずんば、何ぞ勝を制するを得んや」といひ、又「陰陽始め無し、動靜現はれず、道を知る人に非ずんば誰か克く勝を制せんや」といつてゐるが、誠に空手の妙はこの奇正、陰陽の間にあるので、この言はよく〳〵味はふべきである。

第百五十四圖



上段表（一）

# 第二章　組手基本

## 第一　上段受

### 一、上段表　其の一

（用意）まづ兩者約三尺の間隔をとつて對立し（一）の如く互に禮をなす（練習が終つてからも亦禮をして席につく）。

次に用意の號令と共に、攻手は右足一歩退くと同時に左手は右肩前より、右手は左斜下より、互に引張



第百五十五圖



上段表（二）

第百五十六圖



上段表（三）

るやうに（二）の如く前屈の姿勢をとる。この時受手は其まゝ相手の顏を見つめてゐる。

（攻）一の號令と共に攻手は右足を前に踏出すと同時に、相手の顏面目がけて右拳を突出す。其の時左拳は左腰に捻ぢあげる如く引つけ、直ちに次の攻撃の用意をして置く事を忘れてはならぬ。

（受）受手は右足一歩退くと同時に、（三）の如く左手をあげて上段受けをなす。この場合相手が丈の低い時は、受手は腰を落して受けるのである。又左手をあげて受けると同時に右拳は腰に取つて攻撃の構へをする事を忘れてはならぬ。

（攻）二の號令と共に攻手は更に一歩前進して左拳で相手の顏面を突き、同時に右拳は腰に引く。即ち（三）と左右反對の姿勢になるのである。

（受）受手は左足を一歩退き、これも（三）と反對に右手を上

げて上段受けをなし、同時に左拳を腰に構へる。

斯くして左右交互に三回又は五回繼續練習せよ(場所の廣さに從ひ豫め三回又は五回と定めて置く)。

次ぎに受手が攻手になり、攻手が受手になつて又右の通り練習する。馴れぬ中は一段落毎に切つて練習してよいが、よく覺えたら何回となく續けざまに反覆猛練習をせよ。

第百五十七圖



上段表(四)

(極)　受方がよく出來るやうになつたら、三回若くは五回目に、受手は左手で受けると同時に相手の右手首を掴み、引寄せながら(四)の如く右拳を以て人中を一撃する。

(注意)　極の時には受手があまり足を退きすぎると極の一撃が屆かなくなるから、足の退き方を少し狹くする。或は寄足で相手の手許へ飛込む事もある。

なほ練習を終へる時は「直れ」の號令を以て攻手は後足を前に受手は前足を後に引きて立ち、互に禮をする。以下すべて同樣である。

## 二、上段裏　其の一

(用意)　兩者の姿勢は前に同じ。

(攻)　一の號令と共に攻手は右足一歩踏出し、相手の顔面目がけ右拳を以て突く。



第百五十八圖



上段裏其の一(一)

第百五十九圖



上段裏其の一(二)



(受)　受手は左足一歩退くと同時に右手をあげて(一)の如く上段受けをなす。

(攻)　續いて二の號令を以て攻手は更に一歩進み左拳にて相手の顔面を突く。

(受)　受手は右足一歩退くと同時に左手をあげて上段受けをなす。

斯くして左右交互に練習せよ。

(極)　受の練習が十分出來る樣になつたら三回、もしくは五回目に受手は(二)の如く攻手の右手を受けると同時に逆に取つて左拳で相手の脇下に突込む。

(注意)　上段受けは普通は平安初段(八)の如く、拳を握つて受けるのであるが、最後の極の時には(一)の如く指を伸ばして受けた方がよい。相手の手首を掴み易いからである。



第百六十圖

上段表其の二(一)



第百六十一圖

上段表其の二(二)

## 三、上段表 其の二

**(用意)** 用意の姿勢は前に同じ。

**(攻)** 一の號令と共に攻手は右足を踏出し右拳を以て相手の顏面人中を突く。左拳は腰に取る事前に同じ。

**(受)** 受手は左足を一歩退くと同時に、右手首で相手の手首を內側から外方へ打ち出す樣に(一)の如く受ける。左拳の位置注意。

**(攻)** 二の號令と共に攻手は更に左足一歩前進、右拳を腰に引くと同時に左拳で相手の人中を突く。

**(受)** 右足一歩退き、左手首で相手の手首を內側から外方へ向つて打ち叩く樣に受ける。(一)の反對の姿勢である。

斯くして三回又は五回左右交々練習し、更に攻守位置を更つて練習せよ。

**(極)** 次ぎに三回目又は五回目に、受手は右手首で攻の右手首を打つや否や、其反動を以て(二)の如く右裏拳を飛ばして相手の人中を打つ。而して打つと同時に右肘を曲げて右拳を引く事を忘れては







第百六十二圖

上段裏其の二(一)



第百六十三圖

上段裏其の二(二)

ならぬ。

**(註)** 斯の如く受の手が直ちに變じて攻の手となるのを變手と名付ける。

## 四、上段裏 其の二

**(用意)** 用意の姿勢は前に同じ。

**(攻)** 一の號令で右足一歩前進すると同時に右拳を以て相手の顏面を突く。左手は腰に。

**(受)** 左足一歩退くと共に右手首で相手の右手首を(一)の如く外側から受ける。この時左手は必ず腰に構へよ。

**(攻)** 二の號令で左足を一歩踏出し、右拳を腰に引くや否や左拳で顏面攻擊。

**(受)** 右足一歩退くと同時に左手首で相手の左手首を外側から受ける。卽ち(一)の反對姿勢である。

斯くして三回五回と反覆練習し、又攻守位置をかへて練習をつづけよ。

（極）三回又は五回目に攻手の右拳を右手首で受けるや否や、寄足でサッと相手の手許に飛び込みざま（一）の如く右拳を飜して捻ぢ込む如く脇下を突く（これも變手である）此時左拳は左腰に、十分に腰を落す事を忘れてはならぬ。

五、上段表　其の三

（用意）用意の姿勢は前に同じ。
（攻）一の號令と共に右足一歩踏出し、右拳を以て相手の人中目がけて突く。
（受）兩手を握りしめて山構へしながら右足一歩退くと同時に、左手首で相手の右手首を外側より内方へ打ち叩く樣に受ける。
（攻）二の號令と共に左足前進、右拳を引くと同時に左拳を以て顔面攻撃。
（受）同じく山構へのまゝ左足一歩退き、右手首を外側より内方へ打ち叩く如くに受ける。
斯の如く左右交々練習し、又攻守位置をかへて練習をつゞけよ。
（極）三回又は五回目に、攻手の突込む右拳の手首を我が左手首で、外側より打つや否や、左裏拳で顔面を打つ。

六、上段裏　其の三

（用意）用意の姿勢は前に同じ。
（攻）一の號令で右足前進、右拳を以て相手の人中を突く。左拳は腰に。
（受）左足一歩退きながら山構へにて相手の右手首を、我が右手首にて内側より外方へ打ち叩く。
（攻）二の號令と共に左足前進、右拳を引き左拳を以て顔面を突く。
（受）右足一歩退き、同じく山構へのまゝ左手首にて相手の左手首を内側から打つ。
斯くして左右交々練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。
（極）最後に右手首で相手の右手首を内側より受けると同時に摑み、逆に捻ぢつゝ引き寄せ、左手首で肘關節を打ち、其反動にて左裏拳で顔面へ。すべて裏拳にて相手の顔面を打つた時は、瞬間に肘を曲げて拳を引く事を忘れぬ樣にせよ。

七、上段表　其の四

（用意）用意の姿勢は前に同じ。
（攻）一の號令と共に右足を踏出し右拳で顔面を攻撃する。
（受）右足一歩退き、左掌で相手の右手首を外側から内方へ向つて押し出す樣に受ける。右拳腰に。
（攻）二の號令にて左足前進、右拳を腰に引くと共に左拳を以て顔面攻撃。
（受）左足一歩引き、右掌で相手の左手首を外側から受ける。左拳腰に。
斯くして左右交互に練習し、又攻守位置を變へて練習せよ。

(極) 最後に攻手の突出す右拳を、右足一歩退ると同時に左掌にて敵の右肘を内方へ押し遣りながら、右拳にて脇腹を突く。

### 八、上　段　裏　其の四

(用意) 用意の姿勢は前に同じ。

(攻) 一の號令と共に右足前進、右拳を以て顔面人中を目がけて突く。

(受) 左足一歩退くと同時に、右掌で相手の手首を内側から外方へ打ち出す様に受ける。左拳は必ず腰に取れ

(攻) 二の號令で左足一歩進み、右拳を引くと同時に左拳を以て顔面を突く。

(受) 右足一歩引くと同時に、左掌で相手の左手首を内側から打ち叩く様に受ける。右拳を腰に構へる事は例の通り。

斯くして左右交々練習し、又攻守位置をかへて反覆練習せよ。

(極) 三回又は五回目に、攻手の突出す右拳を、一歩退くと同時に兩手で共右手首を掴み、引寄せながら右足を飛して相手の右脇下を蹴る。

### 九、上　段　表　其の五

(用意) 用意の姿勢は前に同じ。

(攻) 一の號令と共に右足一歩前進、右拳を以て相手の顔面を突く。

(受) 右足一歩退き、左手首で(手甲を下にして)相手の右手首を内側から外方へ打ち出す様に受ける。右拳は腰に。

(攻) 二の號令と共に左足一歩踏出し、右拳を腰に引き、左拳で顔面へ。

(受) 左足一歩退き、右手首(手甲を下)で相手の左手首を内側から受けると同時に左拳を腰に引く。

斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。

(極) 最後に相手の右手首を我が左手首(この場合は左手は握らず、開いたまゝ)で内側から受けると同時に掴み、引寄せながら右拳で人中を攻撃する。

**(注意)** すべて握拳を以て受ける場合でも、最後の極の時には手は握らず、開いたまゝ受ける方がよい。何故かと言ふと受けると同時に相手の手首を掴んで引寄せるのであるから、開いたまゝの方が動作が機敏だからである。以下すべて同じ。

### 一〇、上　段　裏　其の五

(用意) 用意の姿勢は前に同じ。

(攻) 一の號令で右足前進、右拳を以て相手の顔面を攻撃する。

(受) 左足一歩退きながら、右手首(手甲を下に)で攻手の右手首を外側より内方へ向つて打ち叩く様に受ける。左拳は腰に。

（攻）二の號令で左足を踏出し、右拳を引くと同時に左拳で顔面を突く。

（受）右足一歩退き、左手首（手甲を下）で相手の左手首を外受けする。

斯くして左右交互に練習、更に攻守位置をかへて練習を繼續せよ。

（極）最後に右手で（手は握らず）相手の右手首を外受けすると同時に掌を反して摑み、引寄せながら左拳で脇腹を一撃する。

第百六十四圖



中段表其の一（一）

## 第二　中段受

### 一、中段表　其の一

（用意）攻守三尺の距離に對立し、禮をなす事は上段受けの時に同じ。用意の號令と共に、攻手は右足を引きて前屈の姿勢をとり受手は其儘相手の目を凝視することも亦上段受けの時に同じ。

（攻）一の號令で右足前進、左拳を引くと共に右拳で相手の胸部を突く。

（受）右足一歩退き、（一）の如く、左手の指を揃へたまゝ伸し（手刀の形である）手首で相手の右手首を内側より外方へ彈き出す様に受ける。この時右手は同じく手刀の形で（手甲を下に）左乳の下に構へる。この手は攻撃の用意であると共に胸部を防禦する手ともなる。



第百六十五圖



中段表其の一（二）

（攻）二の號令と共に左足前進、右拳を引くと同時に左拳で胸部を突く。

（受）左足一歩退き、（一）の反對の姿勢で、右手刀の手首で相手の左手首を内受し、左手刀は右乳の下に構へる。斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。

（極）最後に左手首で相手の右手首を受けるや否や引摑み、引寄せ乍ら（二）の如く右貫手で胸部を突く。

### 二、中段裏　其の一

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（攻）一の號令と共に右足一歩踏出し、左拳を腰に取ると同時に右拳で胸部を突く。

（受）左足一歩退くと同時に（一）の如く右手刀の手首で相手の右手首を外側から内方へ彈き飛ばす様に受ける。左手は右乳下に手刀の形（手甲は下）で構へよ。

（攻）二の號令で左足一歩前進、右拳を引くと共に左拳で相手の水月を攻撃。

第百六十六圖



中段裏其一の(一)

第百六十七圖



中段裏其一の(二)

（受）右足一歩退くと同時に(一)と左右反對に、左手刀の手首で相手の左手首を外受けし、右手を左乳下に構へる。

斯くして左右交互に練習し、又位置をかへて練習を續けよ。

（極）最後に右手首で、相手の右手首を受けるや否や引掴み引寄せ、(二)の如く右足刀で鼠蹊部に踏み込。

又右手刀で受けるや否や素早く左手で受けかへ（受けかへる時は我が右手首の下から我が左手首(手甲は上に)の外側を、相手の右手首の内側に押つけるや、手繰り込む様に相手の右手首を引掴んで引寄せる、これを一瞬間に受けかへなければいけない）、同時に右貫手で水月を攻撃する。





第百六十八圖



中段表其二の(一)

第百六十九圖



中段表其二の(二)

## 三、中段表　其の二

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（攻）一の號令で右足前進、左拳腰に引くと共に、右拳で胸部を突く。

（受）右足一歩退き、左掌(指先は少し曲る位)で相手の右手首を上より打冠せる樣に、(一)の如く受ける。右拳は腰に。

（攻）二の號令で左足前進、右拳腰に引くや否や左拳にて胸部を攻撃する。

（受）左足一歩退き、右掌で相手の左手首を上より打冠せる如く受ける。左拳は腰に構へよ。

斯くして左右交互練習し、又攻守の位置をかへて練習せよ。

（極）最後に左掌で相手の右手首を押へると同時に、其上から右拳で(二)の如く胸部を攻撃する。

## 四、中段裏　其の二

(用意) 用意の姿勢は前に同じ。
(攻) 一の號令で右足一歩踏出すと同時に、左拳腰に引き、右拳にて相手の胸部目がけて突込む。
(受) 左足一歩退きながら、右掌(指は少し曲る位)で相手の右手首を上より打冠せるが如くに受ける。左拳は腰に取れ。
(攻) 二の號令で左足前進右拳引くと共に左拳にて胸部を突く。
(受) 右足一歩引きながら、左掌で相手の左手首を上より打冠せる如く受ける。右拳は腰に。
斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて反覆練習せよ。
(極) 最後に相手の右手首を、我が右掌にて上より打叩くと同時に、其反動で裏手にて相手の兩眼を發止と打つ(變手である)。

第百七十圖



中段表其の三（一）

## 五、中段表　其の三

(用意) 姿勢は前に同じ。
(攻) 一の號令で右足前進、左拳を引くと共に右拳で中段を突く。
(受) 右足一歩退き、相手の右手首を我が左掌にて外側から内側へ打拂ふ如くに受ける。右拳は腰に構へよ。(一)參照。
(攻) 二の號令と共に左足一歩前進、右拳を引くと同時に左拳で胸部を突く。
(受) 左足一歩退き、相手の左手首を我が右掌にて外側より内側へ打拂ふ如くに受ける。左拳を腰に。斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。
(極) 最後に(一)の如く突いてくる攻手の右肘を、左手にて引摑むや否や、其手を引寄せつゝ(二)の如く寄足にて手許に飛込みざま、右拳にて胸部を突く。

第百七十一圖



中段表其の三（二）

## 六、中段裏　其の三

(用意) 用意の姿勢は前に同じ。
(攻) 一の號令で右足一歩前進、左拳を引くと共に右拳で胸部を突く。
(受) 左足一歩退き、相手の右手首を我が右掌で内側から外方へ打拂ふ如くに受ける。左拳は腰に構へよ。
(攻) 二の號令と共に左足一歩前進、右拳を引き左拳で胸部を突く。
(受) 右足一歩退き、相手の左手首を我が左掌で横から拂ふ如く内受けする。右拳は腰に。

斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習を續けよ。

（極）最後に攻手の右手首を右掌で内受けするや否や、其反動で右裏手にて攻手の兩眼を打つ。（變手である）

## 七、中段表　其の四

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（攻）一の號令で右足前進、左拳を引くと同時に右拳で胸部を突く。

（受）右足一歩退き左拳を固め、其手首にて相手の右手首を打落すが如くに受ける。（左拳を我が右肩前より下斜めに、相手の右手首目がけて打下すのである。右拳は腰に構へよ）。

（攻）二の號令で左足を踏出し、右拳引くと共に左拳で胸部を突く。

（受）左足後退、右手首にて相手の左手首を打落すが如く（右拳を吾が左肩前より下斜めに相手の左手首目がけて打下す）受ける。

斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。

（極）最後に左手で（この時は拳とせずに）直ちに相手の右首手を摑み、引寄せながら右拳で胸部を突く。

## 八、中段裏　其の四

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（攻）一の號令と共に右足を一歩踏出し、左拳引くと共に、右拳で胸部を突く。

（受）左足一歩退くと共に、右拳を固め、第一圖の如く其手首にて相手の右手首を打落すが如くに受ける。左拳は腰に。

第百七十二圖



中段裏其の四（一）

（攻）二の號令と共に左足前進、右拳引くと同時に、左拳にて胸部を突く。

（受）右足一歩退き、左拳を固め、其の手首にて相手の左手首を打落すが如くに受ける。右拳腰に。斯くして左右交互に練習、又攻守位置をかへて練習せよ。

（極）最後に相手の右手首を我が右手首にて打落すや否や、其の反動にて右裏拳にて人中を打つ。（變手である）

## 九、中段表　其の五

（用意）姿勢は前に同じ。

（攻）一の號令で右足前進、左拳を腰に引くと同時に、右拳を以て相手の中段を突く。

（受）右足一歩退くと同時に、左手を握り。裏其の五（一）參照。左手首にて相手の右手首を內側より受け

る。右拳は腰に。

(攻)　二の號令と共に左足前進、右拳を引くと同時に左拳で胸部を攻擊。

(受)　左足一歩退き、右手首(手甲は下)にて相手の左手首を内受けする。

斯くして左右交互に練習し、又攻守位置をかへて練習を繼續せよ。

(極)　三回目、又は五回目に指を伸したまゝ左手首で相手の右手首を内側より受けるや否や、掌を反して之を摑み引寄せつゝ、右拳で水月を當てる。

第百七十三圖



中段裏其の五　(一)

### 一〇、中段裏　其の五

(用意)　姿勢は前に同じ。

(攻)　一の號令と共に右足一歩踏出し、左拳を引くと同時に右拳を以て相手の胸部を攻擊する。

(受)　左足一歩退くと同時に、(一)の如く右手首(手甲は下)を以て相手の右手首を外側より受ける。

(攻)　二の號令と共に左足前進、右拳を引くと同時に左拳で胸部を突く。

(受)　右足一歩退き、左手首を以て相手の左手首を外受けする。

第百七十四圖



中段裏其の五　(二)

(極)　最後に攻手の突込む右手首を、受手は指を伸したまゝ右手首で外受けすると同時に摑み引寄せ、左拳で脇腹を突く。

又、(二)の如く、右手首で外受けするや否や、左手にて相手の右手を押へると同時に、右拳にて脇腹を突いてもよい。

## 第三　下段受

**蹴技の基本練習**　蹴技は空手の特長とも言ふべき技であるから、是非とも十分に練習を積んで置かなければならぬ。

蹴技の練習は高く強く正確に當る樣にならなければいけない。それには天井、梁、又は鴨居等からゴム毬を紐で吊し、初めは少し低く三四尺位に吊して之を正確に蹴る練習を積み、段々に紐を短かくして毬を高くしてゆくとか、或は紐を左右に水平に張つて之を蹴り、段々高くして行くとか、其他いろ〳〵方法はあらう。

次に足を鍛へる爲には、拳と同じく卷藁を用ゐるがよい。拳の卷藁の下にもう一つ卷藁を縛りつけて、之に向つて或は前蹴り、或は横蹴り、後蹴りを連續して練習する。卷藁に當る箇所は組織篇にも一寸述べて置

いたが、大體左の通りである。

前蹴——指を上へ反らせ、拇指の付根と土踏まずとの中間が當る樣に蹴る。

横蹴——足の外側面即ち小指側の側面、小指の付根の横の邊りが當る樣に蹴る。

後蹴——踵で蹴る。

なほ下段受に入る前に、蹴技の基本練習として前蹴・後蹴・横蹴・三通りの蹴技に習熟して置くがよい。

### 一、前　蹴

用意の姿勢で左足を一步退き、右足を少し屈して之に體重を支へ、眼は假に前方相手の顏の邊を視つめ乍ら、左足に力を込めて、なるべく高く蹴上げる。(蹴上げたら瞬時に膝を屈して足を引く事を忘れてはならぬ。敵に足を取られぬ爲である)蹴る時には右膝はピンと伸して立つ。蹴上げた左足を、右足より一步前に下すと同時に、左足を屈して之に體重を支へ、右足に力を込めて高く蹴上げる。斯くして左右交互に步きながら練習をする。

### 二、後　蹴

用意の姿勢は直立八字立でよい。先づ右足に體重を托し、左足の踵で後方をなるべく早く強く蹴る。後方の敵の脛又は膝を蹴る時は膝を十分に曲げて蹴る。又金的を蹴る時は上體を少し前に傾ける位にし、股の付根を軸として大きく足を振る樣に(膝も幾分は曲る)後方を蹴上げる。蹴上げた足は直ちに元へ戻す樣にせよ。

斯くして左右交互に練習する、

### 三、横　蹴

用意の姿勢は直立八字立で、まづ右足に體重を托して左膝を屈し左足裏を右膝頭の前あたりまで上げ、(膝頭に觸れぬ方がよい)顏は左方に向けて、左側面から襲はんとする敵を假想し、左足に力を込めて高く横蹴りし、蹴つたら直ちに左膝を屈して足を元の位置まで引く。次に左足に體重を托し、右膝を屈して右足裏を左膝頭の前あたりに上げ、右方を向いて高く強く横蹴りし、瞬間に足を引く。斯くして左右交互に横蹴りの練習をせよ。

なほ平安二段の(七)(八)の如く、横蹴りすると同時に裏拳を以て相手の顏面を打つ樣に練習してもよい。

### 四、下　段　拂

(用意)　攻手・受手の兩者は約三尺の間隔を置いて對立し、上段受けの時と同樣互に禮をなす。

次に攻手は右足一步退き、左前屈の姿勢を取る。受手は其儘立つて相手の顏を視つめよ。

(攻)　一の號令と共に右足を以て相手の金的目がけて蹴上げる。右拳腰に構へ左拳は自然に伸したまゝ。

(受)　右足一步退きながら、左手首にて內側より相手の足首を打落すが如く受ける(左拳を右肩前から下斜に相手の右足首目がけて打下ろす)。此の時右拳は腰に構へ眼は必ず攻手の顏に注げ。

(攻)　二の號令で右足を其場に下し、左足を以て金的を蹴る。左拳腰に、右拳は自然に伸したまゝ。

（受）　左足一歩退きながら、右手首にて相手の左足首を打落すが如く内受けする。

斯くして左右交互に練習し、又攻手と受手と交替して練習せよ。

（極）　受方に熟練したら最後に攻手の右足首を（一）の如く右手にて外側より掴み、右足にて金的を蹴る。

或は左手にて敵の足を内側より掴み、金的を蹴つてもよい。

第百七十五圖



下段（一）

### 五、下段交叉受

（用意）　用意の姿勢は前に同じ。

（攻）　一の號令と共に右足にて相手の金的を蹴上げる。右拳腰に、左手は握つて伸したまゝ。

（受）　素早く右足を退いて體を開き、相手の足をして空を蹴らせる。左拳は左腿の上に、右拳は腰に構へ、目は相手の目を見つめよ。

（攻）　二の號令で右足を其の場（左足より一歩前）に下すと同時に、左足にて相手の金的を蹴る。左拳腰に、右拳は自然に伸して、



（受）　左足を退いて體を開き、空を蹴らせる目は相手の目に注ぎ、斯くて左右交々練習し、又攻守位置をかへて練習せよ。

（極）　三回又は五回目に、（二）の如く相手の右足向脛に我が兩拳を交叉して打ちつける。（兩拳は我が右脇腹の邊より相手の向脛めがけ勢こめて打下すのである）この場合にも目は必ず相手の目に注いで居らぬと、攻手の右拳が我が顔面に襲つて來る懼れがあるから注意を要する。

第百七十六圖



下段（二）

### 六、下段諸手受

（用意）　姿勢は前に同じ。

（攻）　一の號令にて右足にて相手の金的を蹴上げる。右拳腰に、左拳は自然に伸したまゝ。

（受）　素早く右足を退いて體を開き、相手に空を蹴らせる。拳の構へ、目のつけ所等總て前に同じ。

（攻）　二の號令で右足を其の場（左足より一歩前）に下すと同時に、左足にて金的を蹴る。

（受）　左足を退いて體を開き、空を蹴らせる事前に同じ。


第百七十七圖
下段(三)


第百七十八圖
下段(四)

(極) 最後に相手の蹴込んで來る右足を(三)の如く、兩掌を合せて受ける（半月第四圖の受方）や否や、兩手にて相手の足首を引いて體を崩し、直ちに金的を蹴る。
或は受けるや否や、之を排ひ捨て、右手にて金的を攻擊してもよい。

## 七、下段挾み受

(用意) 姿勢は前に同じ。
(攻) 一の號令にて右足で相手の金的を蹴る事前に同じ。
(受) 素早く右足を退いて體を開き、相手に空を蹴らせる。拳の構へ目のつけ所等總てに前に同じ。
(攻) 二の號令で右足を其場に下すと同時に、左足にて金的を蹴る。
(受) 左足を退いて體を開き、空を蹴らせる事前に同じ。
(極) 最後に相手の蹴込んで來るのを、右足一歩退くと同時に(四)の如く右手にて相手の右膝を押へ、左手にて足首を捕り之を挾み折る。この時も目は必ず相手の顏に注ぐ事を忘れぬ樣にせよ。

# 第三章　二段變化

既に組手型の基本に熟練したら、進んで稍複雜な組手の練習に入るがよい。こゝに二段變化といふのは、基本の極の型(甲が乙に向つて攻擊するのを乙が防ぐと同時に甲を擊つ)よりも一段進んだ型でつまり「基本の極の返し」といふ事になる。即ち

甲の攻擊を防いだ乙が、防ぐと同時に甲を攻擊するとき、更に甲が之を防いで乙を倒す

といふ意味で、從つてこの二段變化の組手は數限りもなくある譯であるが、こゝでは其の中から六つの型を選んで解說する事とした。

要するに組手といふのは、基本型の應用變化であるから、基本型の樣な一定の型はない。熟練を積めば各自の技倆に從つていろ〳〵考案が出來るもので、玆に掲げたのは其參考に資する爲に過ぎないのである。

## 第一　二段變化　其の一

(禮) 甲乙兩者三尺の距離に對立して、相互に禮をなすこと、組手基本の場合に同じ。
(用意) 甲（先に攻擊する者）は右足を一步引き、右拳を腰に、左拳を左腿前に構へて乙の顏を見つめる。


第百七十九圖
二段變化　其の一　(一)


第百八十圖
二段變化　其の一　(二)

**乙** は其の儘立つて相手の顔を見る。これも基本の時に同じ。

**(一)甲** エイと掛聲諸共、右足を踏出すと同時に、右拳にて乙の中段を目がけて突込む。左拳腰に取る。

**乙** 右足を一歩退くと同時に左拳の手首にて甲の右拳を打ち落す。右拳腰に構へよ。以上(一)參照。

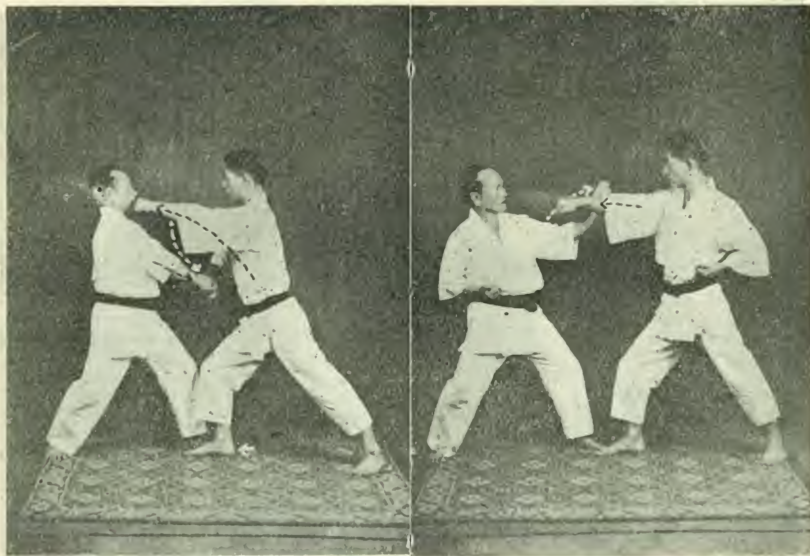
**(二)乙** 甲の右拳を打ち落すや否や、右拳にて甲の中段を攻撃。

**甲** 左拳の手首にて乙の右拳を拂ひ退けると同時に寄足にて乙の手許に飛込みざま、右猿臂にて水月を當てる(二)參照。

**(直れ)** 兩者徐ろに元の姿勢に復し、相互に禮をなす。(或は更に次の演武に移るもよい)。以下すべてこれに倣ふ。






第百八十一圖
二段變化　其の二　(一)

第百八十二圖
二段變化　其の二　(二)

## 第二　二段變化　其の二

**(用意)** 其一の場合に同じ。

**(一)甲** エイと掛聲諸共、右足を一歩踏出すと同時に右拳にて乙の上段(人中)目懸けて突込む。左拳を腰にとる事を忘れぬ様。

**乙** 右足を退いて半身になり、左掌にて甲の右手首を外受けする。右拳は腰に構へる。以上(一)參照。

**(二)乙** 甲の右拳を受けると同時に、右拳にて甲の中段目懸けて攻撃する。

**甲** 右手にて上より打ちかぶせる如く、乙の右手首を掴んで之を封ずると同時に、左拳を飛して乙の上段に一撃を加へる。以上(二)參照。

第百八十三圖



二段變化　其の三（一）

第百八十四圖



二段變化　其の三（二）

## 第三　二段變化　其の三

（用意）前に同じ、

（一）**甲** 右足一歩前進すると共に、右拳にて乙の中段を目懸けて突込む。左拳は腰に。

**乙** 右足を一歩退いて、左手にて甲の右手首を上より打かぶせる如く摑む。右拳は腰に。以上（一）參照。

（二）**乙** 甲の右拳を摑むや否や、右拳にて甲の中段に突込む。

**甲** 左手にて乙の右拳を内側より拂ひ受ける（なるべく手首を摑んで引寄せるがよい）や否や、左足を飛して乙の下段（金的か明星）を蹴上げる。この時右拳は乙に摑ませたまゝで、引き寄せる様にするがよい。以上（二）參照。

なほ足の位置、及び體の重心の位置によつて、右足で蹴上げても差支ない。その邊は機宜に從ふべきである。




第百八十五圖



二段變化　其の四（一）

第百八十六圖



二段變化　其の四（二）

## 第四　二段變化　其の四

（用意）前に同じ。

（一）**甲** 右足前進すると同時に、左拳を腰に引きつけ右拳にて乙の上段（人中）を攻撃する。

**乙** 右足を一歩退いて半身になると同時に、右拳腰に、左手をあげて左手首にて甲の右手首を受ける。（以上一參照）や否や、左手に相手の右手首を摑んで引寄せざま、右拳にて甲の顔面を突く。

第百八十七圖



二段變化　其の四（三）

（二）**甲** 敵の上段突（三）を左手をあげて受けるや（以上二參照）、左手に敵の右手首を引摑み右手は敵に摑ませたまゝグイと敵を手許に引寄せざま左足を飛して金的を蹴る。

第百八十八圖



二段變化 其の五（一）

第百八十九圖



二段變化 其の五（二）

## 第五 二段變化 其の五

（用意） 前に同じ。

（一） 二段變化其の四の應用變化として この型を解說して見よう。但し寫眞の人物が甲乙反對になつてゐるから注意して見られよ。即ちこれでは寫眞の向つて左側が甲、右側が乙である。

甲 右足前進、乙の上段（人中）を右拳にて攻擊する時。

乙 右足一歩引いて右手首にて上段受をなすや否や、右足を飛して甲の金的を蹴上げる、其の四の（二・三）を參照せよ。但し足は左右反對になつてゐる。

（二） 甲 蹴込んで來る乙の右足を、自分の右足裏にて打拂ふや否や（一參照）、瞬間に右足を返して乙の金的を蹴上げる（二參照）。騎馬立初段の波返しを應用したものである。

尙こゝには寫眞が混雜して見難くなるのを懼れて足の變化だけを示したが、（一）の上段受の攻擊と受け方は、其の四の場合と同じ。もし其の四の連續として、波返しを試みれば三段變化になる譯である。





第百九十圖

二段變化 其の六（一）

第百九十一圖



二股變化 其の六（二）

第百九十二圖



二段變化 其の六（三）

## 其六 二段變化 其の六

（用意） 前に同じ。

（一） 甲 右足前進すると同時に、右拳にて敵の顏面を突く。

乙 左足を一歩後に開いて半身になると同時に、左拳腰に右肘を直角に曲げて上段外受けをなす（以上一參照）や否や、忽ち身を沈めて右拳を以て敵の脇腹を突く（二參照）。これは例の變手である

（二） 甲 此の時左腰に構へた左手を以て突嗟に敵の右手首を外側より押へ（拇指を上に引摑む）、右足一歩踏込むと共に、右猿臂にて敵の水月に一擊を加へる。

# 第四章　三段變化

二段變化よりも更に一層進んだ組手で、つまり二段變化の返しといふ事になる。これ以上なほ四段變化でも五段變化でも、熟練さへ積めば各自の工夫に從つて變化は無數にあるが、本書に於ては三段變化まで説明するに止めて、それ以上は他日の機會に讓らうと思ふ。

## 第一　三段變化　其の一

**（禮）** 甲乙兩者三尺の距離に對立して、相互に禮をなすこと、基本の場合に同じ。

**（用意）** 甲（先に攻撃する者）は右足を一歩引き、右拳を腰に、左拳を左腿前に構へて乙の顔を見詰める。乙は其の儘立つて相手の顔を見る。これも基本の場合に同じ。

**（一）甲**　寄足にて敵に接近するや否や、左拳を腰に引き、右拳にて上段突。

第百九十三圖



三段變化　其の一（一）





第百九十四圖



三段變化　其の一（二）

第百九十五圖



三段變化　其の一（三）

**（註）** 右足前進して敵に近づくのが普通であるが、こゝでは次に右足にて攻撃せんとの心構へがあるので、用意の姿勢を崩さず其の儘寄足にて飛込んだのである。

**乙**　右足を一歩引いて半身になり、右拳は腰に。左手を上げて敵の手首を内受けする。（以上一參照）左手にて甲の右手首を引摑むや否や、グイと引寄せると同時に右拳にて上段突。以上（二參照）。

**（二）甲**　上體を後へ反らして上段突を避ける（又は左手にて打拂つてもよい）や否や、右足にて乙の下段を蹴放す。

**（三）乙**　瞬間に腰を落して兩掌にて敵の足首を受けるや（以上三參照）、右手にて足首を摑んで引寄せ、敵の姿勢を崩しながら、左手を敵の右膝關節に當て、右足を逆に挾み折る（或は便宜の足にて金的を蹴上げてもよい）。

**（直れ）** 兩者徐ろに元の姿勢に復し、相互に禮をなす（或は更に次の演武に移るもよい）。以下すべて之に倣ふ。

第百九十六圖



三段變化　其の二（一）

第百九十七圖



三段變化　其の二（二）

第百九十八圖



三段變化　其の二（三）

## 第二　三段變化　其の二

（用意）前に同し。

（一）甲　敵の注意を右拳に集注させ、隙を見て「エイ」とばかり右足を飛して下段を蹴上げる。

乙　右足を引いて體を開きながら、左手にて敵の向脛を支へ、同時に右拳を腰に取り（以上一參照）、向脛の中央の急所目がけて右拳を突込む。

（二）甲　右足を敵に受けられるや、直ちに右足を引いて敵の返し技を避けると同時に、敵の上段目がけて右拳を突出す。

（三）乙　上體を後に反らせて敵の右拳を避け（又は左手にて打ち外してもよい）、續いて蹴上げて來る甲の右足を右手にて拂ひ除けざま、右足にて金的を蹴上げる。





第百九十九圖



三段變化　其の三（一）

第二百圖



三段變化　其の三（二）

第二百一圖



三段變化　其の三（三）

## 第三　三段變化　其三

（用意）前に同じ。

（一）甲　右足一出すと共に、右拳を以て上段を突く、左

乙　足歩踏を一歩開いて半身になると同時に、右手を上げて敵の右拳を外受けする（以上一參照）や否や、其の手首を引摑んで逆に捻ぢ上げる。

（二）甲　右手を敵に捻ぢられるや、其の儘捻ぢらせておいて（自ら我が右手を背中に廻す様に）左廻りに足を（二）の如く踏出すと同時に、左猿臂にて敵の左脇腹を突く（以上二參照）。

（三）乙　素早く身を引いて猿臂の攻撃を避けるや、右裏拳にて敵の顔面を撃つ。

甲　左手にて敵の右拳を外し乍ら、右拳にて中段を攻撃する。

第二百二圖



居合の禮の姿勢（一）

第二百三圖



居合の禮の姿勢（二）

# 第五章 居合

攻守兩者が對座してゐる場合の組手を居合といふ。
從つて居合も今迄に説明した組手と同樣に、古來より一定した型がある譯でなく、基本型の應用にすぎない。茲には例として六つの型を説明したが空手の居合はこれで盡きてゐるのではなく、單に基本型の應用として一例を示したに止るものである。故にこれに熟練したら、更に今迄に習得した基本型、組手型を應用して各自に苦夫して見るもよい。本書には省いてあるが、寢ごみを敵に襲はれた場合の防ぎ方、攻め方等も、應用研究して見るも面白からう。

## 第一 前捕 其の一

**（禮）** 攻手、受手の兩者約三尺の距離に（二）の如く對坐し、（一）の如く兩臂を張り、目と目を見合せながら恭しく禮を爲す。

（註） 必ず相手の目を見詰め乍ら禮をせよ。何時如何なる場合にも、不意に飛かゝられても防ぎ得るだけの用意が出來てゐなければならぬ。

**（用意）** 頭を起して再び（二）の如く對坐す。此時兩手を股の上に四指を揃へて置き、肘を張り、互に目を見合はす。

**（捕）** 攻手は相手の隙を窺ひ、「エイ」と氣合を掛けながら右足を一歩踏出すと共に相手の兩手首を上よりムヅと摑む。（三）參照。

**（極）** 受手は敵に諸手を捕られた瞬間丹田に力を籠め「オウ」と應へて右手を左肩前にグイと引拔く（平安初段「四」の應用である）や否や、間髮を容れず、（四）の如く手刀を以て敵の右頸動脈を打つ。

**（直れ）** 演武が終つたら、兩者再び元の位置に對坐し、一禮する。（或は續いて次の演武に移つてもよい）。
以下すべて之に倣ふ。





第二百四圖



前捕 其の一（一）

第二百五圖



前捕 其の一（二）

第二百六圖



前捕　其の二（一）

第二百七圖



前捕　其の二（二）

## 第二　前捕　其の二

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（捕）攻手は相手の隙を窺ひ（或は禮を濟ませて頭を起すと同時に飛込んでもよい）「エイ」と掛聲諸共右膝立てて一歩近づくと共に、（一）の如く相手の右手首を我が兩手にてムヅと引摑む。

（極）受手は敵に右手首を摑まれた瞬間「オウ」と應へて丹田に力を籠め、同時に（二）の如く右足を後に開いて右膝立て、腰を捻つて摑まれた右手をグイと引寄せて敵の體勢を崩し、左拳を以て敵の三日月（下顎）を突く。





第二百八圖



前捕　其の三（一）

第二百九圖



曲捕　其の三（二）

## 第三　前捕　其の三

（用意）用意の姿勢は前に同じ。

（捕）攻手は禮をして頭を起すや否や、「エイ」と氣合諸共右膝を立てると同時に、右拳にて相手の上段目がけて突込む。（一）參照。

（極）受手は「オウ」と應へて少しく身を起し、右手を上げて敵の上段突を外受けする（以上二參照）や否や、敵の右手首を引摑み、右足をサツと引いて逆に捻ぢ上げると同時に、左拳にて脇腹を突く。慈恩（一一）（一二）の應用である。

第二百十圖



前捕　其の四（一）

第二百十一圖



前捕　其の四（二）

## 第四　前捕　其の四

（用意）　用意の姿勢は前に同じ。

（捕）　攻手は禮をして頭を起すと同時に「エイ」と氣合諸共、右足一歩踏込みざま、右拳にて相手の上段を突く（一）參照。

（極）　受手「オウ」と應へて少しく身を起し、左手を上げて敵の上段突を內受けする（以上一參照）。や否や、敵の右手首を引摑み、我が左腰に引込みながら、同時に左足をサッと退いて敵體を我が前に引倒し、右拳にて人中を一撃する（以上二參照。これは其の三と同じ要領で、只右と左と異なるのみである）。





第二百十二圖



後捕　其の一（一）

第二百十三圖



後捕　其の一（二）

## 第五　後捕　其の一

（用意）　用意の姿勢は前に同じ。

（捕）　攻手は禮をして頭を起すや、立つて受手の背後に廻り（頭を起した瞬間サッと受手の後に飛び込む如くに廻り込んでもよい）「エイ」と掛聲諸共（一）の如く、背後より受手の左右の上膊の上から抱きすくめる。

（極）　受手は丹田に力を籠め、「オウ」と應へると共に右膝立て、（二）の如く兩拳を握りしめて右拳を右肩上に、左拳を腰に、上體を左に捻る如く同時に兩肘を張り出す（平安三段の最後の手の應用で、敵の手を拔けると同時に、左猿臂で敵の水月を當てるのである）。或は其の二の（一）の如く、敵の手を拔くと同時に左手で金的を打つてもよい。

第二百二十四圖



後捕　其の二(一)

第二百二十五圖



後捕　其の二(二)



### 第六　後捕　共の二

**(用意)** 用意の姿勢は前に同じ。

**(捕)** 禮をして頭を起すや、攻手は立つて受手の後方に廻り込み、「エイ」と掛聲諸共上膊の上から抱きすくめる(後捕共一の一參照)。

**(受)** 受手は丹田に力を籠め「オウ」と應へて右膝立て、上體を左へ捻つて兩肘をグツと張り、相手の諸手を拔くと共に左手にて敵の金的を打つ。(一)參照。

**(攻)** 攻手は左足一歩退いて金的の攻撃を避けるや、「ヤツ」と氣合諸共右拳を以て受手の後頭部を一撃する。

**(極)** 受手(二)の如く素早く上體を前に倒して上段突を外し、「トウ」と大喝一聲、右足刀を以て敵の腹部を蹴放す(觀空にある手の應用である)。



## 第六章　投技

**投技の意義**　空手は柔術に對して剛術とも言へるが、勿論剛の中には柔も含み、柔の中には剛も含んでゐなければならない。卽ち柔ならんが爲の剛、剛ならんが爲の柔で、剛柔は元來一致のものである。だから空手には單に打つ、蹴る、突くといふばかりではなく、投技もあれば逆手もある。相手の力量に應じて、突く、蹴る、打つといふ樣な強い技を用ひず、臨機投技の如き柔技も施すところに言ふに言はれぬ一種の趣があるのである。又投技にせよ、逆手にせよ、前章迄に述べた組手、居合等と同じく、方法は實に千變萬化で幾十通りもあつて、要するに敵に因つて轉化すればよいので、そこは研究者に任せて置く。只初心者の爲に其一端を示して、圖解略述し、聊か參考に供する事とする。之を緯とし基本型を經として、各自に研究熟練を積まれゝば、無意識に受け、投げ、倒し得る境地に到るであらう。

第二百二十六圖



屛風倒(用意の姿勢)

### 第一　屛風倒

**(禮)** 演武の際は、公開の場合は先づ攻守兩者揃つて來賓に向つて一禮を爲し、次ぎに兩者約三尺の間隔を保つて互に禮を爲す。禮の仕

第二百十七圖



屏風倒（二）

第二百十八圖



屏風倒（三）

方は組手のところに述べた通り兩手を腿の前に垂れ、少しく上體を傾け、互に目は相手の顔を見詰める樣にせよ。

（用意）　攻手は右足一歩退くと共に、左拳を左腿前に、右拳を腰に、（一）の如き姿勢をとり、「エイ」と氣合を掛ける。受手は其のまゝ、兩拳を握り、相手の顔を見つめ、「ォゥ」と應へる。

（攻）　攻手は右足一歩踏出すと共に、左拳を腰に引き、右拳にて相手の上段に突込む。以上（二）參照。

（受）　受手は素早く右足一歩退くと同時に、左手（四指を揃へて伸し）相手の手首を内受けする（以上二參照）や否や、

（極）　其の手首を引摑んでグイと引寄せながら、右手を敵の頤に當て、右足を敵の右足後にかけて、腰を捻る樣にして恰も屏風を倒すが如くに投げ倒す。此の時右手を敵の頤に強く打ち當てれば當身になる。

（註）　手と足と腰の動作が一致しないと技が利かぬばかりでなく返し技を掛けられる懼れがあるから注意せよ。





第二百十九圖



獨樂投（一）

第二百二十圖



獨樂投（二）

## 第二　獨樂投

（用意）　前と同じ。

（攻）　攻手は右足を一歩踏出すと共に、右拳を以て中段に突込む。以上（一）參照。

（受）　受手は素早く左足一歩退いて身をかはしながら、（一）の如く右手首裏を以て敵の右拳を受けるや否や。

（極）　其のまゝ右手首を引摑んで右腰に引つけて左足を敵の背後に踏出し、同時に左手にて敵の右上膊部を摑んで逆に捻ぢ上げ、腰を捻つて強く引き廻せば敵の體は獨樂の如く廻轉して吾が前に轉倒するのである。

（註）　この時は右手は相手の右手首を摑んだまゝしつかりと我が右腰に引つけ、腰を十分に捻る樣にせよ。なほ左手が相手の右上膊部にかゝつてゐないと逆は利かないものである。


第二百二十一圖 首環(一)


第二百二十二圖 首環(二)

## 第三 首環

(用意) 姿勢は前に同じ。

(攻) 攻手は右足一歩踏出すと共に、右拳にて上段人中を向つて突込む。

(受) 受手素早く左足を退いて身をかはし、右手をあげて(一)の如く敵の右拳を外受けするや否や、其の手を滑べらし乍らサッと寄足にて飛込みざま、(二)の如く右手にて敵の頤を突上げ、

(極) ひるむ處を更に一足踏込んで右足を敵の右足後にかけ、右腕に敵の首を巻き、左手を敵の脇腹に當てて一氣に捻倒す。


第二百二十三圖 首環(三)

(註) 時により(二)の頤を突上げる一動作を略して、敵の手を受けるや否や、其のまゝ飛込んで右手に敵の首を抱へ込んでもよい。






第二百二十四圖 片輪車(一)


第二百二十五圖 片輪車(二)

## 第四 片輪車

(用意) 姿勢は前に同じ。

(攻) 攻手は右足一歩前進すると共に、右拳にて相手の中段水月のあたりを目がけて突込む。

(受) 受手は素早く左足を引いて身をかはしながら、右裏手にて打落すが如く敵の右手首を外受けする(獨樂投(一)と同じ)や否や

(極) 攻手の右腕の外側を滑る樣にサッと深く飛込み(敵の右腕を我が脇下に滑り込ませる如くする)ざま、(一)の如く右手を敵の首にかけ、左手を敵の右内股にかけ、(二)の如く、右手を引き、左手を上げて敵を我が右後方へ投げ倒すのである。

第二百二十六圖



燕　返（一）

第二百二十七圖



燕　返（二）

## 第五　燕　返

（用意）姿勢は前に同じ。

（攻）攻手は右足一歩踏出すと同時に、右拳にて相手の顔面人中を目がけて突上げる。

（受）受手は素早く左足を引くと共に、（一）の如く兩手首を交叉して敵の上段突きを挾み受ける（平安五段上段挾み受けの應用である）や否や、左手を返して敵の右手首を摑んで引寄せ、右裏拳にて（二）の如く下頤をハッシと打ち、兩手を頭上に突上げる如き心持で受ける）

（極）敵のひるむ處を隙かさず、敵の右腕を逆に捻ぢ上げ引込みながら、左足をサッと大きく引いて膝をつき、（三）の如く投げ倒す。

第二百二十八圖



燕　返（三）

（註）投げる時には左足は殆んど半圓形を描いて、敵の兩足の間位まで、引くと言ふよりも敵の懷に廻り込む、といふ氣持である。時によつては下頤を打つのを略して直ちに投げてもよいが、此の場合敵の右腕はシッカリ逆に捻ぢ上げて置かぬと、左拳で逆襲される懼れがある。





第二百二十九圖



槍　玉（一）

第二百三十圖



槍　玉（二）

## 第六　槍　玉

（用意）姿勢は前に同じ。

（攻）攻手は右足を一歩踏出すと同時に、右拳にて相手の顔面を目がけて突込む。

（受）受手は素早く身を開き、左手刀の甲を以て受け、突嗟に敵の右手首を左手にて摑み、（一）の如く右足大きく敵前に踏出すと同時に、右手を敵の股下に差込み、

（極）上體をグイと捻る如く、左手を左後へ引き右手を上げ、敵體を我が腹上に一廻轉せしめて投げ飛ばす。

（註）（一）の如くに右手を敵の股下に入れる際、輕く金的に當てて置けば敵の氣勢を挫き、左拳の逆襲を封ずる事も出來る譯である。

第二百三十一圖



谷落（一）

第二百三十二圖



谷落（二）

## 第七　谷落

（用意）姿勢は前に同じ。

（攻）攻手右足一歩前進すると共に、右拳にて相手の顔面を突く。

（受）受手は右足をサッと引いて左手にて敵の右拳を受けるや否や、（一）の如く引摑んで左腰に引寄せつゝ右拳にて胸部を一撃し、

（極）直ちに右足を一歩踏込んで、（二）の如く敵の利腕を逆に取りつゝ肩に擔ぎ、（三）の如く投げ倒すと同時に右拳を腰に構へ、敵の出樣如何によつては最後の止めを刺すのである。

第二百三十三圖



谷落（三）

（註）（三）は見よい樣に寫眞を反對の方向から撮つたが、實際は（二）の姿勢のまゝにて投げ棄てるのであるから、受手は後ろ向きとなつてゐる譯である。





第二百三十四圖



腕環（一）

第二百三十五圖



腕環（二）

## 第八　腕環

（用意）用意の姿勢は受手は前と同じであるが、攻手は兩拳を腰に取り諸手突きの構へをなす。

（攻）攻手は右足を一歩前進すると同時に、諸手同時に敵の上段を攻撃する。

（受）受手素早く左足を引いて右前屈となると同時に、（一）の如く諸手上段受け（左右の肘を張り手首にて下から突上げる如くに受ける）をなすや否や、（二）の如く、サッと寄足にて近づきざま、兩手槌にて敵の脇腹を挾撃し（拔塞「二二」「二三」の應用である）、

（極）敵のひるむ隙に乘じて更に敵に近づき、（三）の如く兩手にて敵の足を引き、右肩にて腹部を押し、仰向に引き倒す。

第二百三十六圖



腕環（三）

（註）これを急激に行ふと攻手は足を掬ひ上げられる形になり後頭部を打つ危險があるから演武の際にはよく注意しなければならない。

第二百三十七圖



逆　槌（一）

第二百三十八圖



逆　槌（二）

第二百三十九圖



逆　槌（三）

## 第九　逆　槌

（用意）用意の姿勢は其一に同じ。

（攻）攻手は右足一歩前進すると同時に、右拳にて上段目がけて突込む。

（受）受手は素早く左足を引いて體を開き、（一）の如く右手を以て上段受けをなすや否や、寄足にてサッと脇下に飛び込みざま、（二）の如く右手を敵の右脇下より背後へ、左手を腹部へ廻すと同時に、

（極）エイと氣合諸共（三）の如く敵體を逆に抱き上げ投げ倒す。

（註）（三）の姿勢にて、受手が腰を落して敵の頭を逆にしたまゝ地上に打ちつければ一堪りもないが、非常に危險であるからよく〱の強敵で我が命が危いといふ場合でもない限り、其のまゝ滑り下ろす樣に投げるべきである。



# 第七章　武器と空手

**武器に對する注意**　元來空手は手足を刄物と見做し、「觸るれば切れる」といふ信念を持つて稽古すべきものであるから、相手が武器を持つてゐるからと言つて、特別に警戒するといふ理由はないのであるが、只相手の武器は勿論、武器の種類によつて、或は間合なり、或は避ける方向なり、或は飛び込み方等に考慮しなければならぬ事は勿論である。なほ武器を持つてゐると、自然それに頼る樣になるもので、足や、猿臂や、左手等の使用が敏活を缺くから、武器を封じられると全然無手の者よりも不利に陷る事が多い。又實際の場合には身につけた上衣・履物の如きは勿論、たとへ、手拭一本、紙一枚でも使ひ樣によつては立派に有效な防具として役立つものであり、或は敵の顏面に唾を吐きかけ、或は氣合をかけ、足音・手拍子にて敵の心を奪ふ等といふ方法もある。故に斯かる點をよく心得て立合へば、武器を持つた相手をも立派に制禦し得るものである。

## 第一　短刀と空手　其の一

（禮）兩者約一間の距離に、受手は普通の組手と同樣兩手を腿の前に垂れ、相手の顏を見つめ、攻手は短刀を腰にさし、同じく兩手を腿の前に垂れて受手と對立し、相互に少しく腰を屈めて（一）の如く禮をなす。

第二百四十圖



短刀と空手　其の一（一）

第二百四十一圖



短刀と空手　其の一（二）

第二百四十二圖



短刀と空手　其の一（三）

（用意）　攻手は左半身になつて短刀を引抜いて上段に振かぶり、相手の隙を窺つて切下さんと身構へる。受手は右足を引いて間合を圖り、（攻手が一歩踏込んだ丈では屆き難い位置に）攻手の顏を睨みつける。（二）參照。

（攻）　攻手「エイ」と氣合諸共、サッと一足踏込んで切下さんするを、

（極）　受手、素早く寄足で左斜めに飛込みざま（攻手の右側に廻り込むのである）、左掌にて切下さんとする敵の右肘を支へ、同時に右掌にて右脇影を一擊する。（三）參照。

（註）　攻手は受手が一歩踏出しただけでは短刀が屆き難い位置に居るので、一歩進んだ時にはまだ切下ろさず更にもう一歩迫つて來ようとするから、受手は敵が最初の一歩を踏出した瞬間に、我からも一歩手元に近づいて武器を制するのである。問合卽ち彼我の間隔は常に一歩其の心にて研究しなければならない。なほ技の極る瞬間に氣合を掛けよ。

（直れ）　終つたら両者元の位置に復して、互に禮をなす事、始めの通りである。以下すべて之に倣ふ。





第二百四十三圖



短刀と空手　其の二（一）

第二百四十四圖



短刀と空手　其の二（二）

## 第二　短刀と空手　其の二

（用意）　両者の構へは前に同じ。

（攻）　攻手「エイ」と氣合諸共、サッと一足踏込んで切下す。

（極）　受手、敵に飛かゝる氣勢を示して、敵が切下して來るのを（一）の如く素早く左に躱し、右手首裏にて敵の腕を押へると同時に手首を引摑み、左手を關節に當てて逆に取り乍ら、左足刀にて敵の右高股に踏込み、手足同時に挫き折るのである。（二）を參照せよ。

（註）　（一）の姿勢の時、受手は手刀にて敵の肘關節を打折つてもよし、又（二）の姿勢にて右手に敵の右手首を摑んだ際、我左手首にて敵の肘關節を逆に打折つてもよい。

第二百四十五圖



短刀と空手　其の三（一）

第二百四十六圖



短刀と空手　其の三（二）

第二百四十七圖



短刀と空手　其の三（三）

## 第三　短刀と空手　其の三

（用意）攻手短刀を引抜き右脇に構へて受手の隙を窺ひ突込まんと身構へる。受手の構へは前に同じ。

（攻）攻手「エイ」と氣合諸共、一歩飛込みざま受手の胸部を突く。

（受）受手は敵が飛込む瞬間、素早く右足を踏出し（必ず敵の右側に廻り込む樣な位置に踏出せ）、右裏拳を以て肘關節を一擊するや否や、

（極）寄り足にてサッと手許へ飛込み、左手にて敵の肘を押へると同時に、右拳にて顔面を突上げる。

（註）右足を進めて武器を持つた敵に飛込むには敵が飛びかゝらうとする瞬間でなければならぬ。敵が身構へてゐる所へ飛込むのは無論危險であるし、敵が踏出して來てからでは遲い。其の間合と時機とによつて或は進んで受け、或は退いて外すので、この呼吸をよく呑み込まなければいけない。





第二百四十八圖



短刀と空手　其の四（一）

第二百四十九圖



短刀と空手　其の四（二）

## 第四　短刀と空手　其の四

（用意）用意の構へは其の一の時と同じ。

（攻）攻手「エイ」と氣合諸共、一步踏込んで受手の首筋を目がけて切下ろす。

（受）受手素早く左後へ（一）の如く一步飛退いて外し、敵が更に橫薙ぎに切拂はんとするを、

（極）受手サッと敵の手許に飛込みざま、（二）の如く左手にて敵の肘を押へ、同時に右拳にて脇腹へ突込む。

第二百五十圖



短刀と空手　其の五　（一）

第二百五十一圖



短刀と空手　其の三　（二）

## 第五　短刀と空手　其の五

（用意）用意の構へは其一に同じ。

（攻）攻手「エイ」と氣合諸共、一歩踏込んで受手の首筋めがけて切り下ろす。

（受）受手、（一）の如く突嗟に身を伏せて、伏すと同時に右足にて敵の金的を蹴上げ、瞬間に起直るや、（二）の如く左手にて敵の右足を押へ（蹴られぬ樣に封じたのである）、同時に右拳にて胸部を突く、

（註）實際の場合、組手型の演武の如くに極手一つで攻撃を止めて仕舞ふと、その極手が十分の効力がなかつた時は却つて危險であるから、必ず斯の如く連續して二度三度攻撃し、敵の抵抗力を奪ふ事が肝要である。





第二百五十二圖



大刀と空手　其の一　（一）

第二百五十三圖



大刀と空手　其の一　（二）

## 第六　大刀と空手　其の一

（用意）禮が終つたら両者約二間の間隔にて、攻手は大刀を拔いて正眼につけ、受手は之に對して普通の組手と同樣両手を腿の前に置き敵の眼を注視する。（一）參照。

（攻）攻手「エイ」と掛聲諸共、一歩踏込んで眞向より斬下さんとする時、

（受）受手素早くサッと手許に躍り込んで、（二）の如く両手にて敵の両肘を押上げるや

第二百五十四圖



大刀と空手 其の一 (三)

第二百五十五圖



大刀と空手 其の一 (四)

(極) (三)の如く右膝槌にて敵の下腹部を一撃し、間髪を容れず、(四)の如く右猿臂にて水月を猛襲し、續いて右裏拳にて人中を撃つ。

(註) 大刀を持つた敵に立向ふには短刀の時よりも十分に間隔を取る必要がある。敵の仕掛けて來ようとする瞬間に飛込んで行く要領は、短刀の場合と全く同じである。





第二百五十六圖



大刀と空手 其の二 (一)

第二百五十七圖



大刀と空手 其の二 (二)

## 第七 大刀と空手 其の二

(用意) 用意の構へは前に同じ。

(攻) 攻手「エイ」と氣合と共に、一歩踏込んで眞向より斬下ろさんとする。

(受) 受手素早くサッと左前方(敵の右側)へ廻り込むと同時に腰を落して(一)の如く左拳にて上段人中に一撃を加へ、續いて(二)の如く右拳にて中段水月に止めを刺す。

(註) この左拳と右拳の連突きは殆んど同時と言つてもよい位、目にも止らぬ程の早さで續けざまに突込む事が肝要である。

第二百五十八圖



大刀と空手　其の三（一）

第二百五十九圖



大刀と空手　其の四（二）

## 第八　大刀と空手　其の三

**(用意)** 用意の構へは前に同じ。

**(攻)** 攻手「エイ」と氣合諸共、一歩踏込んで眞向より斬下ろす。

**(受)** 受手は敵の手許に飛込む氣勢を見せて、敵が斬下ろして來る時サッと左に身を開くや、(一)の如く右裏手にて敵の右手を制し、

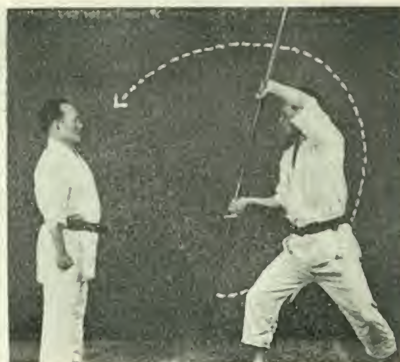
**(極)** 寄足にて摺り寄るや、(二)の如く左手にて敵の利腕を制し、同時に右拳にて下顎を突上げる。

**(註)** (一)の姿勢の時に右裏手で受けずに右裏拳又は右手刀にて敵の肘關節を打ち折つてもよい。(二)の姿勢にて寫眞では椀突き（掌の手首に近い部分）で顎を攻めてゐるが、これは型の場合に拳を用ゐる時は危險が多いからで、無論拳で突上げる方が効力が大きい。或は二本貫手で兩眼を攻める方法もあり、敵の力量と技術とに依つては椀突きして置いて投技で倒して武器を奪つてもよい譯である。その邊は彼我の腕次第で、稽古の際にいろいろと工夫研究して見るがよい。





第二百六十圖



棒と空手　其の一（一）

第二百六十一圖



棒と空手　其の一（二）

第二百六十二圖



棒と空手　其の一（三）

第二百六十三圖



棒と空手　其の一（四）

## 第九　棒と空手　其の一

**(用意)** 禮が終つたら兩者約二間の距離に對立、攻手は棒を(一)の如く持つて上段打の構へ、受手は其のまゝ立つて攻手の顏を注視する。

**(攻)** 攻手「エイ」と掛聲諸共棒を廻して上段にハッシと打下ろす。

**(受)** 受手素早く體を開いて流れる棒を(二)の如く摑み、敵が焦つて引かうとする力を利用して(三)の如くグイと押込んで體勢を崩し、突嗟に(四)の如く引抜いて棒を奪ふ。

**(註)** 寫眞には棒を奪つた所までゝ極は略してある。勿論棒を奪へばそれで勝負はついてゐるが、實際の場合は(四)の姿勢にて受手が更に棒を突出せば敵は胸を突かれて倒れるのである。

第二百六十四圖



棒と空手 其の二 (一)

第二百六十五圖



棒と空手 其の二 (二)

## 第十 棒と空手 其の二

**(用意)** 用意の構へは其の一と同じ。

**(攻)** 攻手「エイ」と氣合諸共眞向より打下ろす。

**(受)** 受手素早く體を開いてサッと寄足にて進み、(一)の如く流れて來る棒を掴む(これまでは其の一と全く同樣である)や否や、

**(極)** 右手にて敵を引寄せ、左拳にて(二)の如く敵の人中を一撃する。

**(註)** 左拳にて上段を突くや、續いて右足にて下段を攻撃してもよい。或は棒を受けると同時に両手にて棒を掴み引寄せ乍ら、右足にて金的を蹴つてもよい。





第二百六十六圖



棒と空手 其の三 (一)

第二百六十七圖



棒と空手 其の三 (二)

## 第十一 棒と空手 其の三

**(用意)** 用意の構へは前に同じ。

**(攻)** 攻手上段打に出ようとする時、

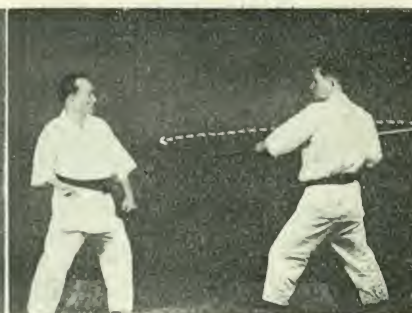
**(受)** 受手は機先を制して(一)の如く飛鳥の如く敵に飛びかゝり、棒を掴むや否や(二)の如くグイと逆に捻つて敵の體勢を崩し、

**(極)** 右足を以てガッシと高股を踏挫く。或は金的、或は明星を蹴上げてもよい。

第二百六十八圖



棒と空手 其の三 (三)



第二百六十九圖

棒と空手 其の四 (一)



第二百七十圖

棒と空手 其の四 (二)



第二百七十一圖

棒と空手 其の四 (三)

## 第十二 棒と空手 其の四

**(用意)** 禮が終つたら兩者約二間の距離に對立し、攻手は棒を(一)の如く持つて中段横打の構へをなし、受手は八字立、右拳腰にとつて身構へる。

**(攻)** 攻手「エイ」と氣合諸共に、一歩踏込みざま横薙ぎに打拂ふ。

**(受)** 受手素早く右足踏出して敵の左脇に飛込むや否や、

**(極)** (二)の如く左手にて棒を押へ、右猿臂にて脇腹に一撃を加へ、間髪を容れず(三)の如く拳裏にて人中を撃つ。







第二百七十二圖

棒と空手 其の五 (一)



第二百七十三圖

棒と空手 其の五 (二)



第二百七十四圖

棒と空手 其の五 (三)

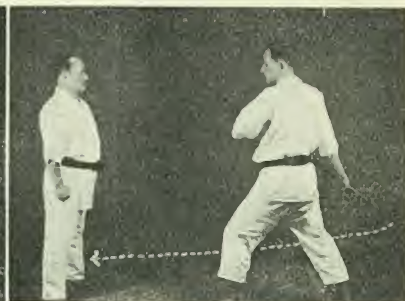
## 第十三 棒と空手 其の五

**(用意)** 禮が終つたら兩者約二間の距離に對立し、攻手は棒を(一)の如く取つて中段突込の構へをなす。

**(攻)** 攻手「エイ」と氣合諸共に、受手の中段めがけて突込む。

**(受)** 受手は相手の棒を突出す瞬間、サッと右足を進めて體を開き、(二)の如く右裏手にて棒を押へ、

**(極)** 右手に棒を摑むや否や、グイと引寄せながら、左足を(三)の如く踏込んで左拳にて上段を突上げる。


第二百七十五圖
棒と空手 其の六（一）


第二百七十六圖
棒と空手 其の六（二）

## 第十四 棒と空手 其の六

**（用意）** 禮が終つたら両者約二間の距離に對立し、攻手は棒を（一）の如く取つて下段拂ひの構へ、受手は其まゝ八字立にて敵を見つめる。

**（攻）** 攻手「エイ」と掛聲と共に飛込んで下段を拂ふ。

**（受）** 受手素早く飛上つて棒を外すや否や、

**（極）** （二）の如く敵の右脇へ飛込んで右手にて棒を制し、左拳にて人中を一擊する。

**（註）** 下段拂の棒を飛上つて外す時は、自分の尻を踵で蹴上げる心持でなければならぬ。一旦身を縮めてから飛んだのでは動作が遅くなつて棒を外す事は難しい。

尚この説明にはすべて用意の構へを一々説明したが、實際の組手の時は攻手も受手も構へは自由でよい。よく間合を計り敵の動作を未發に察して上段から來ても下段へ變つても躱せる様に研究して置かなければならぬ。



# 第五編 女子護身術

## 第一章 女子護身術の意義

**女子護身術の目的** 武術といふものは元來他を攻擊するといふよりも、身を護り敵を防ぐのが目的であるが、女子のそれにあつては殊に然りである。體力の繊弱な女子が暴漢に襲はれた場合、たゞ力を以て爭つたのでは、到底其の魔手を免れる事は不可能である。其の様な場合、護身術の心得がありさへすれば、容易に危急を脱し得るものであるから、是非共不斷に其の素養を作つて置かれたい。

たゞ女子の護身術は、男子の場合と異なり、比較的繊弱な力を以て强大な敵を防がなければならぬのであるから、最も機敏に而も正確に、敵の急所を攻擊するを要する。それにはやはり平素練習して置かぬと、いざといふ時になつて氣おくれがしたり、或は慌てたりして、却つて危險を増す様な事になるかも知れない。

こゝに述べる女子護身術は、組手を應用して、女子が最も遭遇する事の多い種々の場合における護身法を示したもので、これによつて平素練習を積まれると、萬一の場合に危急を脱する事が出來るばかりでなく、とかく運動不足になり勝ちな女子にとつて、最も適切な健康法ともなるのであるから、明日からと言はず是非今日只今からでも練習を始めていたゞきたい。

**女子護身術の極意**　「生兵法は大怪我のもと」といふ金言があるが、誠に其の通りで、少しばかり武術の心得があるからと言つて、油斷して輕率な事をすると、却つて取返しのつかぬ失策を演ずる事がある。

護身術の極意といふものは、決して暴漢を倒す事ではなく、暴漢に襲はれる樣な危險を未然に避けるにあるのである。暴漢に狙はれのは、狙はれる方にもどこか隙がある譯で、その隙を作らぬ事が何よりも大事である。夜分の一人歩きを愼む事、已むを得ぬ時は少し廻り道をしても淋しい所は避けて通る樣にし、又外出には必ずズロースを穿く事などは、忘れてはならぬ心掛である。

十分の注意をしてゐながら、それでも運惡く暴漢に襲はれた場合には、まづ逃げるがよい。逃げられるだけ逃げて、近くの家に駈け込むなり、大聲をあげて救ひを求めるのが最も賢明な護身術である。婦人は恥づかしがつて、餘程危險な場合でも聲をあげず、また他人の家に逃げ込むといふ事をしないものであるが、一身の危急の場合にくだらぬ見榮を張ることは愚の骨頂である。

逃げようとしても逃げおほせる事が出來ず、或は逃げる隙もなくて捕へられた時、その時こそ始めて護身術を應用すべきである。然しこの樣な場合でも、最初から敵を攻擊するといふ樣な素振りを見せぬ樣にし、相手に油斷をさせて置いて、突然全身の力を込めて急所に一擊を加へ、敵のひるむ隙に逃げるがよい。

そして暴漢に一擊を加へる場合は、必ず全身の力を集注しないと危險である。その一擊が効を奏しない時は一層相手を兇暴にさせるものであるから、その一擊によつて相手が骨を折られ、或は内出血を起して倒れようとも、少しも意に介することはない。勿論、法律上からも、道德上からも、一向に差支ないのであるから、怪我したらなどといふ心配は一切無用である。必ず思ひ切つて突くなり、蹴るなりすべきである。

**練習法**　さて、護身術の練習法であるが、大體は第三編、第二章練習の心得の條によつて御承知願ひたい。なほ突き方蹴り方等についても、ここでは說明を簡略にしたが、第二編空手の組織について知つて置いていたゞきたい。そして要領は暴漢が我が手、衣服、首、體などを捕へようとした時、或は捕へた時に突嗟に之を外して、敵を攻擊するので、外すのと攻擊するのとは殆んど同時になる位敏速にしなければいけない。こゝにはその外し方と、攻擊法とを分解して說明したが、これは練習する際に分り易いからで、熟練したらなるべく一動作になる位にするがよい。

## 第二章　前　捕

### 第一　片手捕　其の一

敵が前方からイキナリ右手にて我が左手を捕へた時、之を外す方法も、敵を倒す方法も幾通りかある。

第二百七十七圖



片手捕（一）

第二百七十八圖



片手捕（二）

（一）の如くに敵が我が左手を摑んだ瞬間、左手を摑ましたまゝ、我が右手で敵の右手首を摑んで左腰へ引寄せると同時に、（二）の如く右足を飛して敵の金的を蹴上げる。これは捕へられた手を外さず、直ちに積極的に攻勢に出る方法で、實際に臨んでは最も効果の多い技である。我が右手を相手が左手で摑みに來た場合は、これを正反對に左手で敵の左手首を摑んで右腰へ引寄せながら、左足で金的を蹴上げればよいのである

この技の變化として金的を蹴上げずに、敵の向脛を蹴込んでもよい。

また敵が前から右手で我が右手を摑んだ時、或は左手で我が左手を摑んだ時も、前と同じ要領で、敵の足の位置によつて金的なり向脛なりを蹴放せばよい。



## 第二　片手捕　其の二

前の（一）の如き場合、敵が右手でシッカリと我が左手を摑んで力に任せて引き寄せようとした時には、之に抵抗して引張つても女の力では敵する筈がないから、引くと見せて素早く腰を落し乍ら左足を敵の右足の外側に踏込みざま、左拳を握つたまゝ我が右肩に引く樣にして（斯くすれば我が左手首を摑んだ敵の右手は自然に解けるものである）、左肘を突出して敵の右脇下へ思ひ切り肘鐵砲を喰はし、同時に右手で金的を撃つ（金的を攻撃するには下から叩き上げる樣に打つか、握り潰す積りで摑むかしなければ効果が薄い）。

## 第三　片手捕　其の三

前の（一）と反對に、敵が左手で我が右手を摑んで引寄せようとした時、其の二と左右正反對の動作で脇下と金的を攻撃してもよいが、又次の如くも出來る。

引き合ふ樣に見せて素早く右足を敵の左足の外側に踏込むと同時に、摑まれた右拳を我が左肩に引いて敵の左手を外し（こゝまでは其の二と正反對の動作である）、我が左手で敵の左手首を摑んで引くと同時に、右裏手で敵の両眼を發止と撃ち（或は裏拳で人中を打つてもよい）、敵の目を眩まし突飛して置いて逃げるのである。

或は摑まれた右手を外して、左手で敵の左手首を取つて引くと同時に、右手で敵の金的を摑んでもよく、右肘で脇下を突いてもよい。

### 第四　片手捕　其の四

敵が両手で我が右手首を摑んだ時はどうすればよいか。大の男が女の片手を両手で捕へる等といふことは滅多にない事であるが、萬一の場合の用意として知つて置く方がよい。

敵の両手にまだ十分力が入つてゐない間なら、右拳を固めて力まかせに下へ、敵の金的めがけて押込む様にしても外れるし（この時は金的を攻撃する積りで動作しなければいけない）、或は右足を敵の両足の間に入れ、素早く腰を落して、肘で敵の金的を當てる積りで、右肘を突出し（これで完全に外れるものである）。次の瞬間右拳で敵の下顎を突上げる。

敵の両手に十分力が入つて仕舞つては片手だけの力では動き難いから、其の時は我が右拳の先へ左掌を添へ右肘を突き出す様な心持で右拳を左肩の方に引寄せる（これで敵の左手が外れる）や否や、右拳を甲が下になる様に右に振り（これで敵の右手も外れる）。次の瞬間右拳で敵の顔面に一撃を加へる。

左手を敵が両手で捕へた時も同じ要領でよいが、實際に臨んでは敵の手を外さうと考へてゐるよりも、今一方の手を敵の手首にかけて引寄せざま、右足（彼我の姿勢如何によつて左足を用ゐてもよい）にて敵の金的又は向脛を蹴上げた方が効果が多い様である。

### 第五　両手捕

前方から敵が両手で、我が両手を捕へた時は、我が両掌をピッタリ合はせて、拝む時の様な形で、両手の指先で敵の下顎又は顔面を突上げる様に両腕を伸せば外れる。

或は右肘を前へ突出す様にして右拳を引く（これで右手を捕へた敵の左手は外れる）や否や、左手で敵の左手首を摑み（我が左手首を敵の右手で取らせたまゝ）同時に右裏拳で敵の人中を攻撃する。

或は両手首を敵に摑ませたまゝ、グイと引寄せて右足（又は左足でもよい）を飛ばして敵の金的を蹴放してもよい。

第二百七十九圖



前髪捕（一）

第二百八十圖



前髪捕（二）

## 第六　前髪捕

前方から暴漢が（一）の如く我が前髪を攫んで引倒さうとした場合、之に抗へば却つて身の自由を失ふから引くまゝに引かせながら、左足（彼我の姿勢によつて右足を出してもよい）、一歩踏込むと同時に、（二）の如く身を捻る様にして、右拳で敵の人中を突き、左拳で水月（或は丹田又は金的でもよい）を攻撃する。左右同時に突出す様に練習せよ。





## 第七　抱捕

前方から暴漢が突然抱きついて來た時は如何にすればよいか。これは實際には往々例のある事であるから十分に心得てゐるとよい。

まだ抱き付かれない前、即ち抱き付かうとして兩手を擴げて飛かゝつて來た時なら、右拳で眞正面から水月を突くか、或は下顎を突上げてもよし、二本貫手で兩眼を攻撃してもよし、右足一歩踏出し腰を落しざま右肘を突出して水月を當て、續いて右裏拳で人中を打つてもよし、或は一歩退いて更に追ひ縋つて來るところを足をあげて金的を蹴放してもよい。

もし、その隙がなく抱付かれた時も、相手が我が兩腕の上から抱きしめて來たらばそのまゝ右手（或は左手でもよい）を伸ばして敵の金的を打つか、攫むのが最もよい。

敵が我が兩手の下、即ち脇下から背へかけて兩腕を廻して抱きしめて來たら、我が兩手は自由なのであるから、兩手に中高一本拳を作つて、敵の兩米嚙（霞と名づける急所）を力まかせに挾み撃てば、一堪りもなく目が眩んで倒れて仕舞ふ。

# 第三章　横捕

## 第一　片手捕

横から暴漢が現はれて、突然我が右手首を捕へたとする。この場合は身を捻りさへすれば、前捕と全く同じ姿勢となる譯であるから、前捕の要領で防げばよいのである。

敵が右手で我が右手首を摑んだ時は、右手を摑ませたまゝ我が左手を敵の右手首にかけて右拳と共に左腰へ引き寄せると同時に、右足にて金的(又は向脛)を蹴放す。

或は右手首を摑ませたまゝ、右手を右に引き、同時に左足を敵の右足外側に踏込んで左拳で脇下を突く。

敵が左手で我が右手首を摑んだ時は、右肘を突出す心持で右拳を左腰に引き(これで敵の左手は外れる)、我が左手で敵の左手首を摑むと同時に、右足一歩踏出して右裏拳で敵の人中を一撃する。

左手を摑まれた時も、これと同じ要領で防げる。

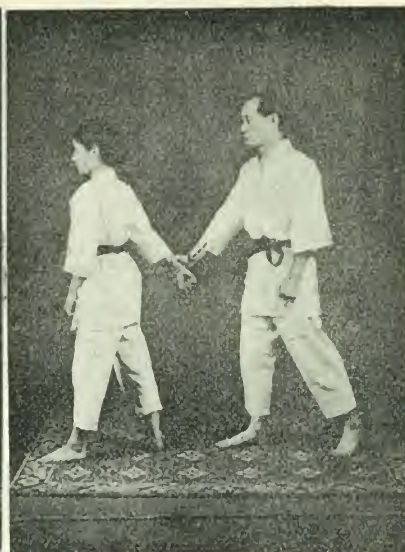
## 第二　首捕

暴漢が突然横から首を抱へ込んで引寄せようとした時、この時は敵の脇下が全く空いてゐるから、右でも左でも、敵に近い方の肘で思ひ切り敵の脇腹を突くのが一番よい。纎弱な女の力でも肘鐵砲で思ひ切り突けば、大抵の男は一堪りもなく參つてしまふものであるから、この練習を十分にして置くとよい。





第二百八十一圖



片手捕(一)

第二百八十二圖



片手捕(二)

# 第四章　後捕

## 第一　片手捕

後方から突然暴漢が我が片手を摑んだ場合、後を振り返りさへすれば、前捕と全く同じ體勢となるから、前捕または横捕の要領で防げばよいのであるが、此處には少し變つた技を説明して見よう。

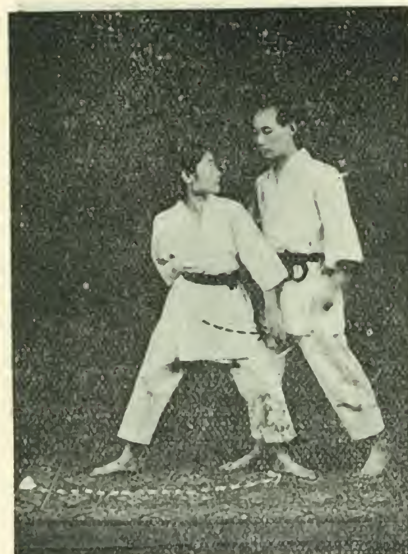
(一)の如く敵が右手で我が右手首を摑んで捻ぢ上げようとした瞬間、右手は敵の捻ぢるに委せて、左足を一歩退くと同時に、(二)の如く左肘にて敵の水月を當てる。

第二百八十三圖



襟捕（一）

第二百八十四圖



襟捕（二）

## 第二　襟捕

後方から（一）の如く暴漢が襟を摑んで引倒さうとした場合、引かれるまゝに左足を一歩退くと同時に、左手を以て（二）の如く敵の金的を攻撃する。

敵が腕をグッと伸ばして我を近づけまいとした時は襟を取らしたまゝ腰を落してクルリと後を振り向きながら、足をあげて金的又は向脛を蹴放す。

或は襟を取らしたまゝ右へ上體を捻ると同時に、右裏拳、又は右手首を以て伸び切つた敵の右肘關節を打ち折ることも出來る。

## 第三　抱捕

暴漢が突然後方から抱きついて來た場合、これも實際あり得る例であるから、よく心得て置かなければいけない。

敵が我が兩肘の上から抱きしめて、兩手が自由にならぬ時は、襟捕の（二）の場合と同じく、少し左へ身を捻る樣にして左手（或は身を右へ捻つて右手を用ひてもよい）で敵の金的を摑むか、打つかすればよい。

或は後に說明する前後捕の場合と同じく、サッと身を沈めると同時に、グッと左右に肘を張りながら上體を右へ捻つて、右肘で敵の水月を突く。腰を落すと同時に、兩肘を張れば敵の手は自然に外れてしまふものである。

もし、敵が我が腕の下、卽ち脇の下から胸へ兩腕を廻して抱きしめた時は、一本拳で敵の手甲の中央を力一杯發止と打てばよい。

或は敵の手の人示指でも中指でも、とにかく、一本の指をグッと握りしめ、他の手を添へて逆に折つてしまつてもよい。

第二百八十五圖



左右捕（一）

第二百八十六圖



左右捕（二）

# 第五章　二人捕

## 第一　左右捕

これは二人の敵が左右から同時に兩手を掴んで來た時の防ぎ方である。

かういふ場合も實際には滅多にあるものではないが、たとへ、あつても、今までに述べた前捕・横捕・後捕などの技に熟練さへ積んでゐれば一向に驚くに當らぬものである。

（一）の如く左右から同時に二人に兩手を捕へられた時、素早く（二）の如く、兩肘をグッと曲げて右方の敵に向直るや否や、右足を飛して金的を蹴上げ、我が右手首を掴んだ敵の左手を振放しざま（實際には右肘を曲げたまゝ左方の敵の方へ向直るときに自然に敵の左手は外れる）、





第二百八十七圖



左右捕（三）

第二百八十八圖



左右捕（四）

（三）の如く、左廻りに右足を左方の敵の前に踏出すと同時に、右猿臂にて水月を當て（此の時我が左手は敵に掴ませたまゝ左腰に引つける）次の瞬間（四）の如く、右裏拳にて人中を一撃する。

圖で示すと以上の通り大部長い説明を要するが、熟練すれば、これだけの動作をホンの一瞬間、目ばたきする程の間に爲す事が出來るやうになる。そして敵が多勢の時は我が動作は早ければ早いほど效果があるといふことも忘れてはならない。

## 第二　前後捕

突然二名の暴漢が前後から組付いて來て、一人が後から（一）の如く兩肘の上から抱きすくめ、一人が前から兩手で襟を取つて來た時、先づ（二）の如く、前の敵の袖を掴んで引きながら（これは敵の體を崩すのと我が足を取られぬ爲に敵の手を牽制する意味も含んでゐる、右足



第二百八十九圖　前後捕（一）



第二百九十圖　前後捕（二）



第二百九十一圖　前後捕（三）

を飛ばして金的を蹴上げるや否や、サッと身を沈めると同時に(三)の如く、體を右へ捻りながら右肘で後の敵の水月を當て、左肘はグッと張つて突上げる（腰を落すと同時に肘を張れば、抱きしめた敵の手は自ら外れてしまふ）。

# 第六編　人體急所

## 第一章　急所とは何か

空手を學ぶ者は必ず急所を知つて居なければならない。例へば、同じ力で相手の顔面を攻撃しても、急所と、さうでない所とでは非常に效果が違ふ。つまり急所とは「比較的打撃の有效なる部位」を稱する譯である。「灸所は急所」で、古來、灸點に於て謂はゆる「つぼ」と稱せられるところは殆んど急所である。つまり神經を最も刺戟し易い部分は悉く急所になる譯である。だから、大體において、古來の空手や柔道の急所と灸點の「つぼ」とは一致してゐる。たゞ其の中でも比較的攻撃するに困難な部分や、效果の薄い所は空手や柔道の方では急所としてゐない樣である。これは目的が違ふのだから致し方があるまい。

然しながら空手に於ては、柔道の急所や點灸の「つぼ」以外にも急所とする所がかなりある。二本貫手で眼球を突いたり、足で下顎を蹴上げたり、また拳で突き上げたり(これは拳鬪の方では屢々用ひられる)するのがその著しい例である。

尚解説の部に「死因」「倒因」としてあるが、これは極めて強く當る時は死に至る部分と、強く當るも生命に別條のない部分とを區別したものであるが、固よりこれはそれほど確然とした區別のある譯ではなく、たと

へ、「死所といはれる水月を突いても、突く力が弱ければ倒れるだけの事もあり、更に力が弱ければ倒す事すら出來ぬこともある。また一般には急所とされてゐない胸部、腹部でも、非常に鍛錬された拳で突かれる時は內出血を起して死に至ることがないでもない。要するに、急所といふも「比較的打擊の有効なる部位」に過ぎないのである。

また單に突く力の强弱のみでなく、突かれる方の體の虛實、及び鍛錬によつて、普通ならば致死に値する程の打擊を受けても、立派に堪へ得るものである。試みに十分に鍛へられた力士の胸部を見よ。鐵の如く張り切つたあの胸部は、普通人の拳で突いた位では恐らく左程にこたへまいと思はれる。

私の恩師糸洲先生などは、全身恰も鐵壁の如くで、酒興の上でよく若い者が拳を固めて先生の前後から突いたりした事があつたが、先生は何らの痛痒も感ぜられぬ如く、莞爾として盃を銜んで居られた。人間の身體といふものは、修業によつてかくの如く鍛へ得るものであるから、空手を學ぶ者も、不斷の努力によつて手足の打擊力を養成すると共に、文字通り鐵石の如き身體を鍛錬せられたい。

## 第二章　急所解說

名稱はなるべく一般に廣く用ひられてゐるものを取つたが、古來、別に名稱を付してないものは、便宜上命名したものもある。別名及び俗稱は括孤內に記して置いた。

死因及び倒因は、實際に試みる譯にゆかぬので、古來の傳書や口傳に依つたが、少くも從來の類書に比して十分に信憑するに足るものと確信する。

### 第一　前面上段急所

**○天　道**（大陽・日角・天尖穴・聖門）

頭頂、即ち前頭骨と左右顱頂骨との縫合部である。死因は大腦を激震し、腦神經を刺激するため、感覺・運動の兩機能を失ふによる

**○天　倒**（俗稱　ひよめき・おどりこ）

幼兒の折に脈を打つ所で、天頭と前額との間、即ち前頭骨部である。

死因は腦髓震盪し、腦神經を强く刺激する爲である。

**○霞**（橫門・こめかみ）

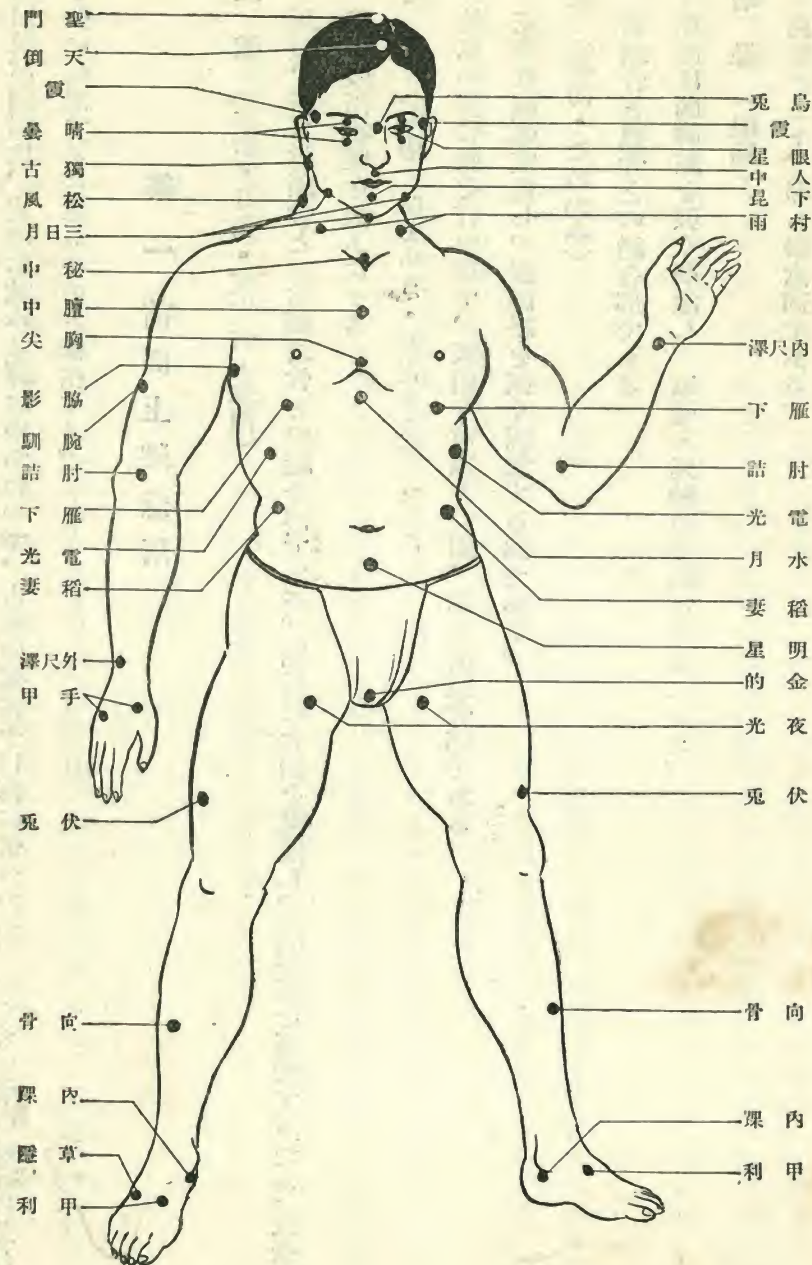
前頭骨と觀骨との縫合部である。

死因は腦神經を强く刺激し、感覺・運動の機能を失ふによる。

**○晴　曇**（眼窩）

兩眼の上下、即ち眼窩部である。

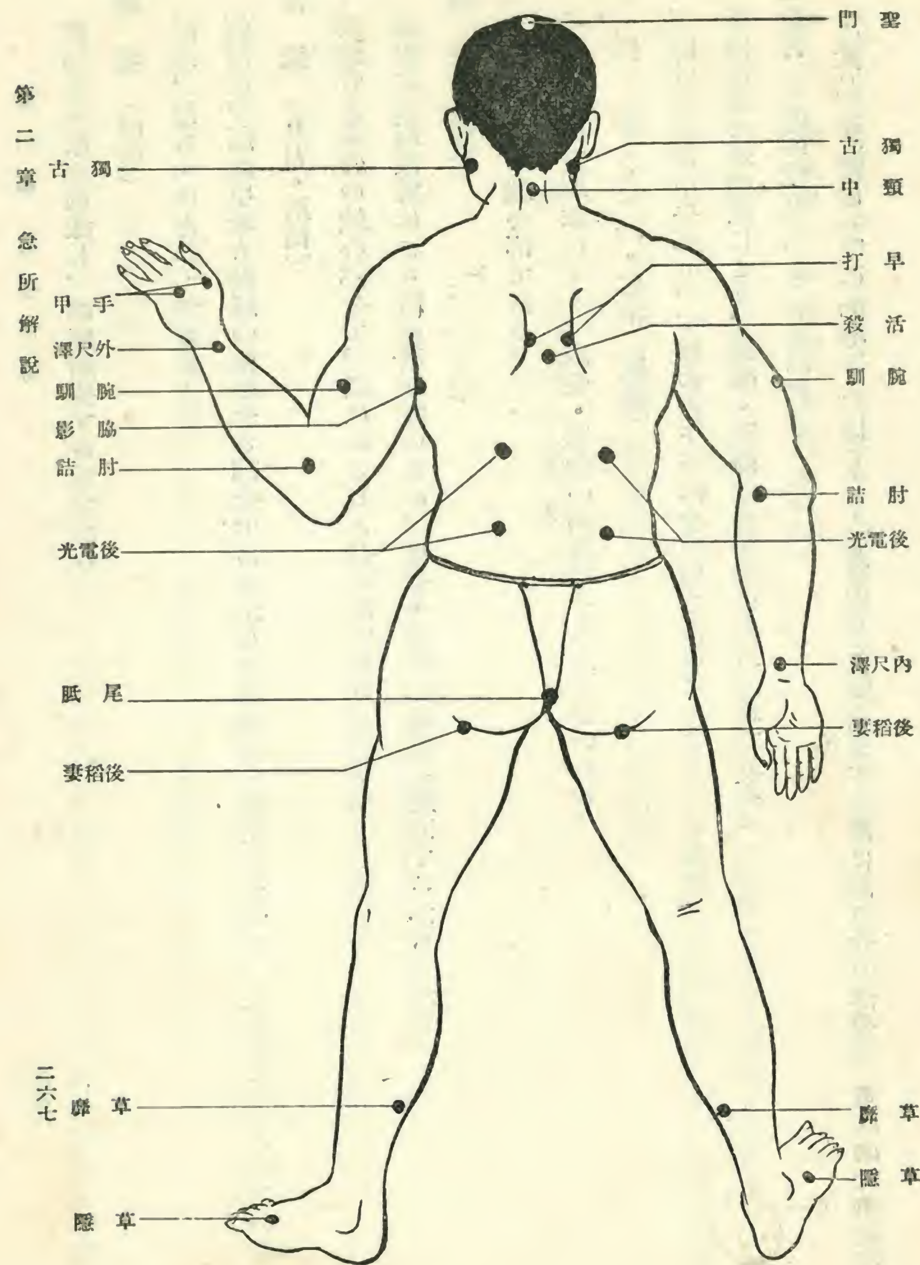
第二百九十二圖 人體急所（前面）








第二百九十三圖 人體急所（背面）



倒因は大腦を刺激し、神經錯擾する爲である。

○眼　星（眼睛）

眼球、卽ち「ひとみ」である。

倒因は、顔面中最も神經の輻輳せる部分であるから神經錯擾と激痛とを覺え、且視覺を失ふ爲である。

○烏　兎（日月・眉間）

前頭骨と鼻骨の縫合部分で、謂はゆる目と鼻の間である。

死因は大腦激震による腦神經刺激のため、感覺・運動の機能を絶止するからである。

○人　中（溝道）

左右上顎骨の縫合部である。

死因は腦神經刺激により、感覺・運動の兩機能を失ふが爲である。

○下　昆（髣下・下民・俗稱　頤溝）

下頤骨の前面中央部分、下唇の直下五六分の所である。

死因は腦神經刺激により、感覺・運動の兩機能を失ふが爲である。

○三日月（拳闘の方で、チン及びヂョーと呼ぶ）

下顎骨の下端（卽ち顎の先端）と、同じく下顎骨の左右端（兩耳下の前にある骨の部分）、これは古來柔道の方では流儀によつて急所になつてゐない所であるが、空手ではよく用ひられる急所である。

倒因は大腦震盪による神經錯擾の爲である。

〔註〕以上顔面の急所は、何れも腦神經（腦神經は嗅・視・動眼・滑車・三叉・外旋・顔面・聽・舌咽・迷走・副・舌下の十二對あつて、各特殊の機能を有する）を錯擾して其の機能を失ふが爲に昏倒するに至るのであるが、其の外に動脈刺激をも伴なふものである。

## 第二　前面中段急所

○松　風（風月）

頸の側面、潤頸筋と胸鎖乳頭筋との交叉する部分で、卽ち頸動脈を打つのである。

死因は總頸動脈、迷走神經を刺激するため、血行激變と知覺運動との機能を失ふがためである。

○村　雨（襟下）

頸の前側面、鎖骨の直上、胸鎖骨乳頭筋起始の外側である。

死因は鎖骨下動脈舌下神經を刺激するため、血行激變して運動機能を失ふが爲である。

○秘　中（肢中・喉笛・喉佛）

頸の正面、舌骨と胸骨上端との中間の凹所である。死因は氣管を壓迫することにより呼吸閉塞するが爲

である。

**○膻中**（胸中）

胸骨の把柄と胸骨體との軟骨聯合部の直下、即ち胸骨體の前面上端部である。

倒因は、心臟・氣管枝・上行大動脈・肺動脈を刺激して呼吸器の故障を起し、同時に血行を激變する爲である。

**○胸尖**（脆骨）

胸骨の下端部、即ち劍狀突起の所。

倒因は肝臟・胃臟・心臟の激震によつて血行激變し、神經錯擾して運動作用を失ふが爲である。

**○水月**（心谷・鳩尾・みぞおち）

胸骨の直下の凹處である。

死因は肝臟・胃臟を劇衝するため、激動を上下に及ぼし、內臟全部の諸神經を刺激し、其の機能を失ふためである。

**○明星**（渦中・氣海・丹田）

臍下約一寸の部分をいふ。

死因は小腸及び膀胱の劇衝により、腹部大動脈及び神經を刺激し、血行激變と共に運動感覺の機能を失ふが爲である。

**○脇陰**（扇骨）

脇の下部に位し、第四肋骨と第五肋骨との間である。死因は肺臟を劇衝し、動脈神經を刺激するため、肺の機能を停止し、呼吸・血行を絶止するによる。

**○雁下**（雁中）

兩乳の下部である。第五肋骨と第六肋骨との間にあたるところ。

死因は脇陰と同じく、肺臟の機能を停止し、呼吸・血行を絶止するためである。

**○電光**（月影・脇腹）

上腹部の前側面、第七肋骨と第八肋骨との間にあたる。

死因は左右によつて異なる。

右電光の時は、肝臟の劇衝により肺臟を刺激し、兩臟の神經機能を失ふためである。

左電光の時は、胃臟及び脾臟の劇衝により、肺臟及び心臟を刺激し、其の神經機能を失ふによる。

**○稻妻**（月影）

上腹部の前側面、第十一、第十二浮肋部遊離下端にあたる。死因は左右によつて異り、大體電光の場合と同様である。

〔註〕 右の胸腹部の急所は、何れも內臟の激衝によつて、脊髓神經、交感神經の刺激が腦神經に及ぼし、知覺・運動の作用を失ひ、呼吸を絶止する爲である。

因みに頭部の急所は、知覺運動の作用は失つても、呼吸を絶止せぬことがある。

**○內尺澤** (小捕・脈所)

手首際の前面、撓腕屈筋と膊撓筋の間。

倒因は、撓骨動脈、撓骨神經の刺激により胸頸部に亘つて堪へ難い異樣の苦痛を感じ、運動作用を失ふ爲である。

**○手甲** (合谷)

手甲の中央、拇指(第一掌骨)と次指(第二掌骨)との間をいふ。

倒因は、正中神經の刺激により胸頸部に亘つて異樣の苦痛を覺え、運動作用を失ふ爲である。

尙掌骨間は何れを打つても大體右と同じ樣な效果を奏するものであると心得てよい。

## 第三 前面下段急所

**○夜光** (中部・俗稱前股)

太腿上部の前內側面、恥骨筋の部分。

倒因は、股動脈、股神經、閉鎖神經を刺激する爲、腰腹部に亘つて堪へ難い異樣の苦痛を感じ、運動作用を失ふからである。

**○伏兎** (潛龍・長光)

太腿下部の前外側面。外股筋の中央。

倒因は太腿部に筋肉痙攣を起し、下腹部に亘つて苦痛を感じ、下肢の運動作用を失ふ爲である。

**○內踝** (距脚・內黑節)

普通に內黑節といへば脛骨の下端を指すが、當身の內踝は醫學上のそれと異なり、正しくいへば跗骨內側面、卽ち內黑節の直下である。

倒因は、後脛骨動脈、及び脛骨神經を刺激して、腰部に異樣の苦痛を覺え、運動作用を失ふためである。

**○甲利** (高利足・地虛・足の甲)

足背の中央より稍々內側に倚つた所、短拇伸筋腱と、次趾伸筋腱との間、卽ち骨間筋の所である。

倒因は、內足蹠神經、及び前脛骨動脈深腓骨神經を刺激する爲、足部から腰腹部にかけて異樣の苦痛を感じ、運動作用を失ふ爲である。

**○草隱** (臨泣)

足背の中央より稍外側に倚つた所、第四、第五蹠骨接合部の前にあたる。倒因は大體甲利と同樣である。

**○向骨**（向脛）

腓骨の中央、謂はゆる向ふ脛である。

倒因は、腓骨神經を刺激するため激痛に堪へずして倒れるのである。

**○金的**（釣鐘・陰嚢・睾丸）

死因は睾丸神經・會陰神經・精系動脈・會陰動脈などを刺激するため、睾丸釣り上り、運動・感覺の機能を失ひ、呼吸を絶止する爲である。

## 第四　後面上段急所

**○獨古**（耳果・徳古）

耳の後部直下の稍々凹んだ所。卽ち二復筋の部分である。

倒因は、腦神經・脊髓神經を刺激し、感覺・運動の作用を失ふが爲である。

**○頸中**（動元・ぼんのくぼ）

頸の後方中央部、卽ち第三頸椎と第四頸椎との間。

死因は大腦激震し、腦脊髓神經を刺激するため、知覺運動の機能を失ふによる。



## 第五　後面中段急所

**○早打**（安下）

第三肋骨と第四肋骨との間、肩甲骨の內側に接する部分。

死因は肺臟の激震、脊髓神經の刺戟による呼吸血行の障害と共に運動作用を失ふが爲である。

**○活殺**（活所）

脊柱の第五節と第六節との間。

死因は、脊髓神經を刺戟し、下行大動脈・心臟・肺臟を激震するため、運動・感覺の機能を失ひ、呼吸を絶止するによる。

脊柱第九節の左右及び第十一節の左右をいふ。

第九節の左右を俗に癪活電光と稱して、此處を拇指で強く押すと癪を治する效があるといはれてゐる。が併し、當身としては第十一節の左右（卽ち第十一肋骨と第十二浮肋骨との間）の方が效果がある。

死因は腎臟の激衝により、其の神經動脈を刺戟し、血行の激と共に運動作用を失ふが爲である。

**○尾骶**（下經、俗稱龜の尾）

○後電光

背柱の最下端卽ち、尾骶骨の部分。

死因は全髓脊神經を激震し、大腦に刺激を及ぼし、運動・感覺の兩作用を失ふ爲である。

○腕　馴（膊拆）

上膊後側の中央部、二頭膊筋と三頭膊筋との間を指す。

倒因は尺骨神經、正中神經、上膊動靜脈を刺激するため、胸部、頸部に亘つて一種異樣の苦痛を覺え、運動作用を失ふ爲である。

○肘　詰（鶖嘴）

肘の外側、即ち肘關節部の尺骨端の外側である。

倒因は、尺骨神經を刺激するため胸部、頸部に異樣の苦痛を覺え、運動作用を失ふによる。

○外尺澤（小補）

手首際の背面中央部、總指伸筋と尺腕伸筋との間、卽ち撓骨端と尺骨端との間。

倒因は、正中神經を刺激するため、肘詰と同樣、運動作用を失ふによる。

## 第六　後面下段急所

○後稻妻（臀下）

太腿後側の上部中央。卽ち大臀筋の直下、股二筋と半腱樣筋との間（重なり目）のところ。

倒因は、坐骨神經を刺激するため腰腹部に異樣の苦痛を覺え、運動作用を失ふによる。

○草　靡（刈當、俗稱　腓下）

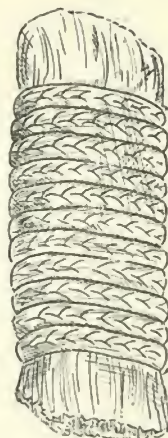
下腿後面の中央部、卽ち腓腸筋の下部である。

倒因は、脛骨神經及び後脛骨動脈の刺激により、腰腹部に異樣の苦痛を感じ、運動作用を失ふ爲である。

# 附錄一　巻藁の作り方

## 第一　立巻藁

第二百九十四圖




藁　巻（長さ約一尺二寸　巾約三寸五分）

第二百九十五圖




巻藁の蓋（高サ一尺三寸）

空手に於て拳や足を鍛練するには、主として巻藁を用ゐる。型や組手を練習して其技を練ると同時に、常に巻藁によつて手足を鍛へる事が大事である。

巻藁を作るには、藁を束ねて上圖の如く、長さ一尺二寸位、巾三寸五分位、厚さ二三寸位の大きさにして、紐で大體の形を整へて縛つて置き、それを藁縄でシッカリと巻いてゆく。藁縄はなるべく太いものを選び、木鎚か何かで叩いて少し平らたくして置く方がよい。

柱は長さ七尺五寸位、三寸五分角位のものを選んで地下約三尺位を埋め、地上に四尺五寸位残して立てる。尤も身長によつて多少の加減あるべきは勿論の事である。地下に埋める部分はコールタールを塗るか、或は燒

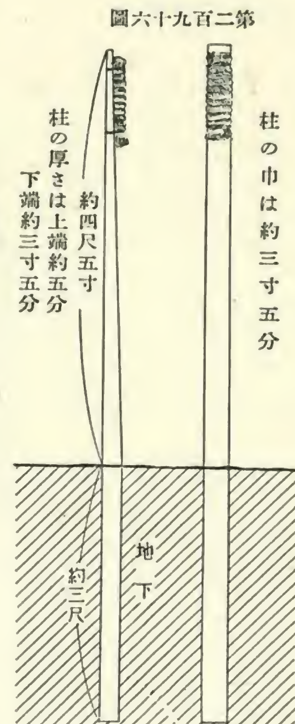
いて表面を焦がして置くと腐蝕することがなくてよい。

地上に出る部分は、上部に行くほど段々に薄くして、上端は五分位にする。斯うすると、突く時に彈力があるから、骨を傷める心配がな。い而して柱の上端から一寸位下げて圖に示した様に巻藁を縛りつけるがよい。

なほ空地の十分にない場合は、縁先、及び窓際に面して巻藁を立て、廊下に立つたまゝで突ける様に作るのも一方法である。

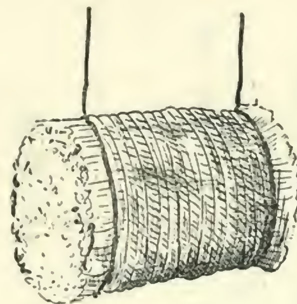
巻藁は雨に逢ふと腐り易いから、使用しない時は第二九五圖に示した様な箱を、板或はトタンで作つて上からスッポリとかぶせて置く様にするがよい。

第二百九十六圖



立巻藁

第二百九十七圖


提巻藁（長さ約二尺、直徑約一尺）



## 第二　提巻藁

提巻藁（第二九七圖參照）は藁を長さ二尺位に揃へて切り、之を直徑凡そ一尺程の太さに束ねて麻紐で括り、その上へ藁繩を巻きつけてゆく、重さは三貫目内外のが普通である。恰も弓術の方で用ひる巻藁の形と思へばよい。之を兩端を麻繩で縛り、凡そ胸の高さに吊して突くのである。

# 附錄 その二　空手說林

## 國民教化の良資料

陸軍少將　岡　千賀松

琉球に空手術なるものあるを聞くや久し、偶々今度琉球武術會長　富名腰義珍君東上せらるゝあり、親しく其技を見るを得たり。

「モルトゲ」元帥曰く「永遠の平和は南柯の一夢のみ、而して快夢にあらざるなり。戰爭は神より授けられたる世界整頓の原則なり」と。今や各國は大戰の後を承け、人力の最大最善を盡して、世界の整頓に任じ、人文の開發に努力しつゝあり。

人類は永遠に存し、無限に向上す。過去の歷史は時に暗影なきにあらざるも、發展の實在なり。戰爭を一期として隔段なる進步を表はせり。過去に於て然り、現在亦然らざるべからざるなり。而して人類の發展は士道を充實し、健全なる身體を有する國民に依りてのみ行はる。

戰後に於ける整頓の事業中最大なるものは國民教化の問題なり。如何にして善良なる父母を作り、善良な

る子孫を殘すべきか。武勇的精神の發揮、頑健にして持久力ある身體の養成、而して秩序あり節制ある活動力に富む國民の教化。彼の「ジャン・バウロー」氏の「雅典の執政は賢明なり、實に青年は國家將來の元氣なり」とは現代國民教化の精神ならずんばあらず。

空手術たる、技の構成、術の演練、悉く現代國民教化の良資料たり。簡にして行ひ易く、深くして變化に富む、以て精神を陶冶し得べく、身體を練成し得べし、實に活動的國民を作る良教材とす。今日迄汎く行はるゝに至らざりしは洵に遺憾なり。蓋し傳へざりしが爲のみ。

富名腰君現代の時勢に鑑み、廣く之を世に開示せんとす。斯道の爲め益する所大なるは勿論、又以て戰後に於ける我國民教化の良資料を提供したるものと謂ふべし。希くば益々之が普及を圖り、汎く世に行はるゝに至り、國民の元氣を發揚し、世界的活動に處し得る國民教化の資たらしめんことを。

# 空手道の眞價

陸軍大佐　田頭朝一

私は今回日本醫科大學の空手研究會に直接緊密なる關係を持つことゝなつたのであるが、不幸にして未だ空手に關する知識もなければ、又體驗も皆無である。從つて今後何等の貢献を齎し得ないことを憂慮してゐるのである。然しながら、空手は單に護身術として極めて價値あるのみでなく、心身の修養上に偉大なる效果のあることを痛切に感得してゐる者である。以上空手を研究する人々の心身修養の一助に資する爲め、其所以を簡單に摘記して參考に供したいと思ふ。

私は嘗て第六師團に軍職を奉じて居つた時に、沖繩縣出身の下士官及び兵の陸軍々人としての成績就中實戰場裡に於ける勇敢なる行動や功績の狀態につき、稍仔細に研究して見たことがある。勿論多くの人々についての觀察であるから、各種各樣で共間全員に共通せる特質を捕捉することは困難であつたが、研究の結果を極く簡單に表明して見ると次ぎの通りである。

一、沖繩縣の下士官及び兵は一般に寡默沈毅、物事に動ぜず屈せず、唯默々として一意任務に邁進するの美風を有してゐる。從つて平時の勤務に於て談論風發慧敏躍如たる慨はないけれども、多くのものは克く最後の勝利を占めて、優良なる下士官及び兵となつて立派に鄕里に錦を飾つてゐる。

二、日露戰役や濟南出動に於ける實戰場裡の行動を具に觀察するに、沖繩兵の特長を最も有效に物語つて居る。即ち沖繩出身兵は敵情の偵察や、通報々告と云ふが如き花々しい仕事には顯著なる行動を見ることは少ないが、戰鬪が開始せられ、劍電彈雨阿鼻叫喚の慘狀を呈するに及んで、勇躍奮進常に陣頭に進んで戰鬪に從ひ、軍人の龜鑑とするに足る働きをした者が多い。殊に目立て立派に思ふのは敵陣に突入後益々其の力量を發揮し、累々たる屍を越え、血河を渉つて接戰格鬪、悲慘なる白兵戰場に赫々たる偉勳を樹てた者の特に多き一事である。

以上は單に軍人の立場より見たる沖繩縣下壯丁の半面の觀察に過ぎないけれども、此事實に立脚して左の如き結論を見出すことが出來ると思ふ。即ち平戰兩時に於ける沖繩縣出身兵の行動は、終始一貫不屈不撓、成就せなければ已ない信念を堅持し居ること丶、特に死地に入りてなほ從容內に恃む所ある修養を體得して居る事である。此尊き修養、確乎たる信念は果して何に依りて結成せられたのであらうか、之れ吾人の最も知らんと欲する所である。古來沖繩には內地の如き敬神歸佛の風は隆昌でない。又劍道に依る修業も未だ普及してゐない。唯全縣下を通じて男子は元より、婦女子に至るまでもよく徹底してゐる空手の修養練磨の有樣は、眞に見事で光彩陸離たるものがある。私は如上の沖繩縣下の壯丁の共有する立派な特長は、大部分この空手道の練磨により不知不識の間に結成せられたものであることを確信し、大いに斯術の效果を天下に唱導したいと思ふものである。

# 徒手空拳の大武術

文學士　東恩納寬淳

所謂徒手空拳の武術が、沖繩に本來存在してゐたか否かと云ふ事は、今俄かに速斷は出來ない。けれども武術發達の徑路から考へて見ると、攻擊又は防衞の爲めには、何等かの武器に便るのが本始であつて、武器なしに、其の目的を達しやうと云ふのは、餘程思想の進んだ後の事であらねばならぬ。少くとも、武術と云ふものが消極的に、精神の修養、又は身體の鍛練等と云ふ第二義的に考へられて來た以後の事と思ふ。

慶長以前沖繩各地に武器の使用されてゐた事は歷史上明確な事實で、現に尙眞王の頌德碑（明正德四年建立、百浦添欄干銘）にも（刀劍弓矢以爲護國之利器）とある、尤も武器が行はれてゐたからと云ふて、徒手の武術が全然存在しなかつたとは無論云へないが、國防の外に個人の護身用としても、武器を携帶する風のあつた事は、寬文十年（慶長役後約六十一年）平等所の廻文に次のやうなものがあるのでも想像出來る。

覺

一、正月十六日夜、燈爐見物に棒刀持或は覆面仕候儀從前々御法度被仰付候へ共爲念堅橫目被仰付置候若相背者於有之者捕可致披露旨被仰付候間燈爐見物仕候者能々其心得可爲事候

一、夜行ニ棒刀持候儀從前々御法度被仰付候處隱々相背者風聞ニ付堅御法度被仰付候事

戌正月十三日　平等之側

平等之大屋子

此の廻文等に依つて、少くとも、公にも私にも、武器を携帯する風の他動的になくなつた事は知られる。空手の發達をそれ以後の事と斷定するのは早計ではないと思ふ。

空手の由來に關しては、自分はこれまで深く調査した事はないが、支那傳來のものである事は、その各種の名稱からでも斷言出來ると思ふ。然らば何時代に傳來したか、之れも各武術者の系譜等に據つて穿鑿すれば或程度まで確める事が出來やうが、今はその便がない。それで大體から推して自分は慶長以後の事と考へる。それは前に云ふた武器廢止の事と、今一つは支那使節の側からの觀察とに依つてゞある。明朝以後支那政府の琉球統治策は專ら文教を以て風化する事を主眼として居た。恰度武家時代以後、日本の文事外交が僧侶の手に移つた爲めに「念其俗佞佛、可以西方教誘之也」と云ふたのと同一筆法で、琉球に對しては、專ら儒教を以て臨み、冊封使節も文臣を以て任命して來たのである。然るに、文祿以後秀吉の威武海の內外に振ふに至りて、支那政府の方針が一變し、慶長四年尙寧王が鄭導等を遣はして、冊封を請うた時に、神宗は勅して、從來會典に定むる所の文臣派遣の例を改め廉勇の武臣を使する事を命じたのである。して見ると、冊封使節の一行に依つて支那の武術が傳へられたとすると、慶長以後武臣派遣の慣例となつてからと見る方が至當ではないか。

大島筆記に傳へてある、公相君と云ふのが如何なる人物であつたか、今調べが付かないが、之れを「クーシャンクー」と發音して居るのから見ると、元祿十一年大嶺親方が支那から將來した、土地君（農神）を今「ドーチークー」と發音して居るのから類推して、淸朝以後ではないかと思ふ。

併し、其の傳來の事情如何は、空手其のものの內容に左程問題とはならないのである。武備を有しない奇蹟を以て、孤島の那翁をすら驚かした琉球に、安ぞ知らん、徒手空拳の大武備のあつたと云ふ事は、面白い事實である。

自分は豫て、富名腰氏に「カラ手に先手なし」と云ふ話を聞いて感心してゐたが、成程カラ手は、凡て第一手が受手になつてゐる。此の先手なしの一言は、カラ手の性質を述べ盡して餘蘊なきものと思ふ。孔子の所謂「勇有りて義なければ亂す」で古來カラ手の達人は、皆謙讓の士君子であつた。かう云ふ人を沖繩語では武士と云ふのである。古の武士と云ふのは、今日の紳士で、儒の所謂君子である。斯の點から見ると、カラ手は、實に君子の武術と云ふも過言ではない。從來空手に關する記錄が一つもなかつたのは、もの夫れ自身が秘術とされてゐた爲めにも由るであらうが、又一面には、科學的に研究されて居なかつた爲めでもあると云はねばならぬ。著者富名腰氏は、溫厚の君子人、所謂武士の尤なる者である。加之久しく教育界に在つた所から、空手の研究方法に對しても、自ら一家の見識を有してゐる、從來偏狹に陷り易かつた此の武術が、氏に依つて取捨選擇せられた點が少くない。即ち斯の意味に於て、氏は空手中興の功を錄せられて然る可き人

である。

昔假武の法令が沖繩の社會に施行せられた時代に發達した此の武術が、今軍縮の風世界の一時期を畫しやうとして居る時代に復活するのも亦機宜に適した事と謂はねばならぬ。

# 體育上より觀たる空手術

故海軍軍醫大尉　林　良齊

空手術は、永き歷史を有する沖繩特有の一種の運動法である。沖繩に於ては、此の空手術を、一種の運動法として、青年を教育して來て居たが、一面又徒手運動法として、體育的效果の推奬すべきものがある。予は以下空手術の體育的效果の概要を記述し、有志の研究資料となさんとするものである。空手術は、體育上徒手運動法及び鬪技としての二方面から、觀察する事が出來る。

(一)　徒手運動法としての空手術

空手術には、種々の型がある。是等の型を數部に別けて、種々に組み合はし、そして各種の運動系統を組織し、是等の運動系統を每日練習してその技を練らんとする空手術運動法は、一面から觀察する時は、疑もなく一種の徒手體操である。何故ならば、是等の各運動系統は「四肢の伸展や軀幹の屈伸など凡て身體を運動せしむるに、既定の速度と力とを以て、或る方向と方法とに、且つ明確な目的に向つて實施する運動」のみで出來て居るからである。

徒手體操として觀たる空手術の體育的效果は次ぎの如きものである。

(イ)　各種の運動系統は、凡て能動的で、活氣充實、頗る敏捷である。故に純然たる能動的運動法として、

循環系統や呼吸系統を迅速に亢進せしめ、新陳代謝機能を生理的に促進する計りでなく、巧緻、敏捷などの能力を養成する事が出來る。

(ロ) 空手術は脚部に種々活潑の運動法を課する計りではなく、一運動系統の實施中、度々隻脚にて體重を支へ、且つ進退するものであるから平均運動としての效果も又認めらるゝ點が多い。故に身體の平均感や、筋肉力の經濟的使用能力や又は背部筋肉力などを養成する事が出來る。

(ハ) 空手術の型を練習する事は、上文論述したる如く、一種の徒手體操を實施するものであるから、身體各部の重心點の移動は凡て生理的である。即ち各運動に伴ふ重心點の移動範圍は、身體の支撑面以內である、故に身體自身は、自己の平衡を常に自身の筋肉力のみにて支持し得る範圍內に於て、身體各部を運動するものである、從つて各部の運動には無理がない。加之空手術の型には凡ての能動的運動型式が包含されて居るから、是等の型を連續練習する時は、身體各部の發育は、調和的に各部平均するものである。

徒手體操としての空手術は、以上の如く體育上頗る有效のものである、而して一〇—六〇歲位迄には、如何なる年齡に於ても、決して體育上弊害の伴ふべきものではないが、强練習に堪ゆる年齡は一五—四〇歲時代の人である。そして各種の運動統系は練習を經たるものにあつては、器械的に實施する事が出來るから、神經力を要する程度は少いけれども、脈膊と血壓と呼吸とに及ぼす影響は多い。

(二) 鬪技としての空手術



空手術は、敵の打つ蹴る突く等の攻擊的動作を防止し、且つ進んでは敵の虛を突かんとするものであるから、二者相對して鬪技として、その技を應用する事が出來る。此の場合に於ける空手術は純然たる鬪技である。鬪技としての空手術の體育的效果は次ぎの如きものである。

(イ) 空手術の四肢及び軀幹の運動は頗る活潑で、敏捷で、且つ筋肉運動は頗る短切である。故に時間の割合にその運動は多量である。

(ロ) 色々の運動法も同時に課する事が出來る。即ち前進、側進、後進、又は跳躍運動の如きものを、自然的運動型式のもとに、無意識的に習熟せしむる事が出來る。

(ハ) 敏捷や、注意や、決斷や、沈着や、勇氣や、速力等の能力を養成する事が出來る。

(ニ) 全身筋肉は各部殆んど均等に運動せしめらるゝものであるが、殊に大腿、腹部、肩胛及び背部の諸筋肉が主として運動せしめられ、鬪技中神經力を要する程度は頗る大にして、脈膊と血壓と呼吸とに及ぼす影響は中等度である。

(ホ) 鬪技として適當の年齡は一五—四〇歲である。

# 空手の發達

元沖縄タイムス新聞主筆　末吉安恭

琉球に空手の發達した原因としては、私は琉球人が武具を持つことが禁ぜられたことが其尤なるものであつたと思ふ。人間が武勇を好むことも、又是れ自然の要求で、慾望の然らしむる所である。その慾望が薩摩の附庸となつて以來。禁厭されたのであるから、武具を用ゐざる無手勝流が用ゐられ、盛んに流行し意外に發達したのではないか。我琉球史上には前後二つの禁武政策が行はれた。一つは遠く尙眞王の中央集權の施行と共に武具を取上げられてしまつたことである。武具を取上げられてしまへば好戰的慾望がなくなつて、尙王朝の天下は安泰と思へた結果である。これは實際有效なものであつたが、外敵に對する防禦力もその爲めに弱くされて一利一害なき能はずであつた。慶長の役にもろくも打破られたのは一つにはそのお庇ではなかつたか。次の禁武政策は、慶長の役の結果薩摩の屬領となつてから薩摩が益々琉球人を武道より遠ざけ、平和優柔の民たらしむべく企てた仕事なのである。

この後者の具體的例證として私は玆に武具の賣買を禁じた文書を擧ぐることにする。琉球資料の御條書寫の中に下の如きことがある。

一、何品によらず武具の類、琉球中へ被賣渡間敷事、付仕くりの才覺曾而可爲停止事

山田民部少輔
頴娃左馬之助
島津下野守

寛永廿年二月十四日

今日武具の少ないのもこの禁令等があつたからである。中山傳信錄に蕭崇業錄を引用し、鎧武者の行列がその頃にありて今はなしと書いてあるなども、これに依つて其謎がよく解けるのである。武具さへ購入することを許されざる民族が、無手勝流の空手を學ぶやうになることは又自然の要求に基くものではないか。

斯樣に何から何まで拘束されて自由を失はれた民族は、自然に臆病となつて滑稽なことを演ずるのが屢々であつた。彼等は支那人に對しても武具のないと云ふ事を吹聽するやうにしつけられて居つた。琉球史料中にある「官生由來御入目の事」と云ふ文書の中に下の如きものがあつた。

一、武具之類御尋御座候はゞ少々有之見候得共何方にて作り候哉然與存不申由申上可相濟與奉存候

この事は餘程懸念したと見えて更に又下の如き令書が出てゐる。

一、武具之類御尋御座候はゞ琉球前々より大平の國に而武具多々無之國の用心計有之且又貢船海上用心は毎年例之通持渡申候其外は一切御禁止に而持渡不申候尤國中にても武具之類は賣買御禁止にて候事

これは政府より支那に派遣する所の官生に注意の爲め云つたものである。支那が武具の事など問ふた場合には命ぜられた通りかく答へよと云ふのである。些細なことにまで神經を惱ましてゐるさまは今から考へると馬鹿々々しくも又憐である。この臆病な民族に空手と云ふ秘密的な武術が重んぜられたのは決して無理のないことである、武具を禁ぜられたものゝ武術が即ち空手である。富名腰義珍君「空手教授書」を編纂され私にも序を徴せらる、此の一文を艸して序に代へることにした。



# 空手雜觀

早稻田大學教授　吉川秀雄

空手とは得手を持たず、徒手空拳を以て敵を征服する術の義であらうと思ふ。

唐手、即ち唐から渡つた術といふ意味だとの説もあるが、これはあとからのこぢつけに相違ない。語源から考へて、さういふ言葉が成立する理由がない。たとへば、日本手、支那手などといふ言葉が意義をなさぬやうに、單に「唐手」唐文、唐船などは意義がある。唐手、即ち唐の手(術)といふ言葉は斷然あり得ない。

この術が支那から渡つたものだといふ説は語源を「唐手」と誤解した結果さういふいひ傳へが起つたのかも知れぬ。物の起源説にはさういふ事例が頗る多い。

假りに支那から渡つて來た武術であるとしても、今はそれが支那に殘つてをらず、我が琉球に異常な發達をしたのは、琉球にこの術の達人が現はれて、これを完成したにちがひない。

印度や支那の舞樂が入つて、我が日本の雅樂發達の因をなしてゐる。併し、雅樂は單なる模倣でない。むしろ大きな創作である。雅樂は斷然我が國生粋の舞樂である。

さういふ意味に於て、支那渡來説の眞僞にはいかにもあれ、空手は琉球生粋の武術だといひ得るのである。然り琉球獨得の武術だ。

柔道、劍道は、今ではスポーツの一として取扱はれるが、實はスポーツ以上である。柔道劍道、は武士道精華が吹き込まれてゐる。

野球、庭球にもスポーツマンシップといふものがあるといふ人があるかも知れぬが、武士道の精神とはものがちがふ。野球に武士道の精神がこもつてゐたら早慶戰の紛擾等は起らなかつたであらう。

その意味に於て、空手にも武士道の精神が伴はねばならぬ。でなければ、空手は市井の豎子の喧嘩位に利用される、有害無益のものに墮するであらう。術の修練と共に精神の修養が何よりも大切であると思ふ。

空手術の特異な點の一つは、他の武術やスポーツなどゝちがつて、勝負を明白に爭ふことの出來ぬ點である。昔の宮本武藏と佐々木巖柳の勝負のやうに、生命を賭けねば、勝負を明白にすることが出來ない。

從つて、見物して興味の少ない所から、比較的普及がおくれる傾向がある樣に思ふ。合理的の道具を考案して、危險なしに勝敗を爭ふことが出來るやうになつたら、二倍三倍の速度を以て發展するであらうにと、この點を遺憾に思ふ。

## 修業者の心得

武は字義の上から見ても、二人干戈を交へたるを中に這入つて止めると云ふ意義であるから「空手」も武の一部たる以上は、能く其の意味を諒解して輕々しく手を出すやうなことがあつてはならぬ。

青年の生命は元氣である、元氣は武に依つて鼓吹される、元氣溢れて善となり、又時に惡ともなる「空手」も善用すれば身を護り、弱者も保護するが、惡用すれば風紀を亂し、人道にも逆ふ。

武は仁義の及ばざる所に餘儀なくされるもので、濫りに手を出す時は人にも欺かれ、蠻勇とも誹らる、兎角血氣盛りは手が先になり過ぎるから愼まねばならぬ。

威あつて猛からず、武もこゝまで進まなくてはならぬ、いたづらに猛々しく人を驚かして喜ぶやうでは駄目だ、聖人は大愚の如く、虛勢を張るまでは學者も武士も自分の未熟を表明してゐる樣なものだ。

進まざるは退くなり、少しく型を覺え、僅かに意味を解し、滯りなく手足が使へるやうになれば、最早天狗になり濟まし、自分免許の口看板を掲げて、天下に敵なしと慢心する者があるが、かうなればもう退歩より外に道はない。

一寸の蟲にも五分の魂のある世の中、進めば進む程口を謹まないと四方に敵を控へる、昔から高き樹に風は當る、けれども柳は能く風を受け流す、謹愼謙讓は「空手」研究者の最大美德と知るべし。

孟子曰く「天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しましめ、其の筋骨を勞せしめ、其の體膚を餓へしめ、其の身を空乏し、其の爲す所を拂亂す。心を動かし、性を忍んで、其の能はざる所を增益する所以なり。」

又云ふ「自ら反りて縮からざれば褐寬博しと雖も吾惴れざらんや、自ら反りて縮ければ千萬人と雖も吾一人行かん。」

禮記に曰く「儒は親しむべくして刧すべからず、近づくべくして迫るべからず、殺すべくして辱しむべからず、其の居所淫せず、其の飲食溽れず、其の過失微しく辨ふべくして而も數すべからざるものなり、其の剛毅なること斯くの如きものあり。」

孔子曰く「士以て弘毅ならざる可からず、任重くして道遠し、仁以て己が仁となす、亦重からずや、死して後止む、亦遠からずや。」

蘇東坡曰く「匹夫の辱めらるゝや劍を拔いて起ち、身を挺して鬪ふ、これ勇となすに足らざるなり、天下に大勇者あり、卒然之に臨むも驚かず、故なくして之に加ふるも怒らず、これ其の挾持する所のもの甚だ大にして、其の志甚だ遠ければなり。」

○拳之大要八句

人心同二天地一。血脈似二日月一。法剛柔吞吐。身隨レ時應レ變。手逢レ空則入。碼進退離逢。目要レ視二四句一。耳能聽二八方一。

○孫武子云

知レ彼知レ己百戰不レ殆。不レ知レ彼而知レ己一勝一負。不レ知レ彼不レ知レ己每レ戰必殆。

○又

百戰百勝非二善之善者一也。不レ戰而屈二人之兵一善之善者也。

○六韜に曰く

鷙鳥將レ擊卑レ食斂レ翼。猛獸將レ博弭レ耳俯伏。聖人將レ動心有二愚色一。

○林鴻年曰く

石不レ入レ水者堅也。磁不レ入レ水密也。人身內堅而外密何外感之能入。物有二一隙一物入二一隙一。物虛二一寸一水卽入二一寸一

○古法大剛論章

再論吾所レ學此法度。理二明十二時辰一。血脈安二分子午之法一。凡世人須二レ受此法一。止レ可レ救レ人不レ可レ害レ人也。有二人通レ靈者一當門之敎也。法有二輕重之殊一。故立二交接之道一以二熟能生巧一多中。則彼疎懶者必難レ用。凡有二與レ人打レ枷一比勢其理一也。尤在二迅速一。不レ可レ作二兒戲一。逢レ空則入。遇レ逃則趕。須二斟酌一。恐二失接一。旁人視レ之誚二我淺學一比勢者顧二上下左右一。分作之門。拳手之法。順則用二草逆一逆則用二確中一

遇レ逃緊追。逢レ空緊入。逆レ之則去而來。順レ之則來去。在レ上用二蝴蝶双飛一。在レ下用二撥水求魚妙手一。虎狼之勢。猛虎之威。交レ手應レ之法。在二着力認眞曉得一。剛柔虛實。剛來二柔中一。柔來二剛中一。剛刮柔發。身搖脚踏踢起身隨二千門戶一。規矩進退不レ可二量情一是也。

○解　脫　法

欲レ攻レ東先打レ西。　欲レ踏レ前務隨レ後。　欲レ轉レ身剛二柔力一。　髮被レ搏用二巨戟一。
欲レ攻レ他破二天柱一。　他倒レ地頓レ地勝。　我倒レ地入二他驕一。　若抱レ後天撞レ後。
若抱レ前遇二他陰一。　扭二我膈一捐二他面一。　殺二含泥一戟二他喉一。　臨二吾身一用二吾樟一。
離二吾身一用二逆踏一。　右欲レ捐右先梢。　脚欲レ踏手先戟。　脚踢レ高務隨レ後。
椀二吾手一用二吾梢一。　檎二吾袖一用二戟樟一。　牽二吾裾一用レ膝脫。　欲レ踏レ我只用レ撲。
欲レ踢レ他須二用レ鈎一。　他勢低勿レ用レ足。　他勢高入レ於レ中。　取二我下一乾二地上一。
取二我上一隨二地下一。　扯二我髮一用二脫甲一。　鎖二吾喉一用二大砍一。　搖步防來二他踢一。
手足相隨方無レ失。

— 終 —

昭和十年五月二十日印刷（一―二〇〇〇）
昭和十年五月二十五日發行

# 空手道教範

著作權所有



金二圓五十錢

著作權者　富名越義珍
東京市京橋區京橋一丁目八番地
發行者　大倉廣三郎
東京市京橋區築地二丁目五番地
印刷者　川崎佐一

發行所　東京市京橋區京橋一丁目八番地　大倉廣文堂
振替東京四六八六四
電話京橋五六六六

（印刷所・川崎活版印刷）

| | | |
|---|---|---|
| 文學博士 井上哲次郎著 | 日本精神の本質 | 四六判四一四頁 金一圓八十錢 送料十二錢 |
| 文學博士 井上哲次郎著 | 人格と修養 | 三六判五三七頁 金二圓八十錢 送料十錢 |
| 神宮皇學館教授 鈴木友吉著 | 我が國體と國民精神 | 四六判四三八頁 金二圓三十錢 送料十二錢 |
| 福岡女子專門學校長 鈴木暢幸著 | 我が國體と國民性 | 四六判一二八頁 金八十錢 送料十錢 |
| 立正大學教授 濱田本悠著 | 神の退場より兩登場まで | 四六判二七六頁 金一圓五十錢 送料十錢 |
| 立正大學教授 濱田本悠著 | 人類は祈る | 四六判三〇五頁 金一圓五十錢 送料十錢 |

| | | |
|---|---|---|
| 神力修成會會長 久保田眞種著 | 中氣・中風の豫防根治療法と 誰にも出來る 無量活力通入術 | 四六判二四二頁 金一圓二十錢 送料八錢 |
| 東京高等鍼灸醫學校長 坂本貢著 | 鍼灸醫學精義 上卷 中卷 下卷 | 菊判各四四〇頁以上 各冊金四圓 送料各冊二十二錢 |
| 東京高等鍼灸醫學校長 坂本貢著 | 鍼灸 マッサージ術 柔道整骨術 試驗問題答案集 | 中判三三〇頁 金二圓五十錢 送料十四錢 |
| 理學士 松島種美著 | 不思議によくきく 藥草藥木速治療法 | 三六判四四二頁 金一圓八十錢 送料十錢 |
| 榮養料理研究大家 村井政善著 | 肺の食餌健康法 | 三六判五五〇頁 金一圓五十錢 送料十錢 |
| 榮養料理研究大家 村井政善著 | 胃腸病と其の食餌健康法 | 三六判四五六頁 金一圓八十錢 送料十錢 |